

# 平成 22 年度 陵墓関係調査報告

## 陵 墓 調 査 室

### 調査の概要

書陵部陵墓課陵墓調査室においては、「周知の遺跡」や文献に記載等があることにより、遺跡の可能性がある陵墓において、保全・整備のための土木工事などを実施するに際して、その施工区域・箇所における遺構・遺物の有無を確認し、工法の決定に資するという目的のため、事前調査・立会調査を実施しているところである。

平成 22 年度においても、各陵墓監区事務所や京都事務所などの関係機関、さらには地元教育委員会とも協力し、以下の区域・箇所において調査をおこなった。その概要を記すこととする。

#### [事前調査] 3 件

本年度は、以下の 3 件の事前調査（予備調査を含む）を実施した。1 の三吉陵墓参考地についての報告文は後掲することにする。

##### 1 三吉陵墓参考地（奈良県北葛城郡広陵町）外構柵整備工事に伴う調査

畠傍監区、10・11 月実施、担当：清喜裕二・横田真吾

##### 2 豊島岡墓地（東京都文京区大塚 5 丁目）埋蔵文化財調査

多摩監区、1・2 月実施、担当：徳田誠志・加藤一郎

豊島岡墓地は、一部を除き「周知の遺跡」とはされていないが、今後とも皇族墓が営建される可能性が高いところがあるので、機会を見て埋蔵文化財の有無を調査しているところである。その報告に関しては、平成 23 年度にも、同墓地内の埋蔵文化財調査を予定していることもあり、その調査結果がまとまった段階で併せておこなうこととしたい。

##### 3 東百舌鳥陵墓参考地（大阪府堺市北区百舌鳥西之町）墳塁護岸整備工事に伴う調査

古市監区、2 月実施、担当：徳田誠志・清喜裕二

本参考地においては平成 24 年度に、墳塁護岸整備工事に伴う事前調査を予定している。そのための予算措置をおこなうに際し、積算のための客観的なデータ取得を目的とし、4 箇所の小トレンチを設け、予備調査（試掘調査）をおこなった。調査の詳細については、事前調査の結果と併せて、後日報告することとしたい。

#### [立会調査] 19 件

##### 4 桃山陵墓地（京都市伏見区桃山町古城山）御休所整備工事に伴う調査

桃山監区、9～11・2 月実施、担当：坂本博史・高濱繁伸・角野陽香

桃山陵墓地内にある御休所を整備することになり、廁棟の建物基礎石据え直し箇所、地中給排水管・電気配管埋設箇所、雨水排水管設置箇所、雨水樹設置箇所、それぞれの掘削（最深約 0.9 m）・埋戻しに立ち会った。いずれも、掘削は盛土・攪乱層内にとどまり、地山は確認できなかった。雨水樹設置箇所においては、煉瓦積の旧排水樹を確認したものの、遺構・遺物は認められなかった。

##### 5 安徳天皇阿弥陀寺陵（山口県下関市阿弥陀寺町）土壙改修等工事に伴う調査

桃山監区、10 月実施、担当：徳田誠志・寺岡慎太郎・平尾伸也

本陵の周囲には土壙が繞らされている。その南西側の壙の南半分の内側に 5 箇所の控壁を取設することになり、その掘削（深さ約 40 cm）に立ち会うとともに、正門背後の水路改修に係る掘削（深さ約 30 cm）にも立ち会った。前者は旧水路の石組がそのまま埋められており、今回の掘削深度は、この石組を取り外

しただけであった。また、後者は拝所造営時の盛土内での掘削にとどまった。ともに遺構・遺物の出土はなかった。

6 仲野親王高畠墓（京都市右京区太秦垂箕山町）外構柵改修工事に伴う調査

桃山監区、11月実施、担当：鎌谷幸一・今井隆太朗

本墓の後円部側（西側）の外構柵を改修することになり、その掘削・埋戻しに立ち会った。既存コンクリート基礎の裏側に上部から滑落した堆積土、および埋戻し土だけの掘削であり、遺物・遺構は確認できなかった。

7 仲哀天皇殯斂地（山口県下関市長府侍町 日頬寺内）駒形制札改修工事に伴う調査

桃山監区、3月実施、担当：今出伸一

参道入口にあった駒形制札を階段部前面に付近に移し、新設することになり、その掘削・埋戻しに立ち会った。地表下約20cmでコンクリートの構造物が出土したため、それを避け、床面で30cm×15cmの範囲を最深で約60cm掘削した。過去に施工した排水溝工事の際の埋戻し土であることが知られた。遺物・遺構の検出はなかった。

8 宇治陵14号（京都府宇治市木幡）門柱改修その他工事に伴う調査

桃山監区、3月実施、担当：奥野 肇・篠崎秀雄

宇治陵は、藤原氏出身の宇多天皇女御中宮温子以下20方（17陵3墓）の墓地の総称で、37箇所に分かれている。陵墓管理上、それぞれに1～37号の番号を付し、字中村に位置する1号地を総遙拝所にあてている。14号地は字南端にあり、宇治陵ではもっとも南に位置している。現状で一辺10m未満の方墳である。その門柱を改修することになり、掘削・埋め戻しに立ち会った。もっとも深く掘削した箇所（約85cm）の床面には一部、茶褐色の粘質土が認められ、地山と考えられた。その直上には、在来門柱の基礎の裏込めと思われる多数の礫が認められた。遺物・遺構は認められなかった。

9 高倉天皇皇后徳子大原西陵（京都市左京区大原草生町）ほか参道手摺取設その他工事に伴う調査

月輪監区、10月実施、担当：川下幸誠（大原西陵）、瀬尾義弘（鳥戸野陵）

上記件名には、大原西陵と鳥戸野陵（京都市東山区今熊野泉山町）が含まれているが、手摺取設については、石やコンクリート敷内のコア抜き工法であり、掘削はおこなわなかった。ただし、大原西陵において、水路の修繕の際、石張りを撤去することになり、その撤去に立ち会った。石張りの下には腐植土や赤土が認められた。遺構・遺物は確認されなかった。

10 泉山陵墓地（京都市東山区今熊野泉山町ほか）排水路整備工事に伴う調査

月輪監区、11～2月実施、担当：山本昌弘・安江竜太

本陵墓地内に位置する後堀河天皇観音寺陵と英照皇太后後月輪東北陵の間は、谷地形をなしており、そこには排水路が設けられている。今回、その排水路を整備することになり、掘削（最深で約6m）に立ち会った。上流部にあたるふとん籠設置箇所（延べ20m）においては、粘質土や砂質土など3～5層を確認した。自然堆積により形成された土層である可能性が高いように思われた。排水路整備箇所（延べ64m）は、上層に粘質土・砂質土の堆積が見られ、下層は岩盤となっていた。一部に盛土と考えられる土層が認められるが、多くはふとん籠設置箇所と同様に自然堆積の可能性が考えられる。遺構や遺物は確認されなかった。

11 後嵯峨天皇皇后姑子栗田山陵（京都市左京区南禅寺福地町 南禅寺内）石柱金具改修その他工事に伴う調査

月輪監区、1月実施、担当：藤原雅人・山本在大

本陵の拝所を囲む石柵の内、奥側に位置する向かって左隅の石柱（2本）の据直しに伴う掘削・埋戻し（深さ約0.5m）に立会った。土層は3層分が確認され、上層は表土、中・下層は既存石柱設置の際の掘方埋め戻し土であった。遺構・遺物は認められなかった。

12 二條天皇香隆寺陵（京都市北区平野八丁柳町）ほか駐車場その他整備工事に伴う調査

月輪監区、2月実施、担当：岩槻知樹・松村一成

標記件名のもと、二條天皇陵、および一條天皇火葬塚以下二火葬塚（京都市北区衣笠鏡石町）それぞれにおいて、掘削・埋戻しに立ち会った。二條天皇陵では参道入口部の車止め基礎設置（4箇所、深さ約0.7m）に立ち会い、表土、過去の工事の際の埋戻し土（二層に区分できる）、地山の可能性のある堅い粘質土を認めた。また、一條天皇火葬塚以下二火葬塚においては、南側境界沿いの外構囲障設置（5箇所、深さ約0.8m）と土堤法面復旧に立ち会った。前者では明褐色粘質土が確認されたものの、掘削面積が狭く、その性格は明確にしえなかった。後者では、土堤法面は崩落土砂を除去したのみであった。遺構・遺物は認められなかった。

#### 13 開化天皇春日率川坂上陵（奈良市油阪町）駐車場補償工事に伴う調査

畠傍監区、7月実施、担当：鎌田幹史・上原孝浩

昨年度に引き続き、三条通の拡幅工事への用地協力に伴い、参道入口部にある駐車場敷地の位置が変更するための奈良市による補償工事に係る掘削・埋め戻しに立ち会った。今年度の掘削は、舗装止め石材設置（深さ約0.3m）、および車止め設置（7箇所、深さ約0.9m）に伴うものであった。掘削は、奈良市により先行して三条通に沿って南側に設置されたU字溝設置時の埋め戻し土の範囲内であり、遺構・遺物も認められなかった。

#### 14 景行天皇山辺道上陵（奈良県天理市渋谷町）樋門その他改修工事に伴う調査

畠傍監区、1月実施、担当：本多 均・古河稔也・徳永真明・堂園雅章

本陵には高低差のある濠が繞っており、前方部正面北側から時計回りに一号濠、二号濠、…十号濠となっている。そのうち、1）前方部の一號濠から三号濠にかけての北側外堤の外構柵改修（深さ約0.5m）、2）四号濠、五号濠、それぞれの西側渡土堤にある樋門改修、3）一・二号濠間、二・三号濠間の余水吐改修、4）駐車場下水管接続（深さ約0.6m）、各々に伴う掘削・埋戻しに立ち会った。1）の基本層序は表土、近世の盛土（黄褐色粘質土）の2層のみであり、古墳築造時の外堤面は検出されなかった。2）の樋門改修箇所においては、堆積土を除去したのみであった。3）の一・二号濠間については、10cm弱の掘削であり、外構柵改修箇所で検出された近世の盛土と同じ土層と考えられた。また、二・三号濠間においては、既存の余水吐のコンクリートをはつたのみであった。4）では、掘削が既設の下水管設置時の掘削範囲内であった。いずれにおいても、遺構・遺物は確認されなかった。

#### 15 神武天皇畠傍山東北陵附属地（奈良県橿原市四条町）排水路整備工事に伴う調査

畠傍監区、2月実施、担当：平木和史・藤田 裕

綏靖天皇桃花鳥田丘上陵の東側を縦走する県道161号線と、その北側を東西に走る国道165号線の交差点付近の東南部に位置する排水路を整備することになり、その掘削（深さ約0.7m）等に立ち会った。その基本層序は表土、黒茶色土（近年の盛土）、青灰色粘質土（排水路内の堆積土）のみであり、遺構・遺物も検出されなかった。

#### 16 欽明天皇桧隈坂合陵（奈良県高市郡明日香村大字平田）参道法面復旧工事に伴う調査

畠傍監区、3月実施、担当：寺本公通・堂園雅章

本陵の参道法面が崩落したことに伴い、復旧することとなり、参道縁石の据直しに伴う掘削（深さ約0.1m）、法面へのプラ擬木柵の打込み作業に立ち会った。過去の掘削箇所の再掘削にとどまり、参道造成時の盛土と考えられた。遺構・遺物は認められなかった。

#### 17 雄略天皇丹比高鷲原陵（大阪府羽曳野市島泉八丁目）外構柵その他整備工事に伴う調査

古市監区、7・1月実施、担当：横田真吾・安岡徹悦・笹尾佳裕

報告文は後掲する。

#### 18 後嵯峨天皇后姞子分骨所（大阪府南河内郡太子町大字太子 叡福寺内）土壠改修その他工事に伴う調査

古市監区、11月実施、担当：井上 武・近藤時男

聖徳太子磯長墓の東に隣接する姞子分骨所は、四周を土塀に囲まれている。その正面内側に集水枠を設置することになり、その掘削（深さ約 0.5 m）・埋戻しに立ち会った。表土下には、礫混じりの茶褐色土と土管を確認した。集水枠設置箇所は土塀に近く、土管も埋設されていることから近年の埋戻し土と考えられた。遺構・遺物も確認されなかった。

**19 百舌鳥陵墓参考地（大阪府堺市北区百舌鳥本町）墳塁裾護岸工事に伴う調査**

古市監区、11月実施、担当：徳田誠志・佐々木靖秋・濱田武典

本陵については、平成 20 年度に墳塁裾護岸工事に伴う事前調査を実施し、その報告を本誌第 61 号でおこなったところである。平成 22 年度は事前調査の所見をふまえ、護岸工事を施工するに際し、立会調査を実施した。報告文は後掲する。

**20 安閑天皇皇后春日山田皇女古市高屋陵（大阪府羽曳野市古市五丁目）鉄扉改修工事に伴う調査**

古市監区、12月実施、担当：小走直敬・須藤周太・中野裕樹

本陵の拝所の東側に位置する鉄扉を改修することとなり、その基礎部の掘削等に立ち会った。掘削は約 0.4 ~ 0.5 m おこない、表土と既設鉄扉取設時の埋戻し土を確認した。遺構・遺物は認められなかった。

**21 安閑天皇古市高屋丘陵（大阪府羽曳野市古市五丁目）外構柵改修工事に伴う調査**

古市監区、1・2月実施、担当：小走直敬・中野裕樹

本陵の後円部東側外堤において、外構柵（長さ 60.9 m）を改修することとなり、そのための掘削（深さ 0.3 ~ 0.5 m）・埋戻しに立ち会った。既存コンクリート基礎の再利用のため、その上に堆積した土の除去にとどまった。遺構・遺物は確認されなかった。

**22 反正天皇百舌鳥耳原北陵（大阪府堺市堺区北三国ヶ丘町二丁）外構柵改修工事に伴う調査**

古市監区、2月実施、担当：佐々木靖秋・濱田武典

本陵では、外構柵改修工事を平成 21 年度に前方部西側隅角付近外堤で施工したが、22 年度は後円部北東側外堤（長さ 62.4 m）においておこなうこととなり、掘削を要する場所において、掘削等（深さ約 0.4 m）に立ち会った。既設コンクリート基礎の利用・嵩上げのため、その基礎部分を露呈させるための掘削にとどまった。遺構・遺物は認められなかった。

平成 22 年度には、上記調査以外に、以下のような調査も実施した。

〔墳丘調査〕 1 件

**23 景行天皇皇后播磨稻日大郎姫命日岡陵（兵庫県加古川市加古川町大野字日岡山）**

桃山監区、3月実施、担当：清喜裕二・横田真吾・藤井 熱・高比良裕喜・松尾康正

墳丘部を中心とした現況測量（縮尺 1/100、25 cm 等高線）を実施した。その詳細は後掲する。

〔所蔵出土品関係資料調査〕 3 件

書陵部で保管している出土品に関係する調査を、所蔵者の協力を得て以下の 3 機関においておこなった。

**24 宇治市歴史資料館（京都府宇治市折居台）**

3月実施、担当：横田真吾

宇治陵（京都府宇治市木幡）付近から出土した埴輪の調査を実施した。

**25 奈良県立橿原考古学研究所（奈良県橿原市畝傍町）**

3月実施、担当：清喜裕二

葛本弁天塚古墳（奈良県橿原市新口町）の出土品の調査を実施した。

**26 天理市埋蔵文化財センター（奈良県天理市田部町）**

3月実施、担当：清喜裕二

繼体天皇皇后手白香皇女衾田陵（奈良県天理市中山町）関連出土品の調査をおこなった。

(福尾正彦)

# 三吉陵墓参考地整備工事予定区域の事前調査

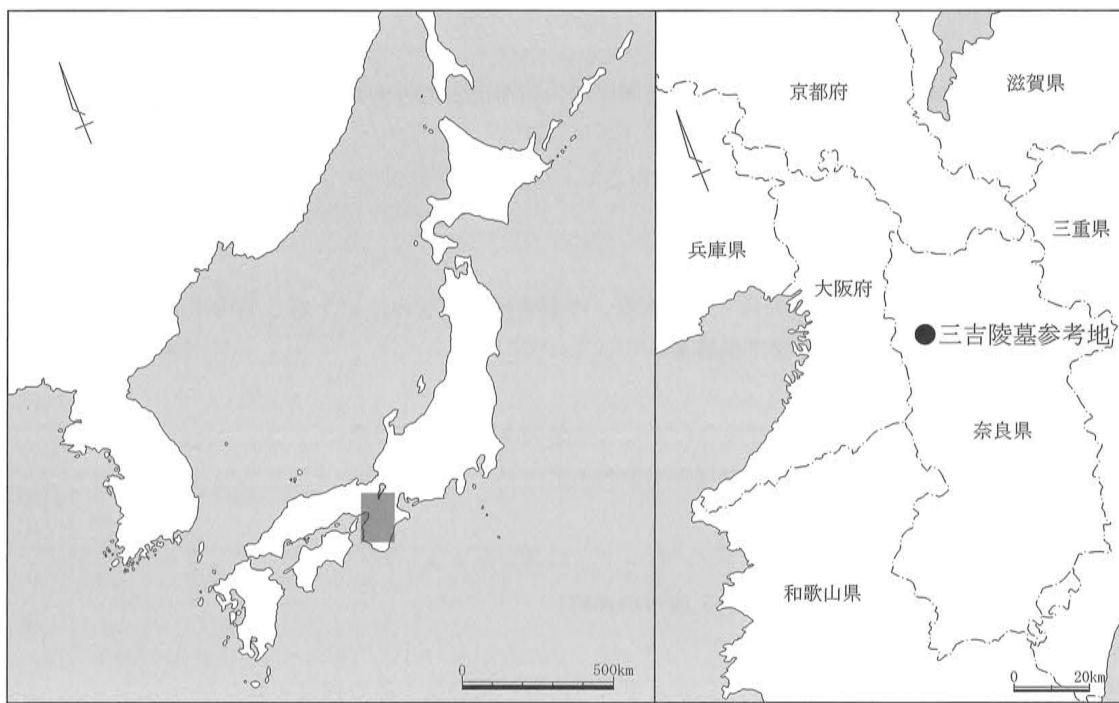
## はじめに

本参考地は、奈良県北葛城郡広陵町大字三吉に所在する、現状で全長約200mを測る前方後円墳で、遺跡名称は新木山古墳である（第1図）。奈良盆地の西側に位置する馬見丘陵の東側斜面に前方部を東に向けて築造されている。馬見丘陵上には、広く馬見古墳群が展開しているが、その中のいわゆる「中央群」に含まれる。ほぼ同規模の磐園陵墓参考地や巣山古墳と共に、古墳群中でもっとも規模の大きいもののひとつであり、巣山古墳とは造出の形態なども類似することが知られている（第2図）。

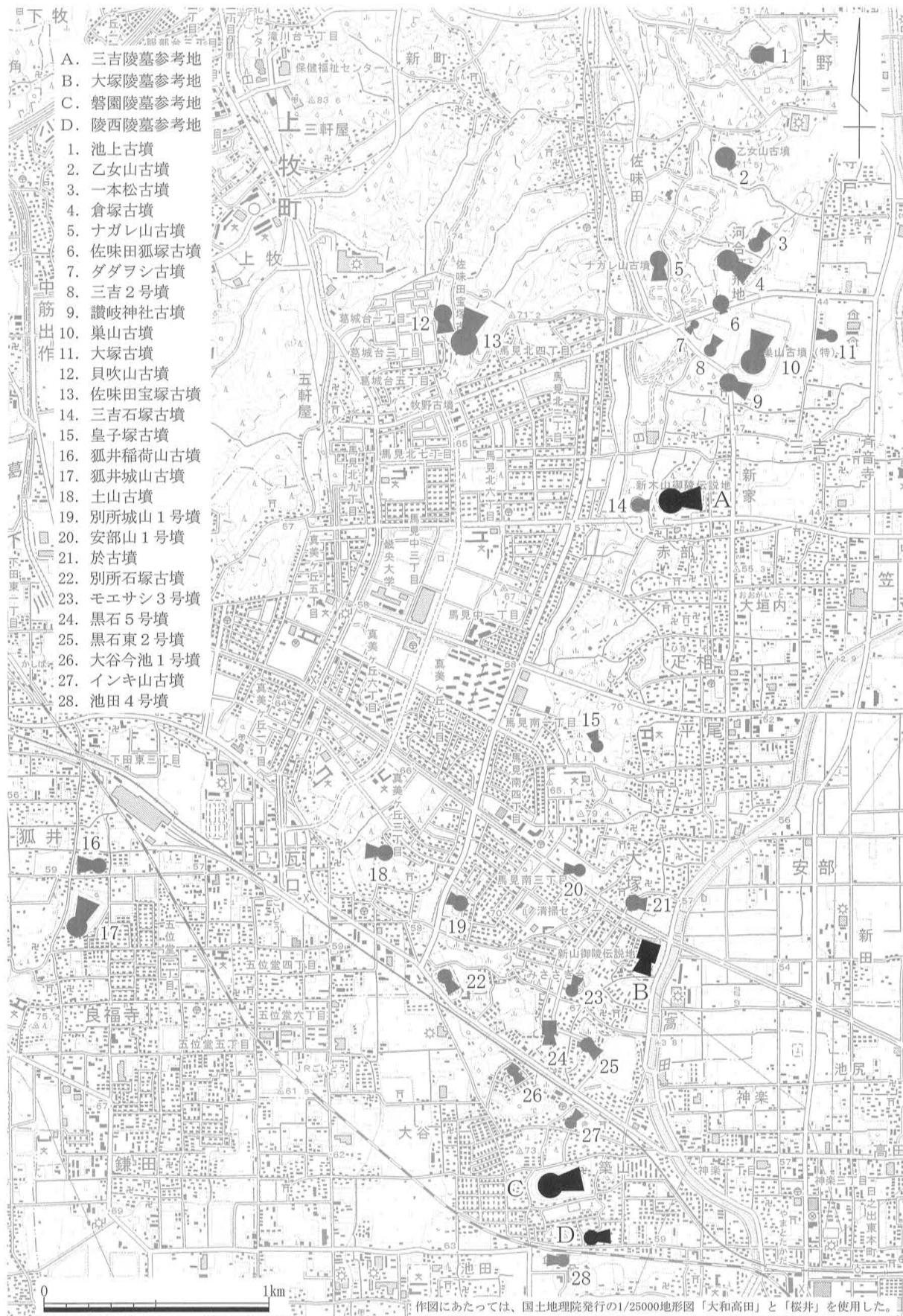
**周辺の地質・地理** 広陵町は、西南日本内帯上にあり大阪層群の下に基盤岩類として花崗閃緑岩が分布していると考えられている。西に大和川南岸から始まる、長さが南北約7km、幅が東西約3kmを測る標高70～80mの洪積台地である馬見丘陵があり、東に高田川、葛城川、曾我川により形成された、標高40～50mの沖積地が形成されている。町域の北には大和川を挟んで矢田丘陵が延び、西は二上山塊に至り、東には奈良盆地が広がる。南にはいま少し馬見丘陵が続いた後、沖積地に移行する。丘陵の内側には南北に2本の大きな谷が走り、佐味田川と滝川が流れ、さらに細かい谷が丘陵内に広がっている<sup>(1)</sup>。

**周辺の遺跡** 旧石器時代の遺跡は現在未確認であるが、隣接地域では確認されている。縄文時代も多くはなく、中世遺跡として著名な箸尾遺跡で後～晩期の土器などが出土している。弥生時代は前～中期を中心に幾つか知られるが、箸尾遺跡以外に顕著な事例が認められていない。古墳時代については、やはり箸尾遺跡で住居跡が多数検出されるなど、集落の状況が少しずつ明らかになりつつある。そして、馬見古墳群が丘陵東縁部を中心に展開しており、前期～後期まで連綿として築かれている。前～中期に比較的大形で著名な古墳が多いが、中～後期古墳は、これらの古墳の近隣に築造される場合もあれば、異なる丘陵上に築かれるものもある。本参考地が位置するいわゆる「中央群」には、本参考地から北に約600m離れて巣山古墳に至り、さらに北方に、ナガレ山、倉塚、乙女山などの各古墳が築かれている。

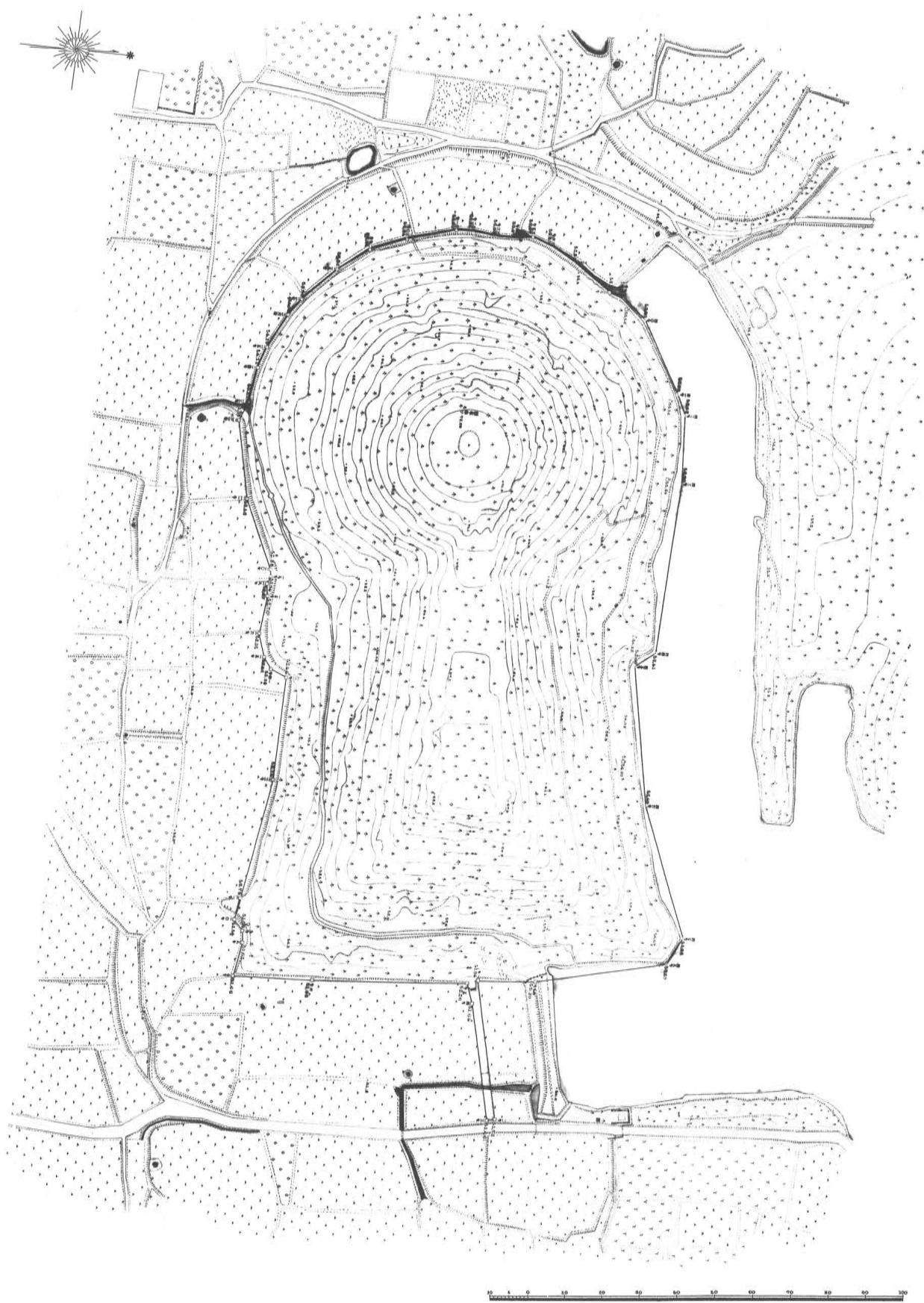
**来歴と現況** 本参考地は明治19年6月に御陵墓伝説地として治定され、これに先立つ明治15年3月には、後述する勾玉・管玉合わせて7点が出土し、明治17年5月に宮内省により買い上げられている。その



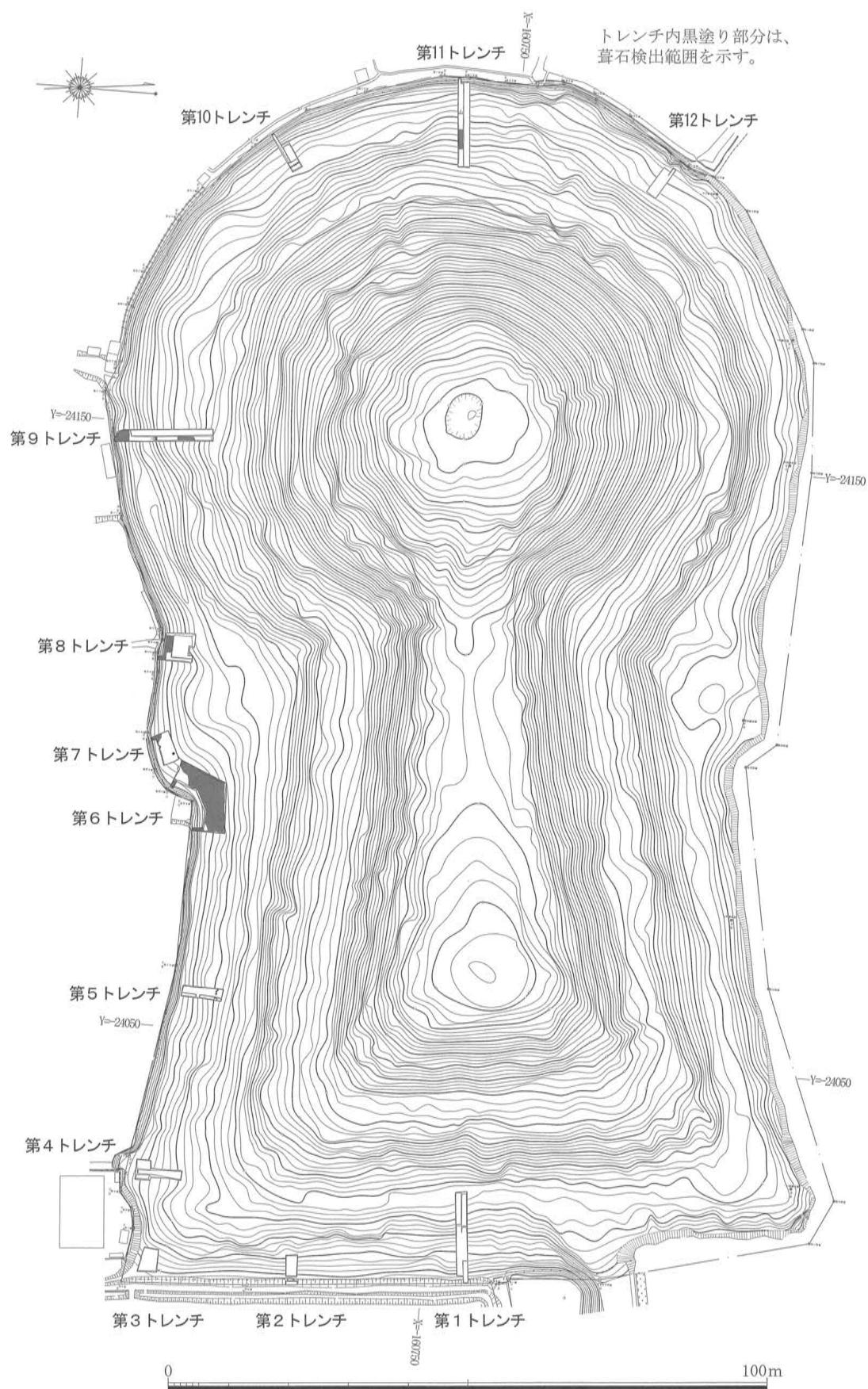
第1図 三吉陵墓参考地 概略位置図 (1/25,000,000、1/2,000,000)



第2図 三吉陵墓参考地 周辺古墳位置図 (1/25,000)



第3図 三吉陵墓参考地 陵墓地形図 (1/1,500)



第4図 三吉陵墓参考地 トレンチ配置図 (1/1,000)

後大正 15 年以降に陵墓参考地と改称されて、現在に至っている。昭和 3 年には陵墓地形図が作成されて（第 3 図）、墳丘と周濠の状況が図化された。境界線は墳丘裾を廻っており、前方部前面の一部が東側に参道として伸びている。周濠部分は、現在民有地となっているが、墳丘北側は拡幅されて溜池（今池）になっており、東・西・南側は耕作地や借地公園として利用されている。なお、本参考地に飛地は付随していない。

本参考地の隣接地では、1987・1988 年と 1990～1991 年に広陵町教育委員会により調査が行われている。この一連の調査により、周濠の外側を廻る外堤の様相が判明している。調査成果によると、墳丘の南側から西側を回り込み北側にかけて外堤の痕跡を確認しており、外堤幅は約 20～22 m を測る。外堤盛土は南側のトレンチでのみ確認されており、西～北側にかけては確認されていない。高さは 3 m 以上が推定されている。

また、外堤盛土を行う前に地山の窪地を整地している箇所も確認されている。後円部の西～北側にかけては外堤の外側を画する溝が確認されている。地形が高まっているため、地山成形のみで造成されたものである可能性が高い。溝そのものは狭く浅いものであることから、多少は削平されていることも考慮しておく必要があろうか。また、埴輪片も少量出土しており、埴輪列が存在していた可能性が指摘されている。

周濠幅は南側で約 22 m、西側で約 18 m を測る。南側の周濠床面は中世には削平されていたと考えられ、築造時の遺物のみを含むごく初期の土層は確認されていない。北側は溜池となっており周濠内部の状況は不明であるが、外堤側で浚渫土の堆積がみられることから大規模な浚渫が行われていたことが窺われる。土層の状況や遺物の様相から、平安時代中期を皮切りに近世に至るまで、複数回にわたって行われたことが判明している<sup>(2)</sup>。

また、外堤の西に接して帆立貝形の三吉石塚古墳があり、1987 年と 1995 年の調査の結果、前方部で墓道が検出され、まとまった埴輪も出土している。そのほか、北側外堤上には、ノノワ古墳群が形成されている。

このように、周辺の調査成果や第 3 図からも判読できるように、本参考地には、境界外ではあるが周濠と外堤を伴っていることが知られている。

**森本六爾氏の調査** 上記のような近年行われた発掘調査のほかに、1923 年 8 月 6 日には、森本六爾氏が本参考地を訪れ、現地踏査と聞き取り調査を行っている（第 5 図）。記載された内容は、それぞれに現在では確認できない情報が含まれており興味深い<sup>(3)</sup>。

なお、第 3 図の掲載にあたっては、調査記録の所蔵者である森本徹氏、ならびに寄託先の奈良県立橿原考古学研究所附属博物館のご高配をいただいた。記して感謝申し上げたい。

以下、後述する本調査の成果とも照らし合わせながら、概要を記しておきたい。

**〔埋葬施設〕** 埋葬施設については、一定期間経過後の聞き取りであるため、数値をはじめそれなりの錯誤が含まれている可能性を考える必要があろう。

主軸に平行する竪穴式石槨であり、規模は長さのみが記録される。約 3～4 m を測るようである（記録では 10 尺もしくは 13 尺か）。天井石は凝灰岩のようである。壁体は安山岩質の割石積みで、石材の大きさは 30 cm 以内、厚さは 3～6 cm を測るようである。床面は白色石英質の小石が敷かれ、朱も見られたようである。厚さは不明である。明治 20、30 年頃に天井石が中央から折れて窪みが生じたことから発掘されたようであるが、玉類の出土が明治 15 年であることから、天井石破損の時期も明治 15 年のことと推測される。

**〔その他の遺構〕** 墓輪列の平面略測図があるが、墳丘における位置は前方部頂上に近い南側とあるので、前方部南側の第 2 段平坦面の埴輪列であろうか。本調査の結果から見ると、前方部側面の墳丘第 1 段平坦面（第 4～5 トレンチ付近）では、比較的堆積土が薄い。場所によっては地表面に露出していたものと考えられる。埴輪の大きさや配列の間隔などは、本調査で確認された埴輪列の状況と合致するものである。

葺石については、前方部で明らかに認められたようであるが、現在の墳丘上では明確に視認できる状態ではない。本調査では前方部第 1 段斜面の広い範囲が大きく削られたと判断されたため、葺石の残存状況は非常に悪いと推定される。第 6 トレンチ付近では比較的良好であったため、造出に近い位置で確認されたのかかもしれない。

〔遺物〕 墳輪片が至る所に散乱していたようである。現在は、くびれ部付近で多少の埴輪片を認めるが、全体的にはそれほど顕著ではない。埋葬施設から勾玉、小玉（棗玉か）、管玉が発見されている（第28図）。

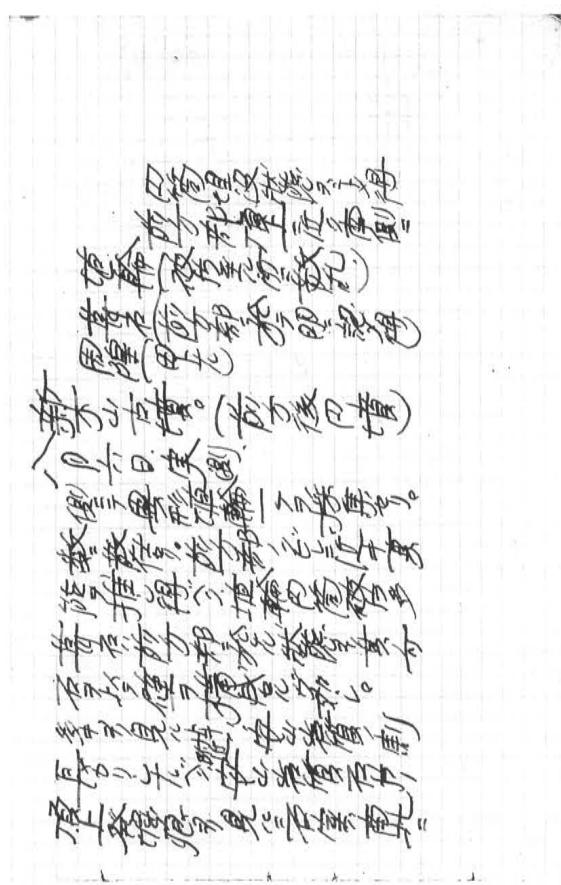
調査の経緯 本参考地については、これまで大きな工事が行われることがなかったため、事前調査や立会調査が行われたことはなかった。

しかし、墳丘の東・西・南側の境界線沿いに設置されていた侵入防止用のコンクリート杭が、経年により多くの箇所で破損・倒壊してきたため、新たに土留板を伴う外構柵へ改修する必要が生じた。そのため、工事に先立ち事前調査を実施することで、遺構・遺物の残存状況等を確認して、適切な工法の検討に資するデータを収集することとなった。

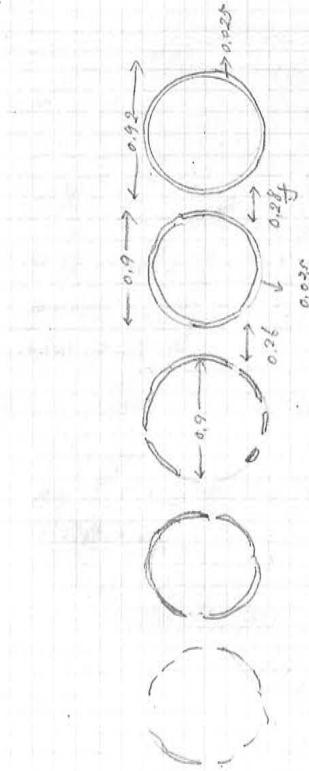
調査は、平成22年10月15日～11月26日の期間で実施した。調査期間中には、陵墓管理委員の視察をいただきご指導・ご教示を賜った。また、葺石については後掲のとおり、奥田尚氏に調査いただいた。

また、当庁の調査と並行して、広陵町教育委員会により第9・10・11トレーニングの延長線上の周濠部で調査が実施された。その際には、広陵町教育委員会文化

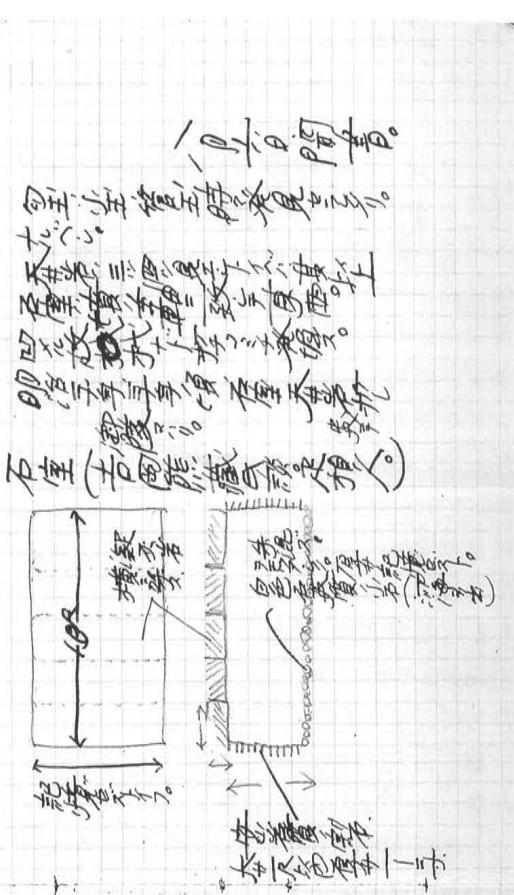
23.《22の読み》 [別所山古墳]/新木山古墳（前方後円墳）



第5図 三吉陵墓参考地 関係資料 [奈良県立橿原考古学研究所編2011]



24. (埴輪列出土状況略測図) [新木山古墳]



25. 八月六日聞書 (新木山古墳石室内状況略図)

財保存センターの井上義光・名倉聰両氏に、調査所見を含め多くの御教示を賜った。

なお、その際に作成された図面や過去の調査所見についてもご提供いただき、本報告において一連の図面として提示するなど、本参考地の理解に反映することができた。記して感謝申し上げたい。 (清喜裕二)

## 1 トレンチの設定と基本的な層序

### (1) トレンチの設定

本調査の範囲は、外構柵改修工事を行う範囲であり、墳丘北側の溜池に接する範囲は落水ができなかったため、調査対象となっていない。トレンチは 12 箇所を設定した(第 4 図)。おおむね墳丘を主軸で 2 等分した南半分の範囲を中心に、後円部の一部で北に回り込む。

まず、陵墓地形図をもとに主軸線を決定して、その線上にトレンチ断面がかかるように、第 1 ・ 第 11 トレンチを設定した。そして、前方部前面中央を第 1 トレンチとして、墳丘裾に沿って西へ順次トレンチ番号を付している。後円部を北に回り込む範囲に第 12 トレンチが位置する。

なお、トレンチは主軸線上、あるいは主軸線に直交する位置にあたるトレンチでは長めに設定して、ある程度まで段築の状況等が把握できるよう努めた。しかし、樹木の繁茂等の事情により、トレンチの規模や位置は現地の状況に応じて調整したところもある。

### (2) 基本的な層序

本調査で認識できた土層の堆積状況は、共通するところがあるものの、後述するとおり後世の改変が顕著なために、全体を通して同様であるとは言い難い。以下に土層の性格と特徴などを述べる。

I 層 表土。黒褐色の腐植土。現在の墳丘上面を覆う腐植土層である。

II 層 後世の盛土。含まれる遺物の年代などから、近世末頃と考えられる。具体的には、今池の造成期前後の可能性が高いと考えられる。特に第 2 ~ 4 トレンチと第 6 ~ 9 トレンチの範囲で顕著に認められる。特徴が共通するところもあるが、基本的にはトレンチごとで異なっている。第 2 ~ 4 ・ 6 ・ 8 トレンチは第 1 段斜面およびテラス面を覆っているので、きめ細かい黄褐色～橙色の砂質土で、シリトブロックを多く含む特徴がある。一方、第 9 トレンチでは墳丘第 2 段斜面を覆っており、色調・土質は類似するが砂質土主体である点で異なっている。また、盛土そのものと考えられる土層(II a)と、下層の盛土上面が流出して 2 次的に堆積したと考えられる土層(II b)に区別できる。II b 層は薄い堆積が複数重なる状態を示す場合が多く、II a 層どうしの間に形成されている箇所もある。前方部前面の第 1 ・ 2 トレンチや、くびれ部の第 8 トレンチ付近に顕著である。きめ細かい黄褐色～赤褐色砂質土を主体とする。

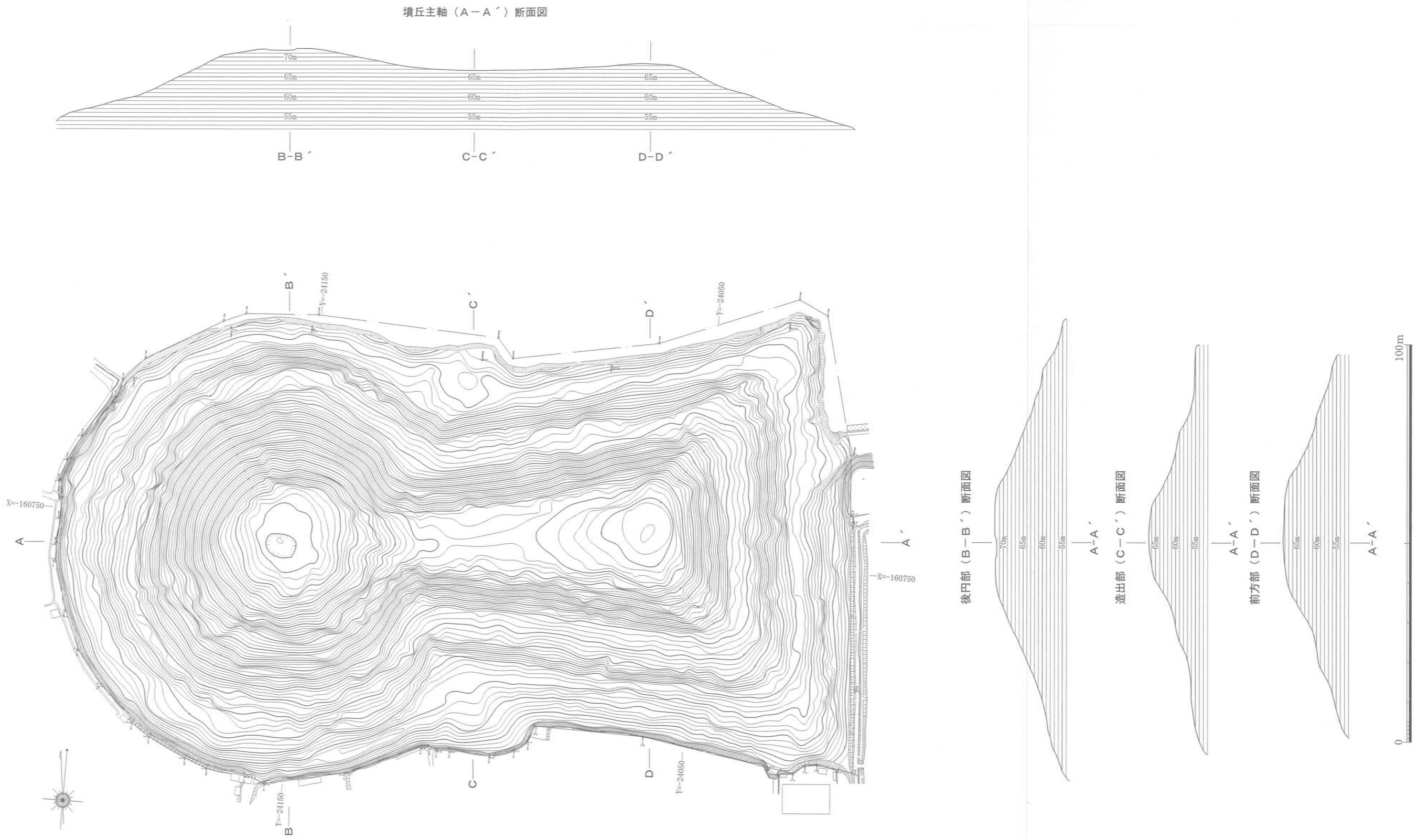
III 層 後世の盛土。今池の造成期より古い時期に行われた可能性のある盛土。II 層との時期差など、細かい区別は難しい。盛土そのものと考えられる土層(III a)と、盛土が流出して 2 次的に堆積したと考えられる土層(III b)がある。土層の特徴は、II 層と類似している場合が多い。

なお、中世遺物が少量ながら認められるため、III 層の下に中世期の盛土が存在する可能性があるが、本調査区内で明らかなものは確認されていない。

IV 層 築造後に最初に墳丘面を覆った土層。自然流出により葺石やテラス面を薄く覆っている。きめ細かい明褐色の砂質土である。遺物は築造に伴う埴輪や土器に限られる。

V 層 墳丘盛土。比較的きめの細かい砂質土を主体とする。地山に比べるとやや軟らかい。色調は褐色～黄褐色を呈しており、第 11 トレンチではオリーブ色も確認される。地山の特徴によく類似しており、現地が丘陵地であることからも、地山成形で生じた掘削土を盛土として使ったものである可能性が高いと考えられる。

VI 層 地山。堅緻な砂質土を主体としており、黄橙色～黄褐色を呈する。第 1 ・ 9 トレンチではオリーブ色主体の粘質土が認められる。 (清喜)



第6図 三吉陵墓参考地 墳丘平面図・断面図 (1/1,000)

## 2 各トレンチの状況

### (1) 墳丘の現況

各トレンチの記述に入る前に、墳丘全体の現況についてみておきたい。本調査に併せて、新たに業者委託のTS測量により原図のスケール1/200、等高線間隔25cmの現況測量図を作成した(第6図)。これにより、墳丘の現況を細かく把握できるようになったといえよう。

一見して3段築成の前方後円墳であることがわかる。段築の状況は北側面でより明瞭である。各テラス面を明瞭に確認できる。一方、南側面は、墳丘第1段を中心に等高線の乱れが認められる。とくに後円部は広い範囲で乱れが顕著である。墳丘南側は、周濠部が早くから耕作地として利用されていることから、これらの開墾等に伴って、墳丘の南側面に変更が加えられたのかもしれない。

細かくみていくと、前方部南側面の第1段テラス面が不明瞭となっている。両コーナーも巡回路が設定されていることなどから、明瞭な角は失われている。後円部ではさらに乱れが顕著となり、第3段斜面の上位から等高線の乱れが激しく、第1・2段テラス面とともに、所々で途切れるような状況となっている。

裾部に関しては、北側面の大半が今池に面していることもあり、墳丘斜面の荒れている南側面に比べても、北側面の傷みの方が顕著といえる。特に前方部前面裾を比較すると今池の堤を挟んで、北側の裾が本来の裾より大きく後退している。南側面の墳丘第1段の幅と比較すると、北側面は2/3程度となっており、今池に面した北側面の裾部全体が同様の状況にあると推定される。また、南側面の裾部では、前方部南東隅に民家が迫っており、明らかに墳丘が削られている状況にある。また、後円部では第9トレンチの西10m付近から第11トレンチの北15m付近の範囲で、開墾により墳丘裾が削られているような状況を認めることができる。

なお、後円部頂のやや南寄りには、長軸約7.5m×短軸約5mの楕円形のくぼみが認められる。後述する勾玉などは、ここから出土したと考えられている。

### (2) 前方部

**第1トレンチ(第7図、図版14)** 墳丘主軸上にあたり、前方部前面の中央に位置する。主軸上であるため、ある程度の墳丘構造を把握する目的で、長さ14m×幅2mの規模で設定した。最終的には北壁沿いに東へ長さ1m×幅0.8mの規模で境界線際まで拡張した。トレンチの西端付近は現状でテラス状の平坦面が南北に続いており、墳丘第1段テラス面が確認されることが予想された。調査の結果、墳丘第1段斜面と第1段テラス面を反映していると考えられる面を検出した。

層位は、表土(I)がトレンチ表面を覆い、西端には、陵墓地形図でも確認される墳丘北側の溜池に通じる浅い溝が認められる。その下に後世の盛土(IIa)が確認できる。これら3つの盛土の間には、特に裾付近で2次堆積のような薄い土層が確認されている(IIb)。このことから、盛土は一度に行われたのではなく、2次堆積の間層を挟みつつ、多少の時間差をおいて行われたことが推定される。ただし、旧表土は形成されていないことから、長期間を見積もることはできないと考えられる。

裾付近のIIb層には転落してきたと思われる石材が含まれていたが、標高53~54mの間には2m×2mの範囲で石材が集中していた。ある程度の整った面で検出されたため、一見すると葺石のようにも見えるが2次堆積土上に広がっているため、本来の葺石とはいえない。また、斜面上の盛土は比較的薄いものであるが、標高55m以上で認められるIIa層は、上面がほぼ水平な地山(VI)の上に約1mの厚さで堆積している。均質な土層で一気に盛土されたと考えられる。シルトブロックを多く含む堅緻な土層である。

地山(VI)は、テラス面と墳丘裾付近で確認した。テラス面付近ではほぼ水平に検出されたうえ、標高は約55mである。後述する第5トレンチの埴輪列検出レベルとほぼ同じであることから、本来のテラス面である可能性が考えられた。しかし、5mを超える幅で平坦面が確認されたにもかかわらず、埴輪列が確認できなかった。埴輪列がさらに西壁の奥にあると考えることもできようが、VI層直上に第9トレンチのテラス面で認められたような築造後間もない段階での流土も確認できないことから、本来のテラス面は多少の削平

を受けていると判断しておきたい。この場合、埴輪列の遺存についてもやや否定的な見方となる。しかし、第5トレンチの埴輪列検出レベルとほとんど差がないことから、本来のテラス面の高さに近いものと考えられる。

墳丘裾は、現状ではトレンチ東端付近である。最終的に断割りを行ったトレンチ東端床面で地山は斜面から水平面に移行する兆候がみえる。削平の程度は不明であるが、本来の墳丘裾の位置と現状の位置は、大きくはずれないと考えられる。

なお、残存する墳丘裾とテラス面の比高は約3.5mである。多少の削平が考えられるものの、テラス面が一面地山であることから、少なくとも墳丘第1段の多くの範囲は地山成形によると判断できよう。斜面の角度は削られているものの比較的一定であり、その角度は約25度を測る。

遺構は、築造時のものは確認されなかった。先述のとおり、第1段テラス面とおぼしき平坦面も第1段斜面も先述のとおり、築造時の状態を留めているとはいえない。結果的には、本トレンチにおける本来の墳丘外表面はすべて削平されていると考えられる。

遺物は、盛土、流土内から円筒埴輪、土師器の破片のほか、陶磁器、瓦や瓦器の破片が出土している。

**第2トレンチ**（第8図、図版15） 前方部前面の第1トレンチと第3トレンチの中間付近に位置する。長さ5m×幅2mの規模で設定したが、既設の侵入防止柵設置部分にあたる幅約0.6mについては倒壊の虞があったため、掘り下げていない。トレンチの設定箇所周辺は墳丘斜面の乱れが顕著であったため、改変の加わっていることが予想された。調査の結果、本来の墳丘斜面は失われており、削られた後の地山面を検出した。

層位は、墳丘裾に近い場所であり、表土（I）の下に流土が複数堆積している状況が認められ（IIb）、第1トレンチの状況と類似している。流土の起源となっている盛土などは特定できない。地表面から約0.6mで地山面に到達するが、流土であるIIb層が直接地山上に堆積しているため、本来の墳丘斜面は既に削られていると判断できる。よって、遺構は残存していない。トレンチ東端の長さ0.6m×幅2mの範囲では、断面で地山が水平に移行している状況が認められる。

遺物は、盛土、流土内から円筒埴輪、土師器、須恵器の破片のほか、陶磁器、瓦、瓦器の破片等が出土している。

**第3トレンチ**（第9図、図版15） 前方部前面の南端に位置する。現地の状況に合わせて、長さ4m×幅2.5～3mのやや不整形な台形として設定した。トレンチの南側には隣接住宅が迫っており、トレンチ東側とともに墳丘裾付近は崖状を呈している。調査の結果、本来の墳丘斜面は失われており、削られた後の地山面を検出した。

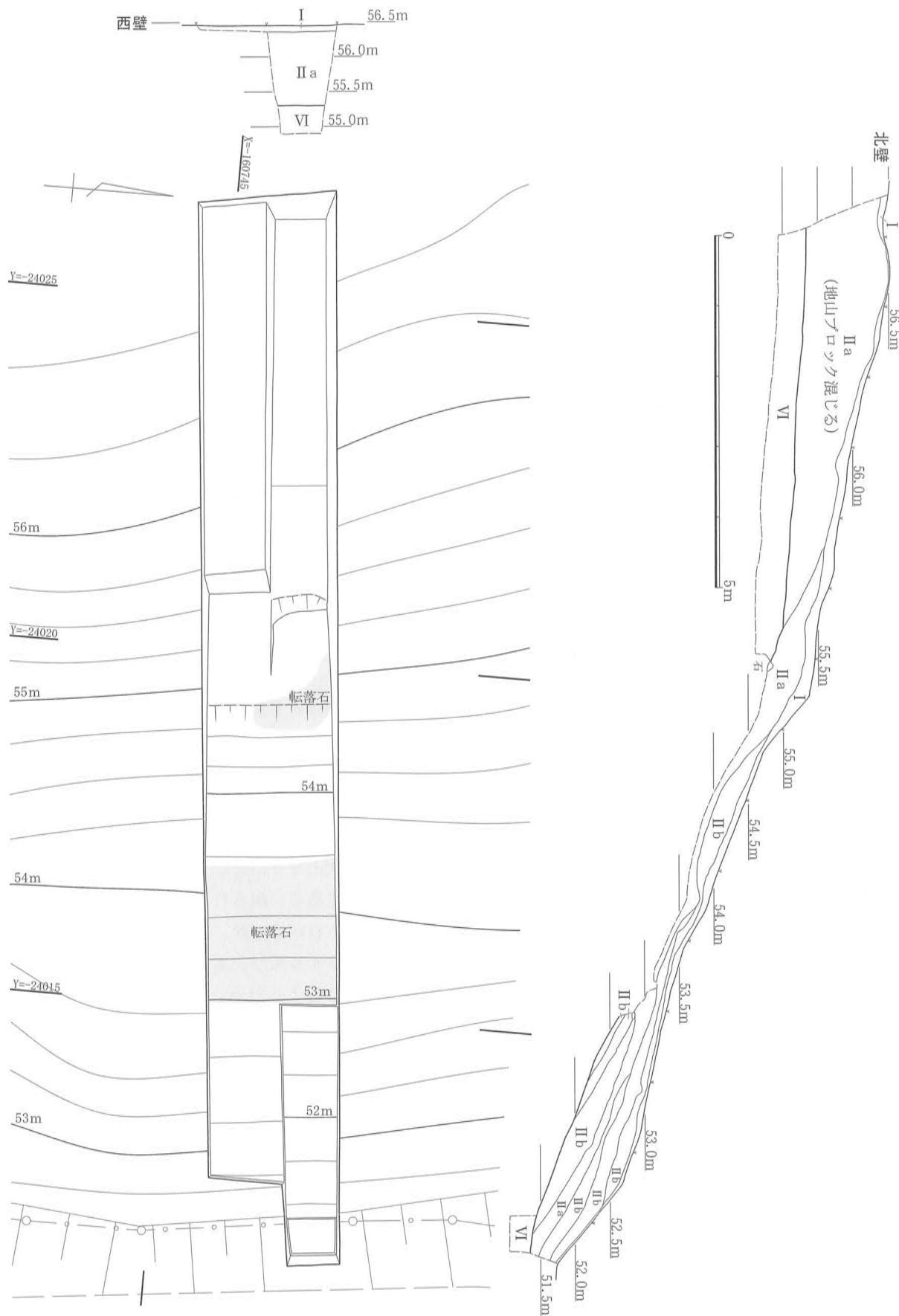
層位は、表土（I）の下に後世の盛土と考えられる土層が認められるが（IIa）、検出範囲が狭く流土である可能性も考えられる。その下に流土と考えられるIIb層が認められる。上方の盛土が流出してきたものであろう。IIb層は墳丘盛土（V）や地山（VI）上に堆積しているが、墳丘盛土、地山上面とともに葺石などは残存していなかったため、既に本来の墳丘斜面は削られた後にIIb層が堆積したと考えられる。

遺構は、墳丘盛土、地山上面に0.6～0.4mの範囲で石が集積しており、陶磁器類が石の間に見られた。

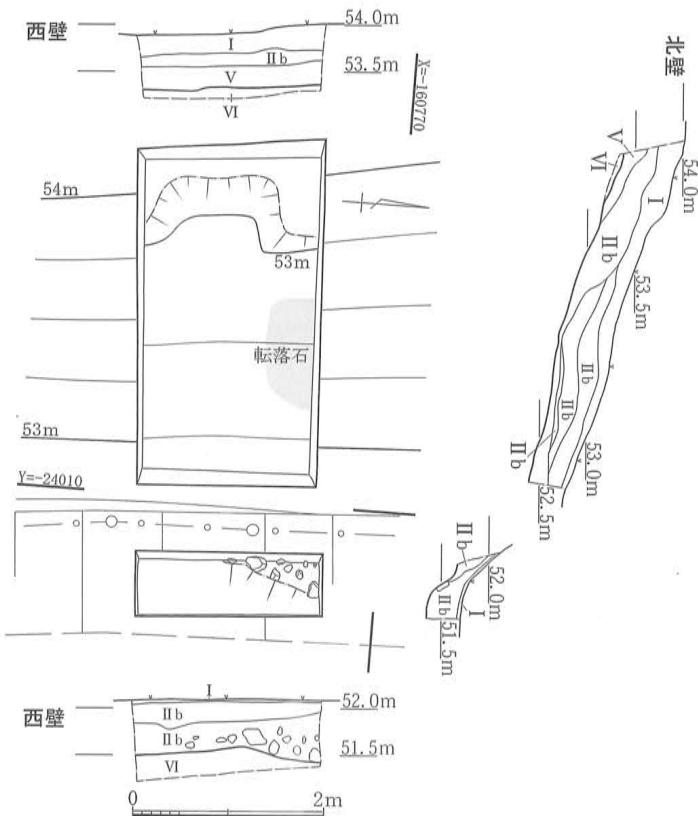
遺物は、墳丘盛土、地山上のIIb層で埋まっていた集石範囲内を中心に、円筒埴輪、土師器、須恵器の破片のほか、陶磁器、瓦、瓦器の破片等が出土している。埴輪の割合が少ない。

**第4トレンチ**（第10図、図版16） 前方部南側面東寄りに位置する。トレンチ周辺は傾斜が非常に緩やかである。土堤状の高まりが周濠側に突出しているが、これが本来の遺構であるか否かを確認するために、長さ7.6m×幅1.6～3.2mで設定した。裾に向かう南側が深くなったため全面の掘り下げは行わず、最終的には長さ7.6m×幅1～1.6mの範囲を地山面まで掘り下げた。調査の結果、削られた地山面とトレンチ南端で葺石を検出した。

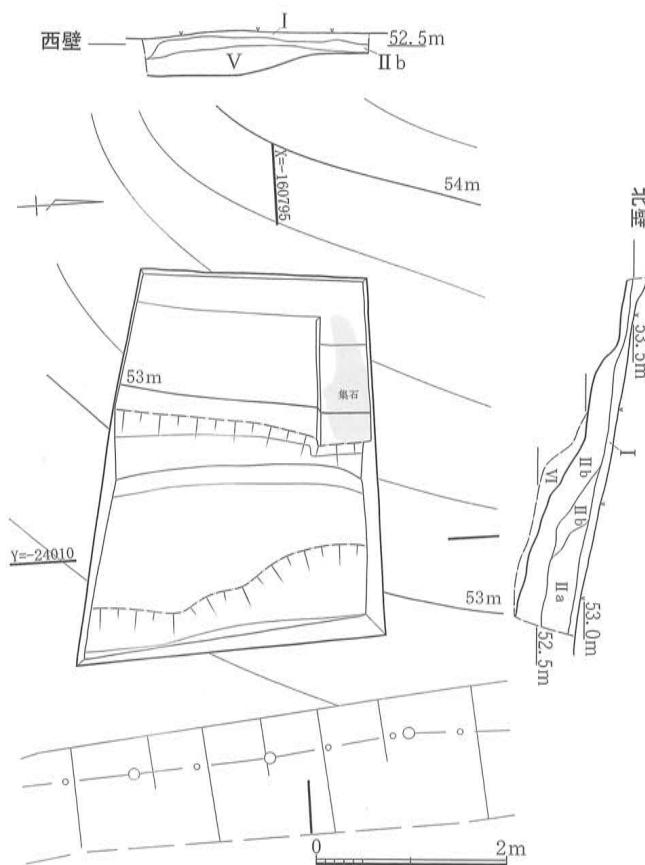
層位は、表土（I）の下に、盛土（IIa）と流土（IIb）が堆積する。北壁周辺のIIb層は細かい層状の堆積が認められることから流土と考えて問題ないが、その他は流土か盛土かの判断が難しい。いずれにしても



第7図 三吉陵墓参考地 第1トレンチ平面図・断面図 (1/80)



第8図 三吉陵墓参考地 第2トレンチ平面図・断面図 (1/80)



第9図 三吉陵墓参考地 第3トレンチ平面図・断面図 (1/80)

厚さがそれぞれ 0.2 m ~ 0.8 m を測り、比較的大きな単位で確認できる。また、各層の堆積にかかる時間経過は不明であるが、北壁付近では明らかな流土として認識できることから、その II b 層を挟む上下の層は少なくとも連続して形成されたものではないことがわかる。同様に、II b 層が削られた後、表土直下の II a 層が形成されていることから、両者にも若干の時間差を想定することが可能であろう。いずれにしても、突出部のように見える地形は、少なくともトレンチ南端において厚さが 2 m に及ぶ、後世の盛土が堆積することにより作られていることが判明した。

もっとも下では墳丘盛土 (V) を検出した。北壁付近では断面をみるとわかるように、東に向かってやや深めに削られている。トレンチ南端で葺石が検出されたが、検出面である標高 52.1 m 付近から上の斜面が、葺石も含め大きく削られている。葺石を覆う土層が III a 層である。残存する葺石が確認できたことから、現状突出部に見える地形は墳丘とは無関係であることが明らかである。

遺構は、先述のとおり葺石を確認している。しかし、トレンチ南端でわずかに検出できただけであるので、詳細は不明である。削られた際に動いたと考えられる石が多いが、壁際の石の並びなどを観察する限り、本来の状態を維持していると考えられる。長さ 10 ~ 20 cm を測る石材が主体を占める。

遺物は、円筒埴輪、土師器、須恵器の破片のほか、磁器、瓦の破片が出土している。

(清喜)

#### 第5トレンチ (第11図、図版16)

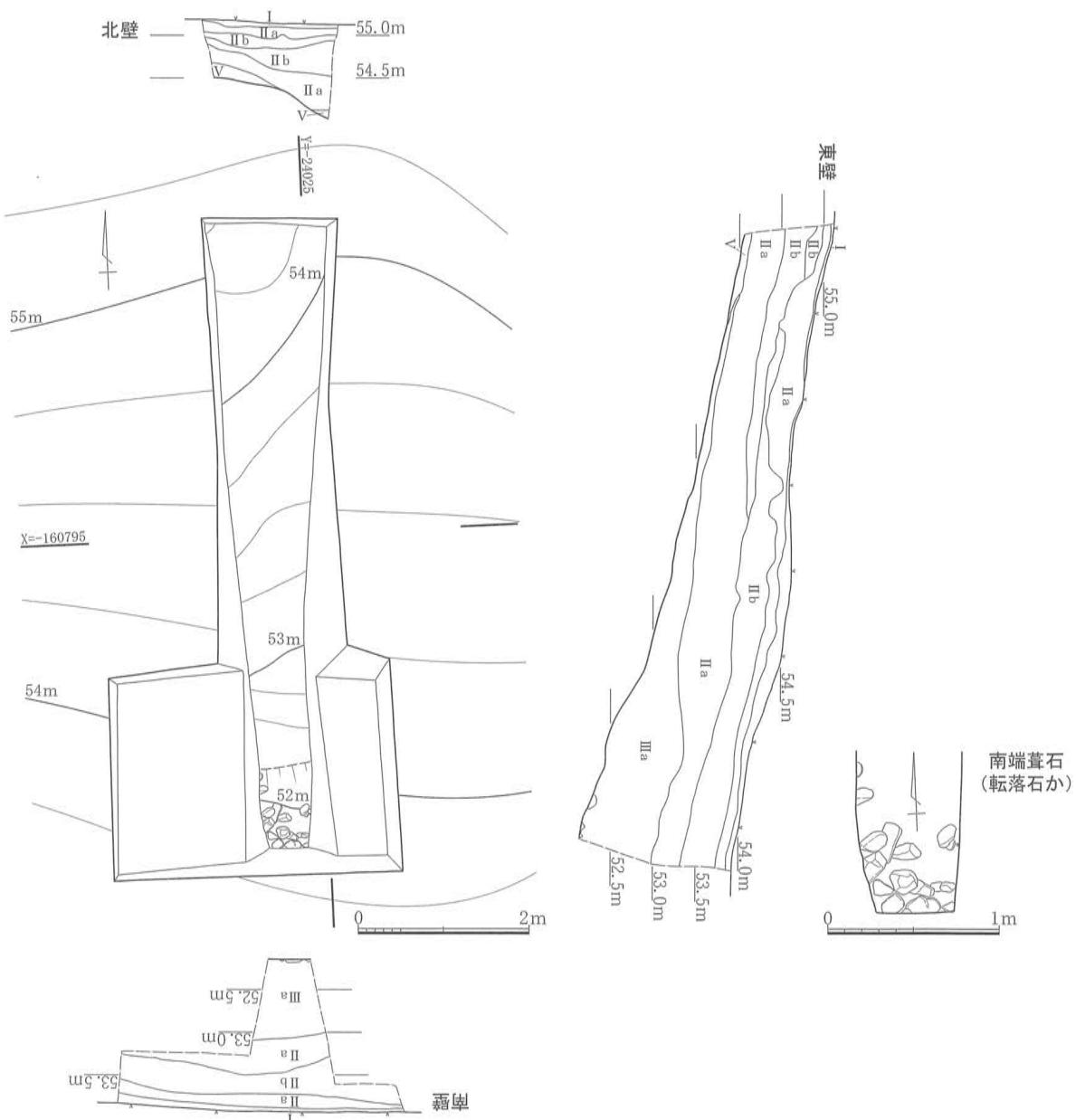
前方部南側面に位置する。トレンチ周辺は第4トレンチと同様に傾斜が非常に緩やかである。現地の状況に合わせて、長さ 6.8 m × 幅 2 m で設定した。

トレンチ北側の表土直下で円筒埴輪列が検出されたため、検出面までの掘削を

行った。最終的には、埴輪列下層の状況および境界際の地下状況を確認するために、東南端を裾側に長さ1m×幅0.5mの規模で拡張し、東側断ち割りで墳丘盛土の一部を掘削した。

層位は、表土(Ⅰ)の下に流土(Ⅱb)が2層、流土下に墳丘盛土(Ⅴ)が2層、その下に地山(Ⅵ)が堆積する。流土上層は厚いところで0.4m、流土下層は厚いところで0.3mを測る。流土内には、葺石の転落石の可能性がある石が少量入る。流土下の墳丘盛土は、上・下層ともに約0.2m堆積が認められるが、葺石が検出されなかったことや傾斜角度が緩やかであることから、後世の削平や崩壊のため、本来の斜面形状をとどめていないと考えられる。最下層の地山は、トレンチ北側で南へ急に下がるが、そこからは南へ緩やかに下っている。

遺構は、先述のとおり円筒埴輪列を確認している。現状で標高約55mに位置する。埴輪は全部で4個体である。西から3番目と4番目の埴輪の間は、1個体分ほど空いている。埴輪列が全体的に南側へ大きく傾いていることから、ここは古墳築造当初より埴輪が無かったのではなく、墳丘の崩壊などにより埴輪が無くなつたと考えられる。



第10図 三吉陵墓参考地 第4トレンチ平面図・断面図 (1/80、1/40)

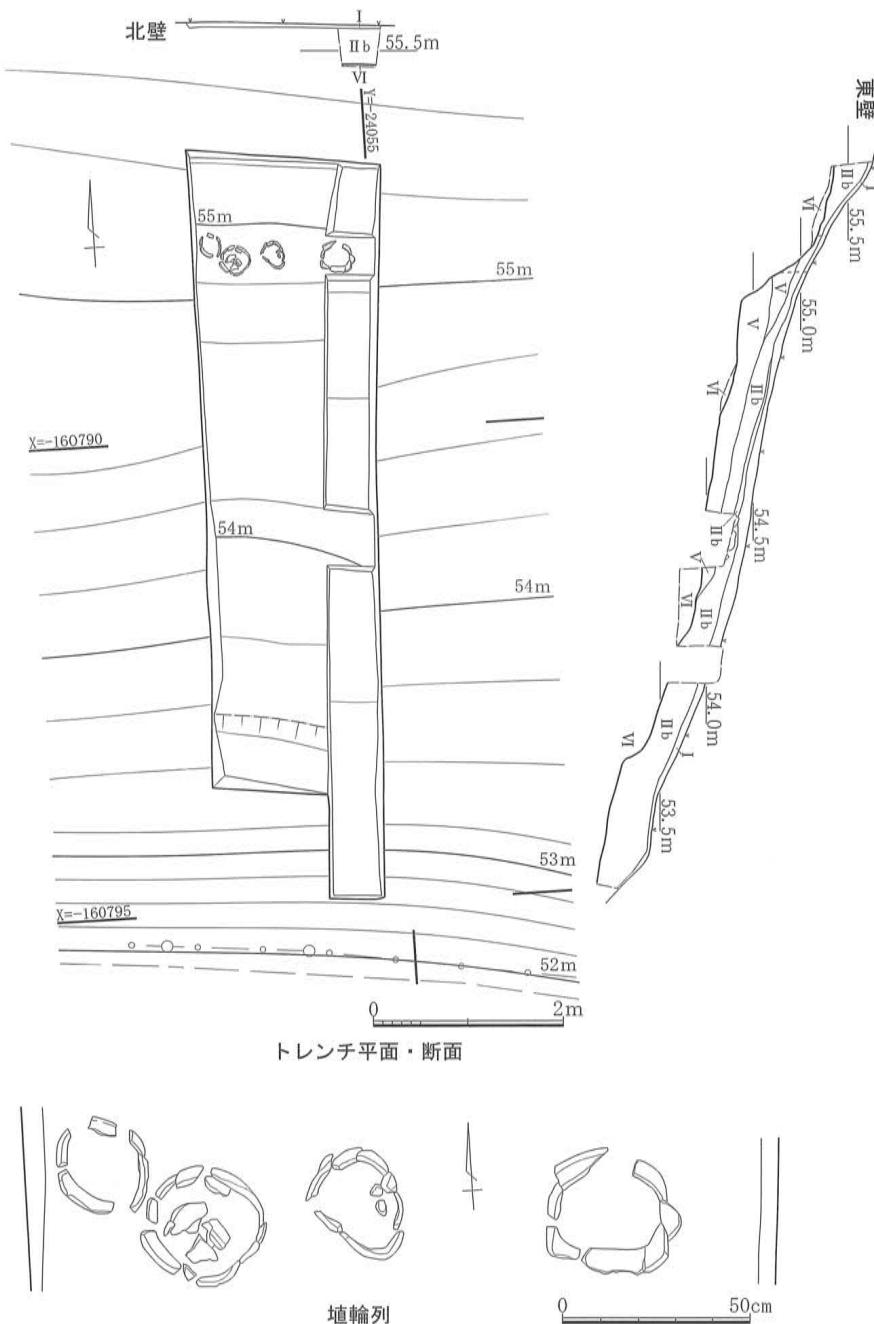
また、埴輪列は、各個体が直線では並ばず、それぞれが本来の位置にないことは明らかである。ゆえに、本トレンチで検出した埴輪列は、築造当初の位置ではなく、多少なりとも移動して現在の位置となったものである。葺石は、検出されなかった。

遺物は、円筒埴輪のほか、磁器、瓦の破片が出土している。

(横田真吾)

### (3) くびれ部・造出

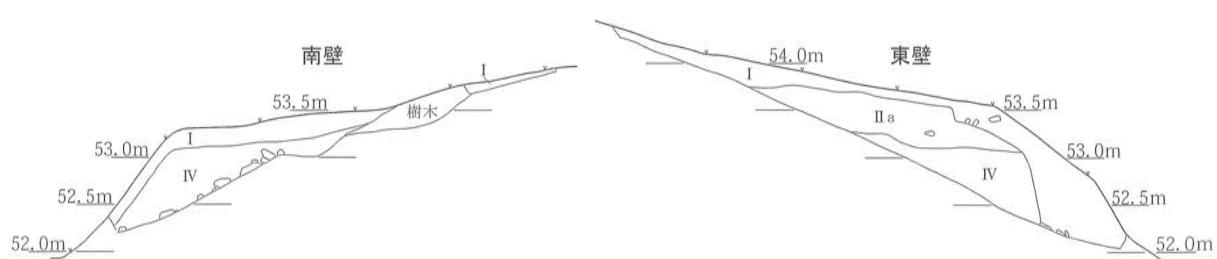
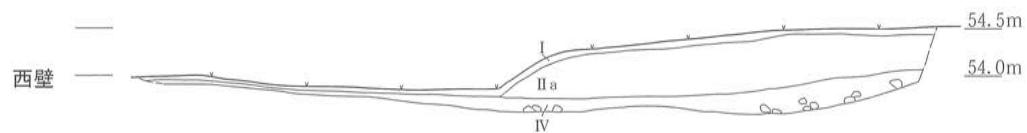
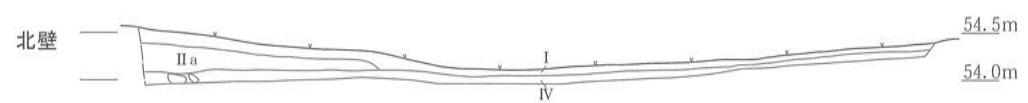
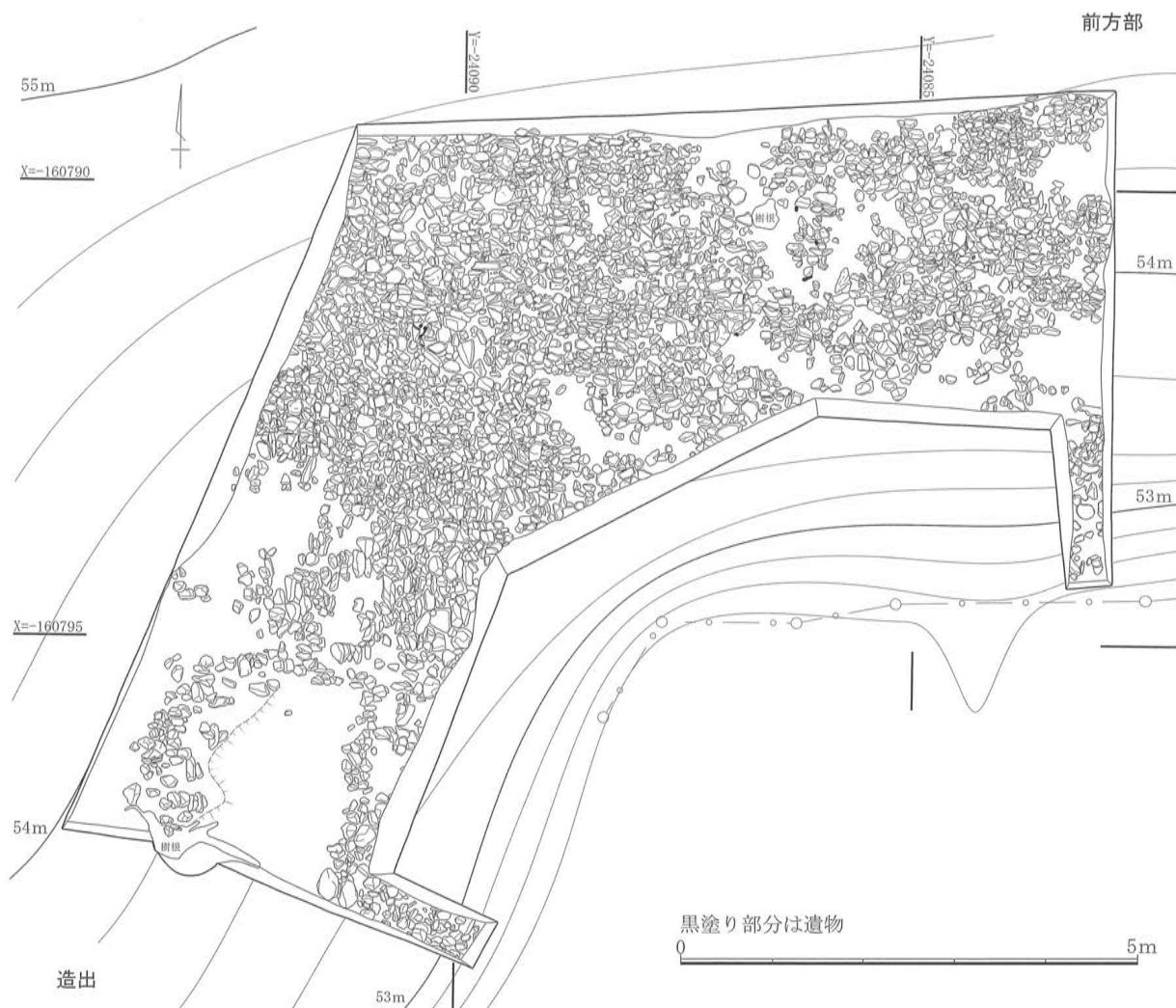
**第6トレンチ**（第12、13図、図版17、18） 南側造出と前方部南側面の屈曲部付近に位置する。屈曲に沿って「く」字形の形態となっている。長さ3.5m×幅は墳丘側で前方部・造出とも8mの規模で設定した。最終的には、前方部側東端を長さ1.8m×幅0.6m、造出側南端を長さ1.2m×幅0.6mの規模で拡張して、境界際の葺石の残存状況を確認した。前方部と造出の接合部にあたる墳丘第1段斜面にあたる範囲であるが、調査の結果、前方部と造出それぞれに葺石の残る第1段斜面を検出した。



第11図 三吉陵墓参考地 第5トレンチ平面図・断面図 (1/80、1/20)

層位は、表土(I)の下に、盛土(IIa)と流土(IV)が堆積する。IIa層からは近世末の染付が出土しており、江戸末期の盛土である可能性が高い。シルトブロックが目立つが全体に均質な粘質土である。一気に盛土されているような状況である。IV層は、葺石を直接覆う流土である。標高53m付近で上面が平坦となっており、堆積後改変が加えられたことがあったと考えられる。本トレンチでは、確実に地山と認識できる土層は検出されていない。

遺構は、墳丘第1段斜面の葺石を検出した。詳細は後述することとして、ここでは概略を述べておきたい。地形的に奥まっている屈曲部で葺石の残存状況は良好であるが、特に造出の南側は石の失われている範囲が広い。樹根の影響が強く、失われていないまでも動いていると考えられる石



第12図 三吉陵墓参考地 第6トレンチ平面図・断面図 (1/80)

が多く、葺石面に凹凸が目立つ。検出範囲の最高地点は標高 54.2 m 付近である。第 5 トレンチの埴輪列の高さが標高 55 m 付近なので、第 1 段斜面の天端までは到達していない。一方、最低地点は標高 52 m 付近である。葺石はまだ下に続くと考えられるが、境界線の外側に出てしまうので裾までは確認できない。墳丘斜面の傾斜は約 25 度である。

遺物は、盛土 (II a) からは、円筒埴輪、形象埴輪、土師器、須恵器の破片のほか、陶磁器、瓦、瓦器の破片等が出土している。磁器の中には近世末の磁器が含まれており、盛土の時期を考える材料となる。また、葺石を覆う流土中 (IV) からは、円筒埴輪、形象埴輪の破片のほか、土師器甕、高杯の破片が出土している。造出上面から転落してきたものであろう。

**第 7 トレンチ** (第 14 図、図版 19、20) 翼状を呈する南造出のコーナー部分に位置する。長さ 2.5 m × 幅 5 m の規模で設定した。葺石が検出されたことから、残存状況を確認するために、最終的に西南隅を裾側に長さ 0.8 m × 幅 0.6 m の規模で拡張した。造出上面の遺構と造出斜面の検出が予想されたが、調査の結果、造出上面に作られたと考えられる埴輪の埋設遺構と残存する造出斜面を検出した。

層位は、表土 (I) の下に、盛土 (II a) と流土 (II b) が認められる。盛土は、第 6 トレンチの II a 層と一連のものであると考えられる。流土は、後述する埴輪の埋設遺構を覆っている。そして、これらを除去すると遺構検出面となるが、これは墳丘盛土 (V) と考えられる。標高 54 m 付近で平坦面が認められるが、周囲には流出した状況や削られた痕跡が認められるため、本来の造出上面はトレンチ内には残存していない可能性が高い。また、標高 53 m 付近から墳丘裾に向かって急激に下っていくため、隣接耕作地の開墾などにより削られていると考えられる。

遺構は、トレンチ北東隅付近で埴輪の埋設遺構を検出した。この遺構についての詳細は後述したい。トレンチ南西一帯では、葺石を検出した。東寄りの範囲ではすべて失われている。高さはおおむね標高 53 m ~ 54 m の範囲で認められる。一見すると疎らではあるが、明瞭な石の並びが確認できる箇所もあるため、石の移動や転落はあるものの、ある程度本来の葺石を反映していると判断できる。

遺物は、埴輪の埋設遺構から円筒、蓋形、朝顔形（壺形）埴輪の破片が出土している。流土や盛土からは、円筒埴輪、形象埴輪、土師器の破片のほか、磁器や瓦の破片が出土している。

**第 8 トレンチ** (第 15 図、図版 21) 後円部と南造出の接合部付近に位置する。長さ 5 m × 幅 5 m の規模で設定した。北壁の一部は巨大な樹根が存在するため一部掘り残している。最終的に、境界際の葺石の状況を確認するために、南東隅を裾側に長さ 1 m × 幅 0.5 m の規模で拡張した。くびれ部の状況が判明することが予想されたが、調査の結果、くびれ部墳丘第 1 段斜面を検出した。

層位は、表土 (I) の下に、盛土 (II a) と流土 (II b) が交互に堆積するような状況が認められ、厚さが 1 m に及ぶ。特に北壁中央付近では細かい 2 次堆積が認められるが、これは下がくびれ部付近であるため、微地形としては谷部にあたっていると考えられ、流土が溜まりやすいことが要因かとも思われる。北壁をみると、III b 層から掘り込みが認められるなど、堆積の途中にも人為的な改変が加わっていることがわかる。墳丘裾に近づくと葺石が残存するが、その状況から標高 53 m より上位では、本来の墳丘斜面が大きく削られていると考えられる。各盛土の間に旧表土は見られず、比較的短期間のうちに盛土されたと考えられる。

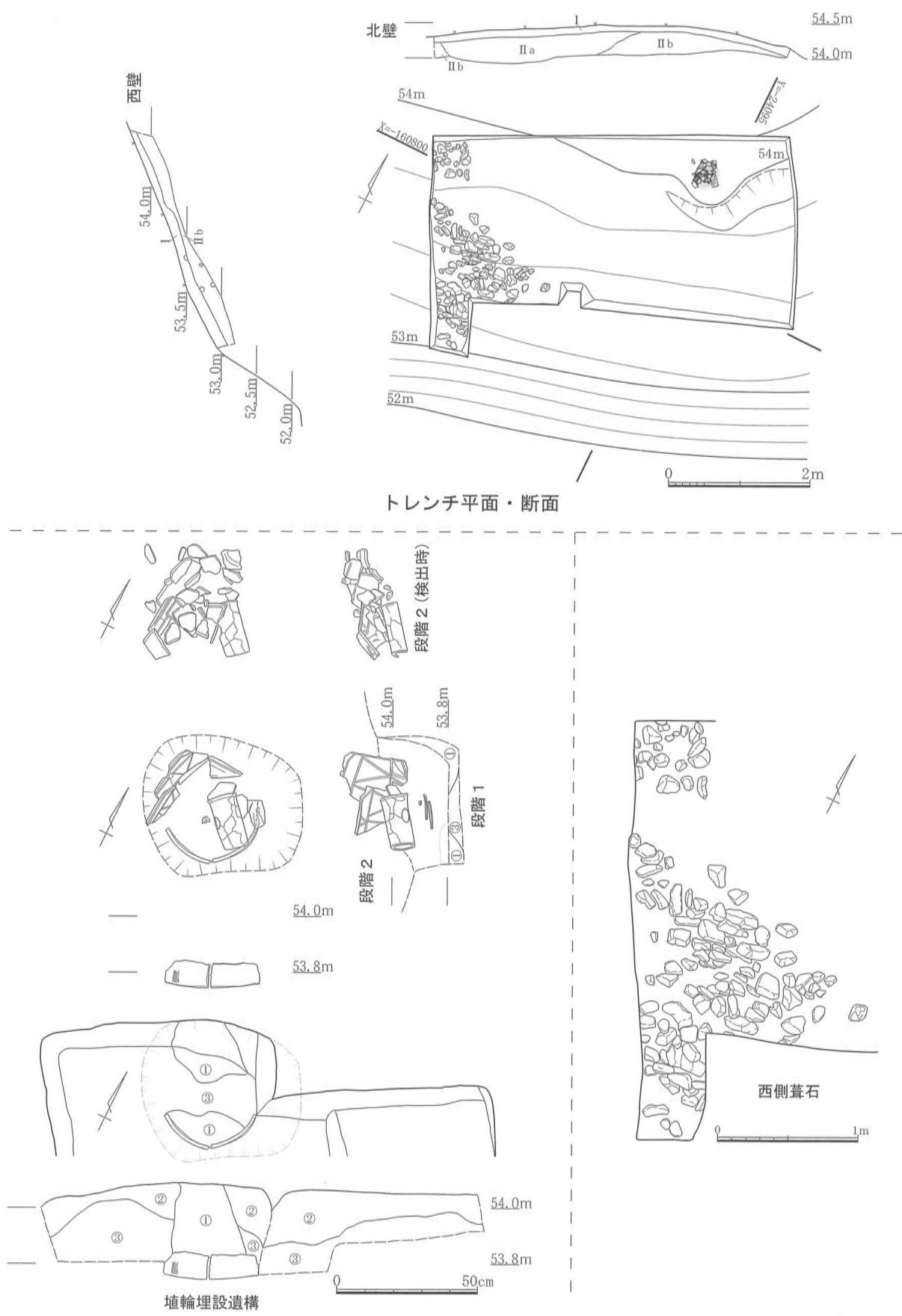
遺構は、くびれ部の墳丘第 1 段斜面の葺石を検出した。くびれ部最奥部の裾が検出されており、裾の標高は 52 m 付近となる。詳細は後述するが、裾付近は他のトレンチの葺石では見られない大形の石が使用されている。葺石の方向を見る限り、くびれ部最奥部からいたん南に裾が延びるため、石の方向は南北方向である。一方、拡張区の葺石の方向は東西である。大きく見ると翼状ではあるが、くびれ部付近で 1 辺存在する可能性があり、造出の西側にもコーナーをもつ可能性が高い。非常にいびつな台形という表現もできるような形態となる可能性がある。

遺物は、盛土、流土内から円筒埴輪、形象埴輪、土師器、須恵器の破片のほか、陶磁器、瓦、瓦器の破片等が出土している。

(清喜)



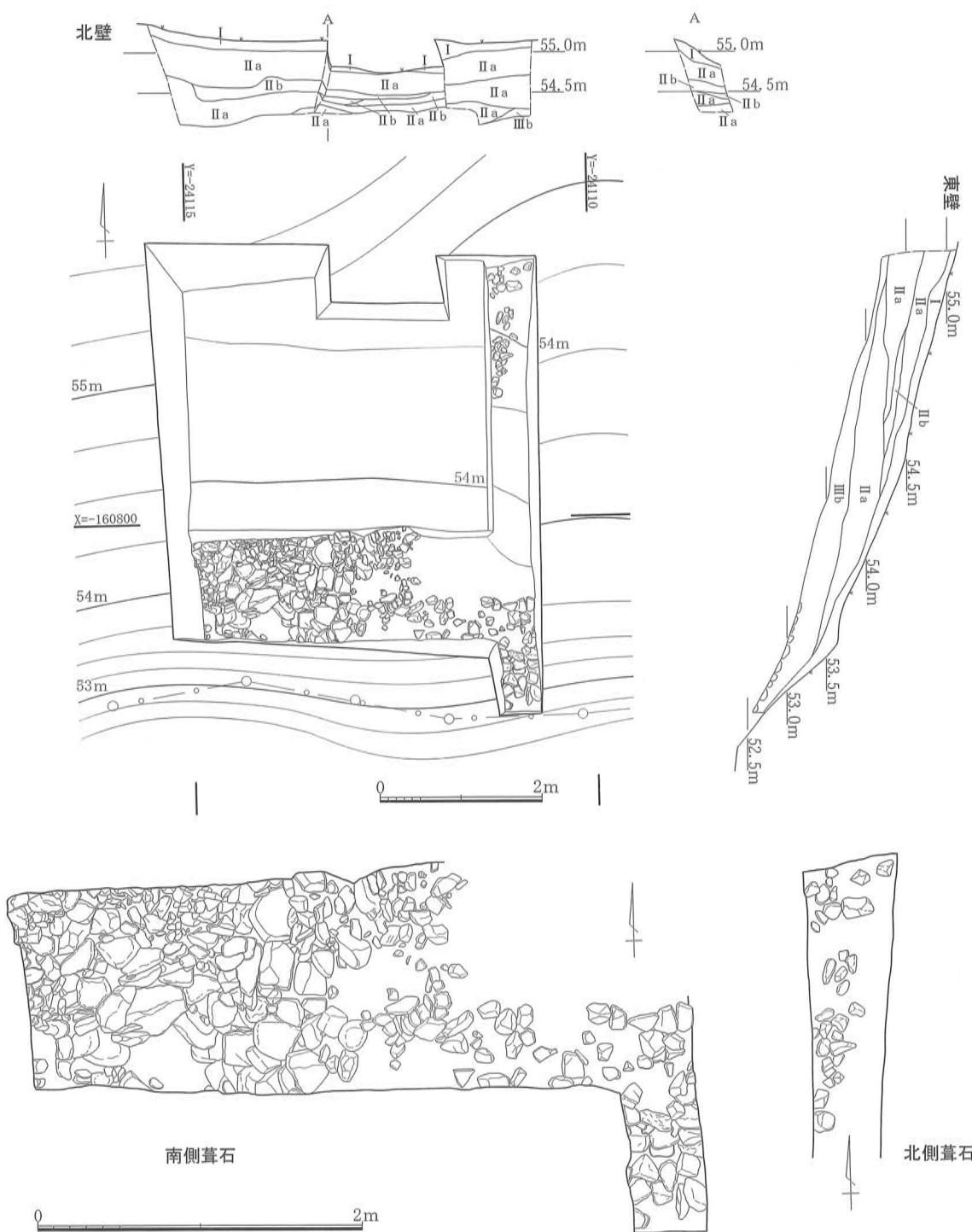
第13図 三吉陵墓参考地 第6トレンチ平面図 (1/40)



第14図 三吉陵墓参考地 第7トレーンチ平面図・断面図 (1/80、1/40、1/20)

#### (4) 後円部

第9トレンチ（第16、17図、図版22、23） 後円部の南側中央に、墳丘主軸と直交するように位置する。長さ16m×幅2mの規模で設定した。東側半分の掘削により、墳丘第1段目斜面、第1段目テラス、第2段目斜面を検出したため、西側半分の流土と盛土の大半を掘り残している。最終的には、境界際の葺石の状況を確認するために、南東隅を裾側に長さ0.5m×幅1mの規模で拡張した。ここにも葺石が残存していると予想した通り、比較的良好な残存状況の葺石を検出した。



第15図 三吉陵墓参考地 第8トレンチ平面図・断面図 (1/80, 1/40)

層位は、表土（I）の下に、流土（II b）、盛土（II a）、流土（III b）、盛土（III a）、流土（IV）と、流土と盛土が交互に堆積するような状況が認められ、厚さが1.2mに及ぶ。葺石直上の流土（III b）は、拳大から人頭大の礫を多量に含み、それらの礫は、葺石の転落石である可能性が高い。トレンチ南裾に近づくと葺石が残存するが、その状況から標高54.5mより上位では、本来の墳丘第1段目斜面が削られていると考えられる。第1段目テラスは、地山の段差を解消するように、墳丘盛土（V）で成形されている。

遺構は、墳丘第1段斜面の葺石、第1段目のテラスと円筒埴輪列、第2段目の葺石を検出した。葺石について、第1段目斜面の葺石は、トレンチ外まで続いているが、基底石は検出されていない。第2段目斜面の葺石は、基底石より斜面上半まで検出しているが、斜面は途中で削平を受けている。ゆえに、第2段目のテラス状に見える部分は、墳丘本来の形状では無い。

葺石については、1段目斜面と2段目斜面上半と比べた場合、2段目斜面基底石より下半は、人頭大の明らかに大きな石材を使用している。墳丘斜面の角度については、残存部分で計測して、第1段目が31度、第2段目が28度となっている。第1段目のテラスについては、標高約56.2m、現存長が約4.5mであるが、第1段目斜面の傾斜角度から考えて、本来は約6.8mあったと考えられる。

円筒埴輪列については、円筒埴輪3個体を検出した。埴輪が全体的に南側へ傾いていること、崩れた墳丘盛土内にも埴輪片が含まれることから、本来の位置より多少なりとも南へ移動していることは明らかである。ゆえに、本トレンチの円筒埴輪列は、5トレンチのものと同様、厳密には築造当初の位置には無い。

円筒埴輪列の埴輪は、検出時に第1段目突堤が既に無い状態であったが、接合した結果、第1段目突堤まで復元出来た。ただし、突堤は摩滅によって著しく低くなっている。これは埴輪が樹立されてから、しばらく突堤部分が露出していたために、流土等によって削られたものと考えられる。

遺物は、盛土および流土内から円筒埴輪片のほか、表土より近世の磁器、瓦の破片が出土している。

**第10トレンチ**（第18図、図版4、24） 後円部の南西側に位置する。長さ5m×幅2mの規模で設定した。墳丘第1段目斜面、第1段目テラス、円筒埴輪列を検出した後、盛土と地山の相違を確認すべく、南東側の断ち割りを行った。最終的には、境界際の遺構残存状況を確認するため、南東隅を裾側に長さ2m×幅0.5mの規模で拡張したが、葺石等は検出されなかった。

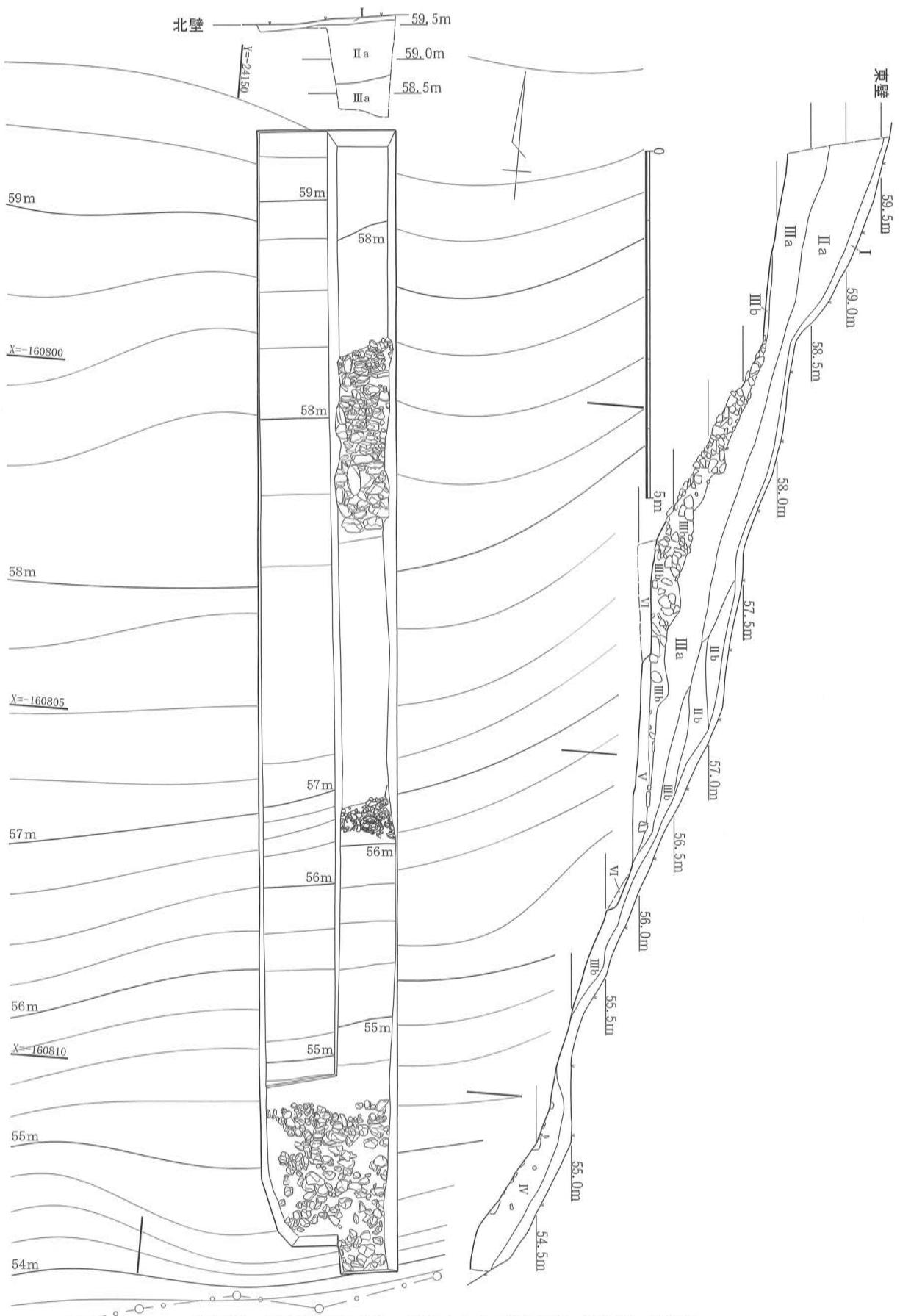
層位は、表土（I）の下に、流土（II b）、流土（III b）、流土（IV）と、流土が順に堆積するような状況が認められ、厚さは約0.5mに及ぶ。流土（III b）は、溝状の掘り込みの埋土である。第1段目テラスは、地山（VI）の上に埴輪を並べた後、墳丘盛土（V）で埴輪の1段目突堤まで埋めて成形している。地山は、上層より粗砂、シルト、粗砂、中粒砂というように、粗い砂と細かい砂の互層になっている。同様の地山堆積状況は、第12トレンチの断ち割りでも認められる。

遺構は、墳丘第1段斜面、第1段目のテラスと円筒埴輪列を検出した。墳丘第1段目斜面には、葺石は残存していないかった。墳丘斜面の角度については、現状で計測して、第1段目が25度となっている。斜面に葺石が全く残存していないこと、第9トレンチの第1段目傾斜角が31度という数字であることから考えて、墳丘第1段目斜面は、本来の形状を全くとどめていないと考えられる。第1段目のテラスについては、標高約56.3m、現存長が約2mである。

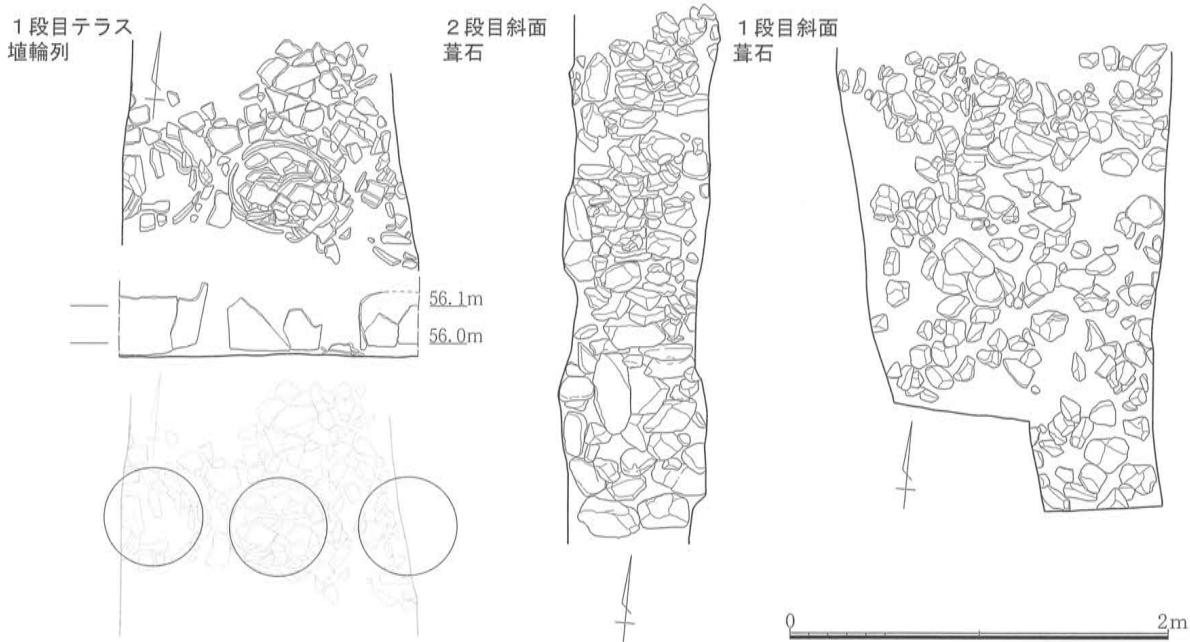
円筒埴輪列については、円筒埴輪6個体を検出した。埴輪が全体的に直立していること、直線的に並ぶことから、樹立当初の位置にあることは明らかである。第5トレンチ、第9トレンチの埴輪列は、本来の位置を保っていないため、樹立当初の位置を保っているのは、第10トレンチの埴輪列のみである。

埴輪の据付については、据付穴ないし布掘りが確認出来ないことから、先述した通り、地山上に埴輪を並べた後、墳丘盛土で第1段目突堤まで埋めたものと考えられる。埴輪内部の埋土上面、ほぼ第2段目突堤の位置で、多数の埴輪片を検出したが、埴輪内部の埋土からは、埴輪片や石などは検出されなかった。埴輪内部に土を充填した痕跡も確認出来なかったが、埋土に遺物が含まれないことから、この埋土は埴輪樹立当初からのものの可能性がある。

遺物は、流土内から円筒埴輪、朝顔形埴輪片のほか、表土から磁器、瓦の破片が出土している。 （横田）



第16図 三吉陵墓参考地 第9トレンチ平面図・断面図 (1/80)



第17図 三吉陵墓参考地 第9トレンチ埴輪列・葺石平面図 (1/20)

第11トレンチ（第19図、図版25） 墳丘主軸上にあたり、後円部中央に位置する。第1トレンチと同様に墳丘構造をある程度把握するために、長さ14m×幅2mの規模で設定した。最終的には南壁沿いに長さ0.8m×幅0.6m拡張して、境界際の状況を確認した。周辺の地形から墳丘の第1・2段斜面、第1段テラス面にあたることが予想されたが、調査の結果、第1段テラス面と第2段斜面を検出した。

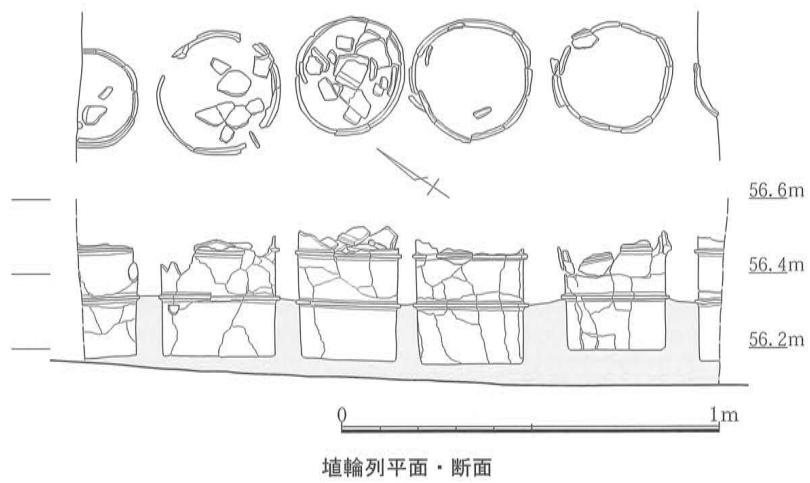
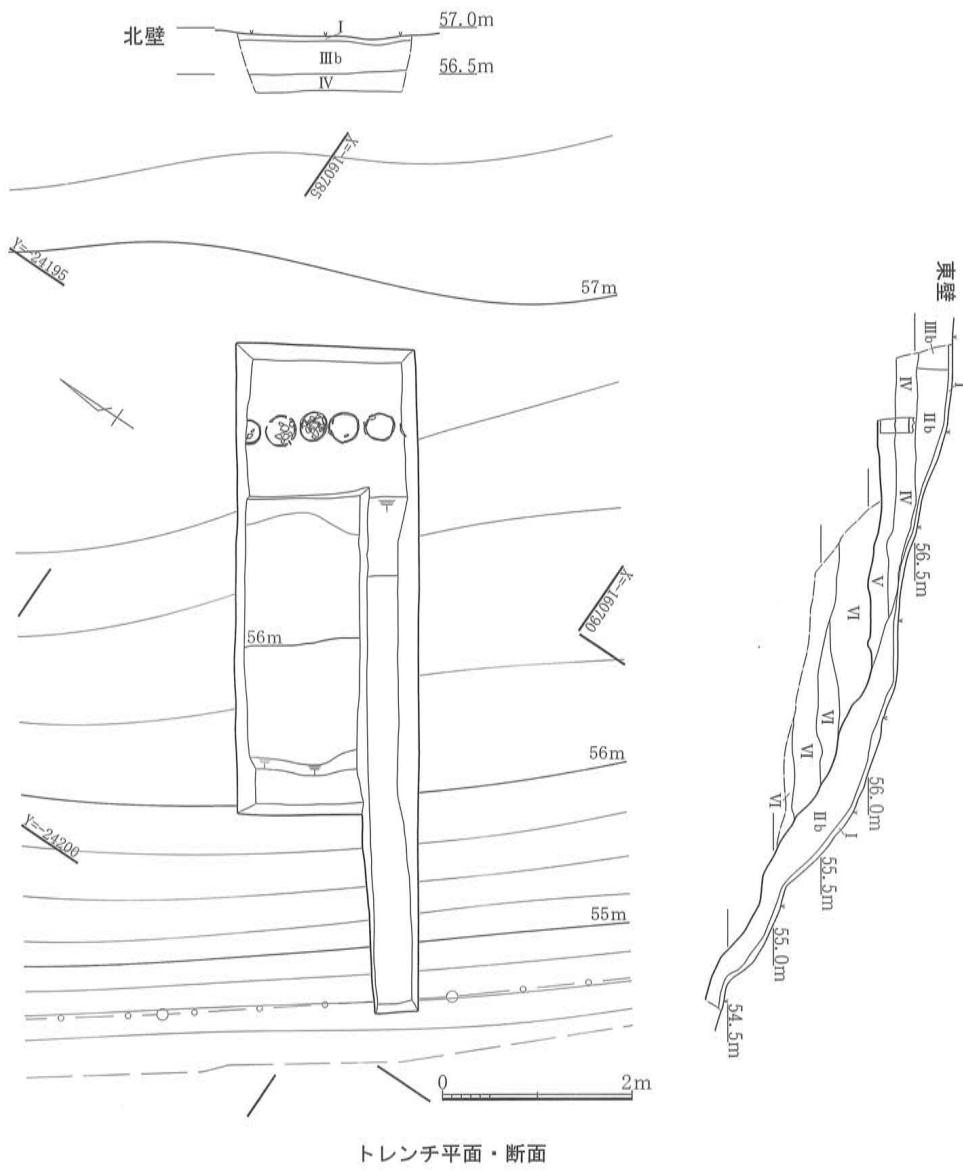
層位は、表土（I）の下に流土（III b）が約0.2m～約0.6mの厚さで堆積している。後世の盛土（III a）が削られた後に形成された上方の盛土からの2次堆積と考えられる。この盛土（III a）は、もっとも厚い箇所で約0.7mを測り、トレンチ内の広い範囲で確認される。葺石やテラス面が削られた後に付近を覆ったものであろう。盛土の時期は不明である。第2段斜面の葺石が削られた箇所で墳丘盛土（V）を確認した。シルト層である。確認範囲が狭いため確定ができないが、地山（VI）である可能性も考えられる。墳丘築造前の旧地形の中でも最高所付近にあたるため、墳丘第2段目の一部については地山成形である可能性がある。トレンチ西端床面は激しく削られている状況が認められ、第1段斜面は完全に失われているといえる。

遺構は、標高約55.7mの高さで第1段テラス面を検出しているが、残存範囲は葺石基底から約2mで、それより周濠側では次第に下りの傾斜となっていく。周濠側ほど削平されている状況が窺われる。埴輪列は確認されていないことから、埴輪列はテラス面の周濠側に樹立されていたものが、削平により失われたと考えられる。また、第2段斜面の葺石を検出した。基底から長さ約3m、高さ約0.8mの範囲が残存しているが、上方は削られて失われている。石材は長さ10～20cmほどの大きさを主体とするが、一部に30cmに及ぶものも認められる。平らな石を貼るように設置しているものもあるが、主体的な方法ではない。明確な基底石や目地などは認められない。残存する葺石の傾斜面は約25度である。

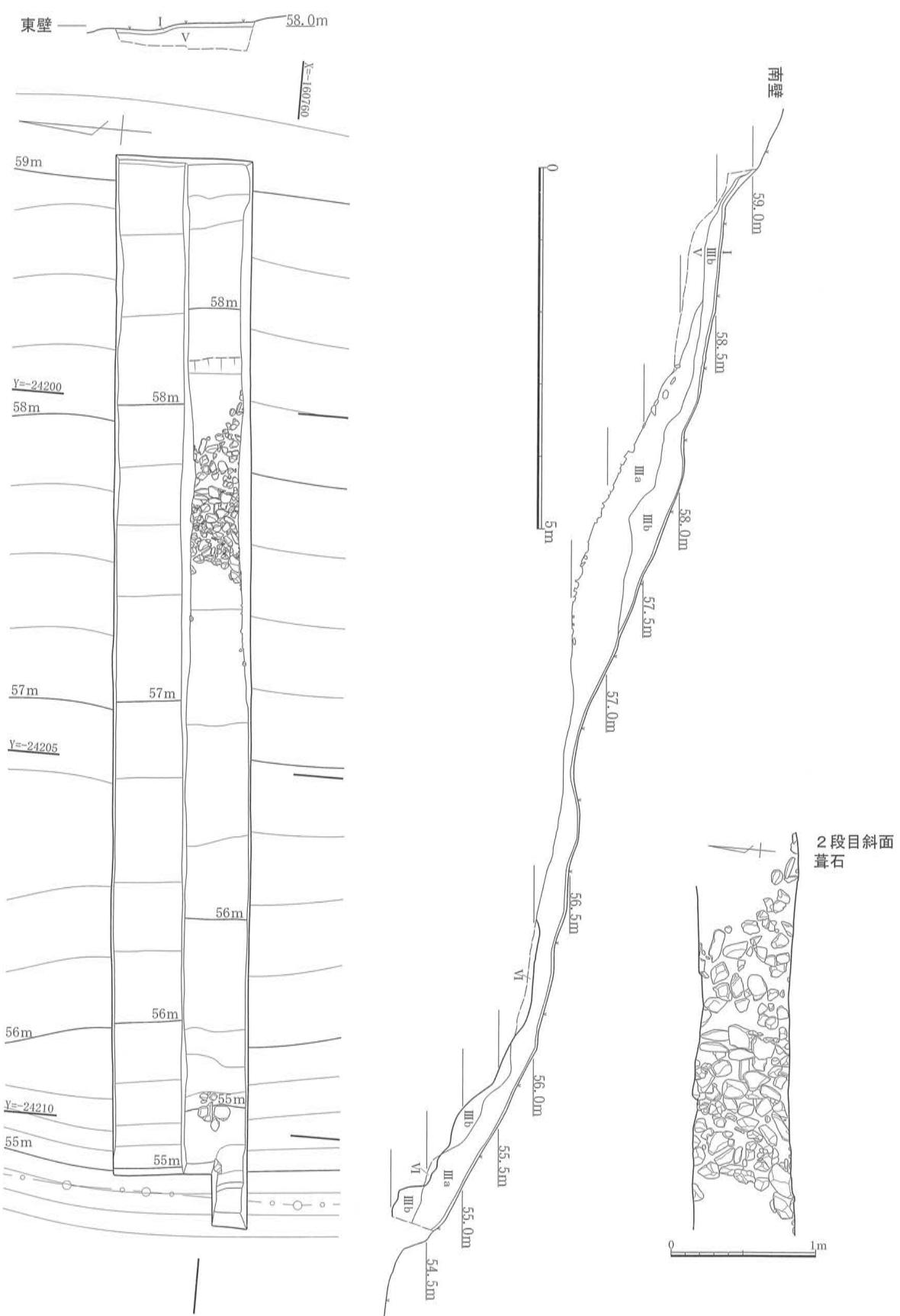
遺物は、円筒埴輪や土師器の破片のほか、陶器や瓦の破片などが出土している。

第12トレンチ（第20図、図版25） 墳丘主軸の後円部側にあたる第11トレンチを北に約35m回り込んだ位置にあたる。長さ5m×幅2mの規模で設定して、最終的に濠側の一部を長さ1m×幅0.6m拡張した。トレンチ周辺の裾付近はわずかな傾斜で下った後、すぐに崖状に落ち込んでいる。調査の結果、濠側が一部削平されたテラス面を検出した。

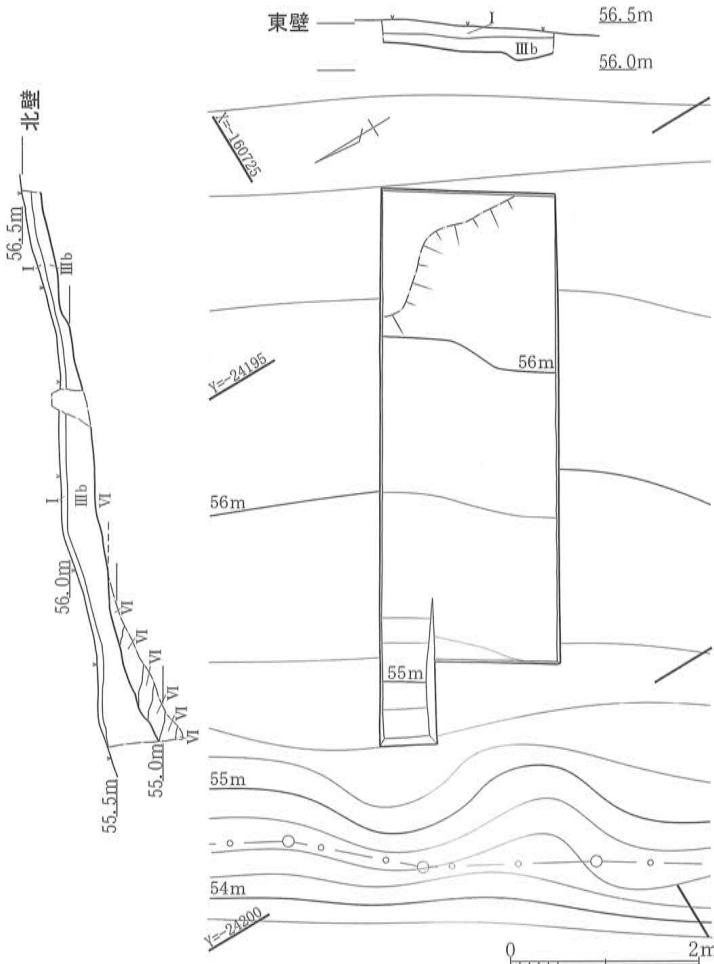
層位は、表土（I）の下に流土（III b）が0.3m程度の厚みで堆積しており、すぐに地山（VI）に至る。地山は比較的細かい単位で分かれている。地山の検出面は標高55.5m～56m付近であるが、第11トレンチの墳丘第1段テラス面の高さが標高55.5m付近であることから、濠側が削られているものの概ねテラス



第18図 三吉陵墓参考地 第10トレンチ平面図・断面図 (1/80、1/20)



第19図 三吉陵墓参考地 第11トレンチ平面図・断面図 (1/80、1/40)



第20図 三吉陵墓参考地 第12トレンチ平面図・断面図(1/80)

の仕上りは、須恵質といわれるような硬質なものは存在せず、軟質のもののみである。色調は、褐色から黄褐色となるものが多く、焼成が甘く明黄褐色から黄灰色となるものが次に多い。胎土には、基本的に直径3mm以内の砂粒（白色粒）が1%程度含まれるものが多い。残存状況は、円筒・形象埴輪ともに概して良くなっている。表面が剥がれているものが多く、調整が確認出来ないものがほとんどである。透孔は、大半が円形であるが、そのほかに半円形や歪んだ半円形のものもわずかにみられる。

**円筒埴輪・朝顔形埴輪・壺形埴輪（第21～23図1～20）** まず、比較的残存状況の良い、第5、9、10トレンチの埴輪列資料について順に述べ、その後各トレンチの破片について述べいく。

第5トレンチの埴輪列について、1は、トレンチの西から1番目の個体である。第1段目のみが残り、突帯形状および突帯間隔は不明である。成形は接合痕跡が不明瞭なもの、粘土紐による輪積みと考えられる。底部径は、27.4cmを測る。外面調整の痕跡は摩滅等により残っていない。内面調整はナデと考えられるが、不明瞭である。2は、トレンチの西から2番目の個体である。第1段目より第2段目の一部までが残る。突帯形状は低い台形、突帯間隔は基部から第1段目突帯の上部までで約14cmである。成形は接合痕跡が不明瞭なもの、粘土紐による輪積みと考えられる。底部径は、24.7cmを測る。透孔は、第2段目に半分ほどしか残っていないが、おおよそ円形である。内外面調整の痕跡は、摩滅等により残っていない。黒斑が見られる。3は、トレンチの西から3番目の個体である。第1段目より第2段目のごく一部までが残る。突帯形状は低い台形、突帯間隔は基部から第1段目突帯の上部までで約14cmである。成形は接合痕跡が不明瞭なもの、粘土紐による輪積みと考えられる。底部径は、25.9cmを測る。外面調整の痕跡は摩滅等により残っていない。内面調整はナデと考えられるが、不明瞭である。黒斑が見られる。4は、トレンチの西から4番目の個体である。第1段目のみが残り、突帯形状および突帯間隔は不明である。成形は接合痕跡が不

面が残存していると考えてよさそうである。

遺構は、墳丘第1段テラス面を検出したが、埴輪列は検出されなかった。第11トレンチでも第2段斜面の葺石とテラス面が確認されているが、埴輪列は確認されていない。このことから、埴輪列はテラス面でも周濠寄りに樹立されていたと考えられ、既に失われている可能性が高いと考えられる。

遺物は、円筒埴輪や土師器の破片のほか、瓦や瓦器の破片が出土している。

### 3 出土遺物

#### (1) 墓輪(第21～25図、図版26～29-1)

出土した埴輪の大半は、円筒埴輪や朝顔形埴輪といった円筒埴輪列を構成する個体である。円筒埴輪のほかには、壺形埴輪、蓋形埴輪、家形埴輪、短甲形埴輪などが確認できる。

埴輪の焼成については、ほとんどの資料に黒斑が見られることから、基本的に野焼きによるものと考えられる。焼成

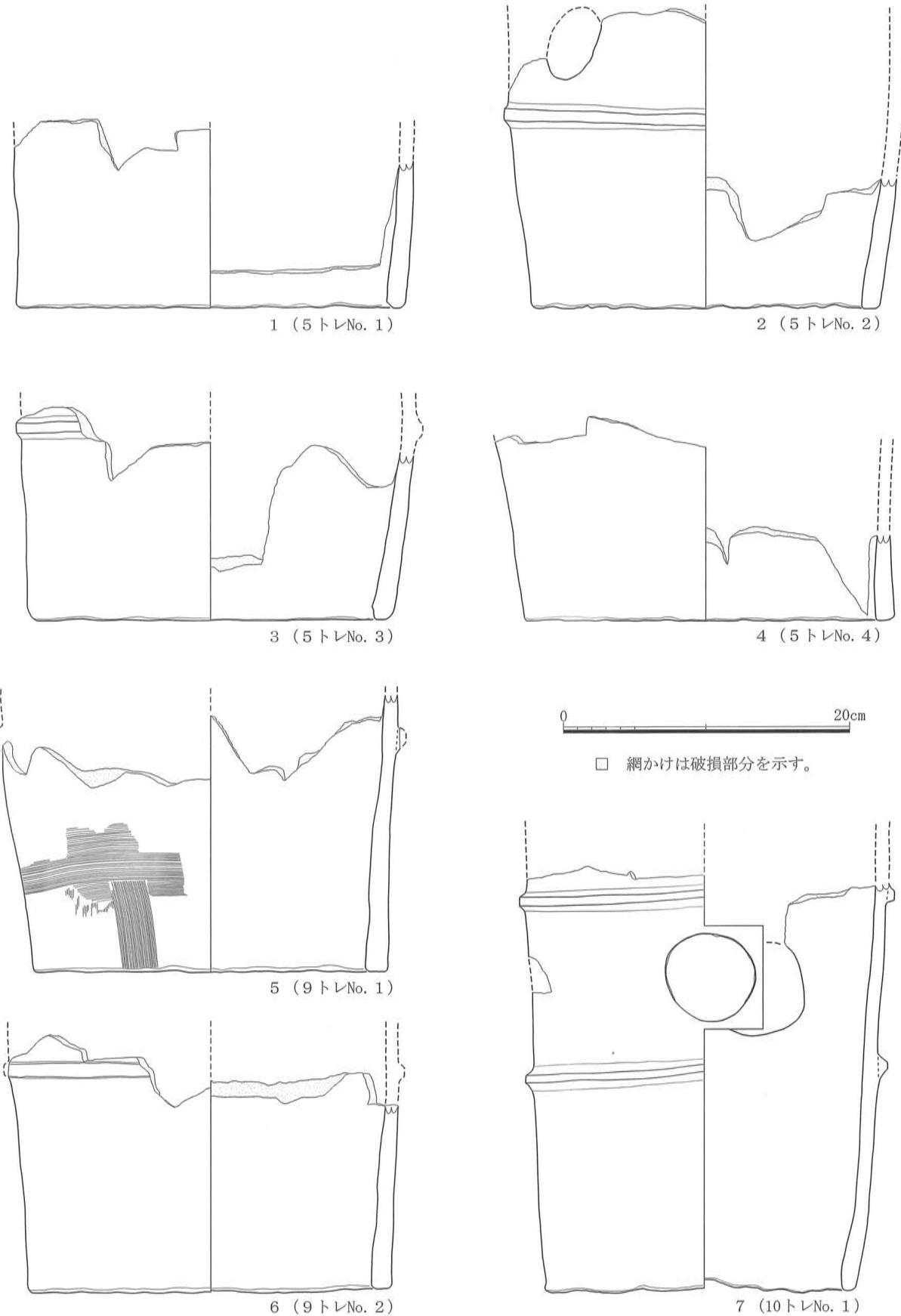
は野焼きによるものと考えられる。焼成

明瞭なもの、粘土紐による輪積みと考えられる。底部径は、26.3cmを測る。内外面調整の痕跡は、摩滅等により残っていない。黒斑が見られる。

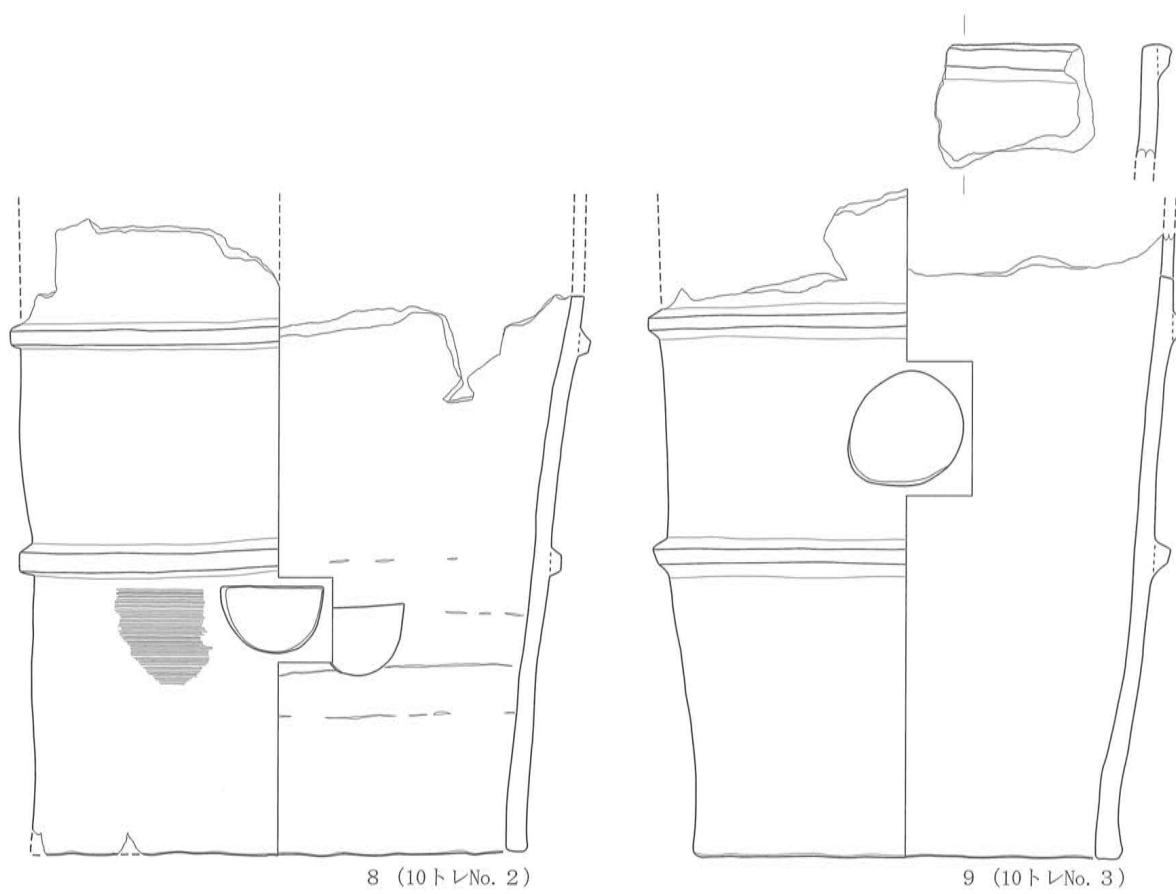
第9トレンチの埴輪列について、5は、トレンチの西から1番目の個体である。第1段目より第2段目のごく一部までが残る。突帯形状は低い台形の可能性があるが、摩滅のため、詳細は不明である。突帯間隔は基部から第1段目突帯の上部まで約17cmである。成形は接合痕跡が不明瞭なもの、粘土紐による輪積みと考えられる。底部径は、25cmを測る。外面調整は、部分的にタテハケの後にヨコハケを施していることが看取出来る。内面調整はナデと考えられるが、不明瞭である。6は、トレンチの西から2番目の個体である。第1段目より第2段目のごく一部までが残る。突帯形状は低い台形の可能性があるが、摩滅のため、詳細は不明である。突帯間隔は基部から第1段目突帯の上部まで約16.2cmである。成形は接合痕跡が不明瞭なもの、粘土紐による輪積みと考えられる。底部径は、25.7cmを測る。内外面調整の痕跡は、摩滅等により残っていない。黒斑が見られる。

第10トレンチの埴輪列について、7は、トレンチの西から1番目の個体である。第1段目より第3段目のごく一部までが残る。突帯形状は台形、突帯間隔は基部から第1段目突帯上部まで約16cm、第1段目突帯上部より第2段目突帯上部まで約12cmである。成形は接合痕跡が不明瞭なもの、粘土紐による輪積みと考えられる。底部径は、22cmを測る。第2段目の透孔は、円形である。内外面調整の痕跡は、摩滅等により残っていない。黒斑が見られる。8は、トレンチの西から2番目の個体である。第1段目より第3段目的一部までが残る。突帯形状は台形、突帯間隔は基部から第1段目突帯上部まで約16cm、第1段目突帯上部より第2段目突帯上部まで約11.6cmである。成形は、粘土紐による輪積みである。底部径は、26.6cmを測る。第1段目の透孔は、半円形である。外面調整はヨコハケを施していることが看取出来るが、不明瞭である。内面調整はナデと考えられ、ナデ消しが不完全なため、粘土紐の接合痕跡が部分的に残る。黒斑が見られる。9は、トレンチの西から3番目の個体である。第1段目より第3段目のごく一部までが残る。突帯形状は台形、突帯間隔は基部から第1段目突帯上部まで約16cm、第1段目突帯上部より第2段目突帯上部まで約12cmである。成形は接合痕跡が不明瞭なもの、粘土紐による輪積みと考えられる。底部径は、23cmを測る。第2段目の透孔は、円形である。内外面調整の痕跡は、摩滅等により残っていない。黒斑が見られる。埴輪内部の埋土上面より、円筒埴輪の口縁部が検出されたが、その位置から考えて、9に伴う可能性が高いものとして、ここで述べておく。径復元の困難な小片であり、口縁端部は突帯状に粘土帶を貼り付けている。内外面調整の痕跡は、摩滅等により残っていない。10は、トレンチの西から4番目の個体である。第1段目より第3段目的一部までが残る。突帯形状は台形、突帯間隔は基部から第1段目突帯上部まで約16cm、第1段目突帯上部より第2段目突帯上部まで約12cmである。成形は接合痕跡が不明瞭なもの、粘土紐による輪積みと考えられる。底部径は、25.8cmを測る。透孔は、第2段目に半分ほどしか残っていないが、おおよそ円形である。外面調整は1段目にヨコハケを施していることが看取出来るが、極めて不明瞭である。内面調整の痕跡は摩滅等により残っていない。黒斑が見られる。11は、トレンチの西から5番目の個体である。第1段目より第3段目のごく一部までが残る。突帯形状は台形、突帯間隔は基部から第1段目突帯上部まで約14cm、第1段目突帯上部より第2段目突帯上部まで約12cmである。成形は接合痕跡が不明瞭なもの、粘土紐による輪積みと考えられる。底部径は、26cmを測る。第2段目の透孔は、歪んだ半円形である。外面調整は、第1段目でタテハケの後にヨコハケ、第2段目でヨコハケを施していることが看取出来るが、不明瞭である。内面調整の痕跡は摩滅等により残っていない。

円筒埴輪列以外の破片について、12は、第1トレンチ後世盛土より出土の円筒埴輪片である。突帯形状は低い台形、透孔は残存部分より歪んだ半円形と考えられる。13は、第9トレンチ後世盛土より出土の円筒埴輪片である。突帯形状は台形、透孔は残存部分より半円形と考えられる。14は、第5トレンチ流土より出土の円筒埴輪片である。突帯形状は台形で、外表面は刷毛状の道具により赤色塗彩されている。15、16、17は、第7トレンチ後世盛土より出土の朝顔形埴輪片である。胎土・色調・焼成より同一個体の可能性が高い。15は口縁部片で、端部は平坦である。内外面調整の痕跡は、摩滅等により残っていない。16



第21図 三吉陵墓参考地 出土品実測図 (1) 円筒埴輪 (1/4)

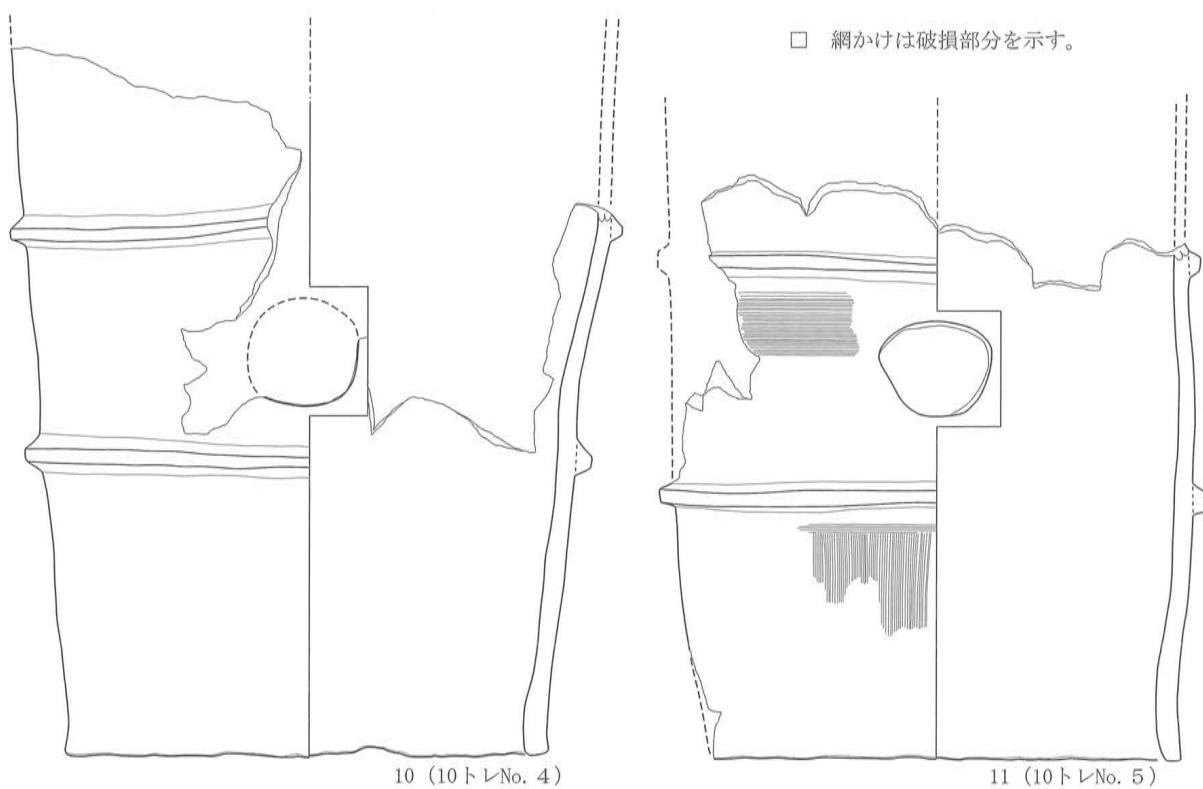


8 (10トレNo. 2)

9 (10トレNo. 3)

0 20cm

□ 網かけは破損部分を示す。



10 (10トレNo. 4)

11 (10トレNo. 5)

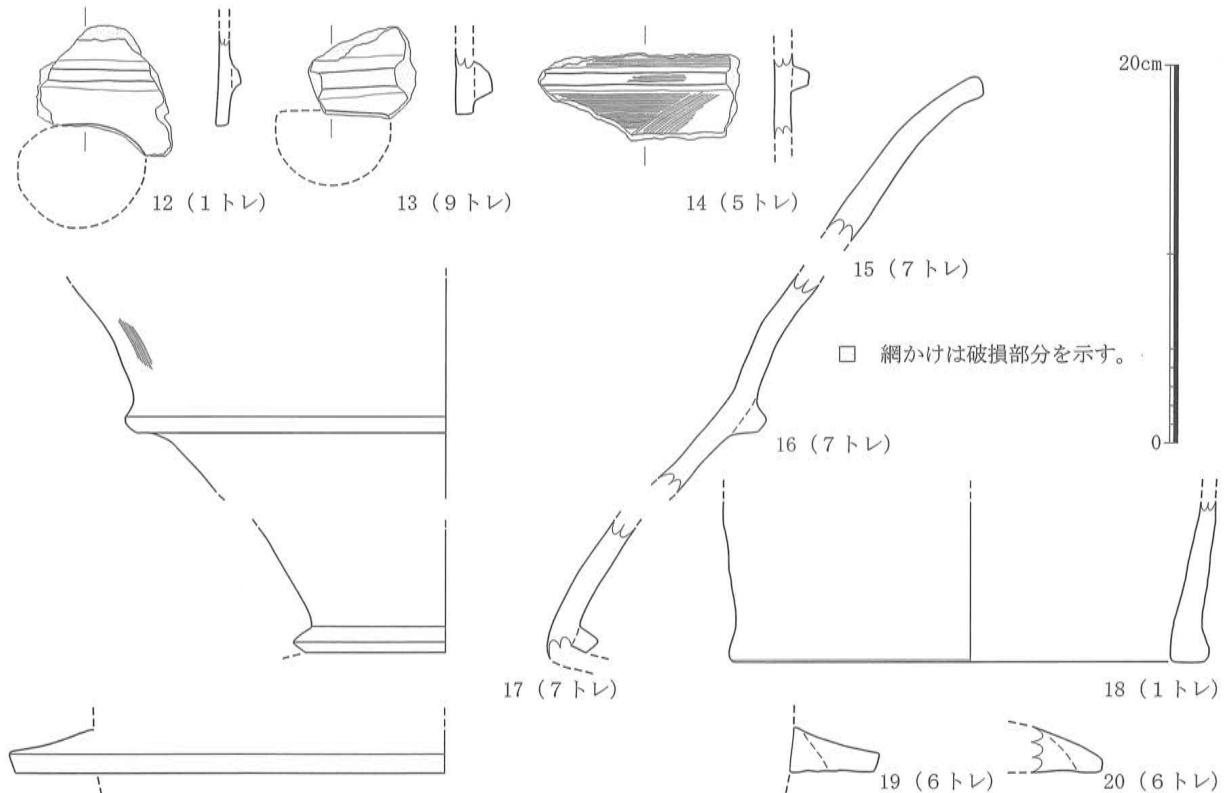
第22図 三吉陵墓参考地 出土品実測図 (2) 円筒埴輪 (1/4)

は口縁部から頸部間の破片で、外面中ほどに台形の突帯を有している。外面調整は、ヨコハケを施していることが看取出来るが、不明瞭である。内面調整の痕跡は、摩滅等により残っていない。17は頸部片で、頸部突帯が残る。内外面調整の痕跡は、摩滅等により残っていない。18は、第1トレンチ出土より出土の円筒埴輪底部片である。底部径は、復元で25.4cmを測る。内外面調整の痕跡は、摩滅等により残っていない。19、20は壺形埴輪として記述するが、小片のため、壺形以外の可能性もある。19は、第10トレンチの埴輪列西側、墳丘盛土直上より出土の鰐部片である。最大径は、復元で46cmを測る。内外面調整の痕跡は、摩滅等により残っていない。20は、第6トレンチの葺石直上より出土の鰐部片である。内外面調整の痕跡は、摩滅等により残っていない。

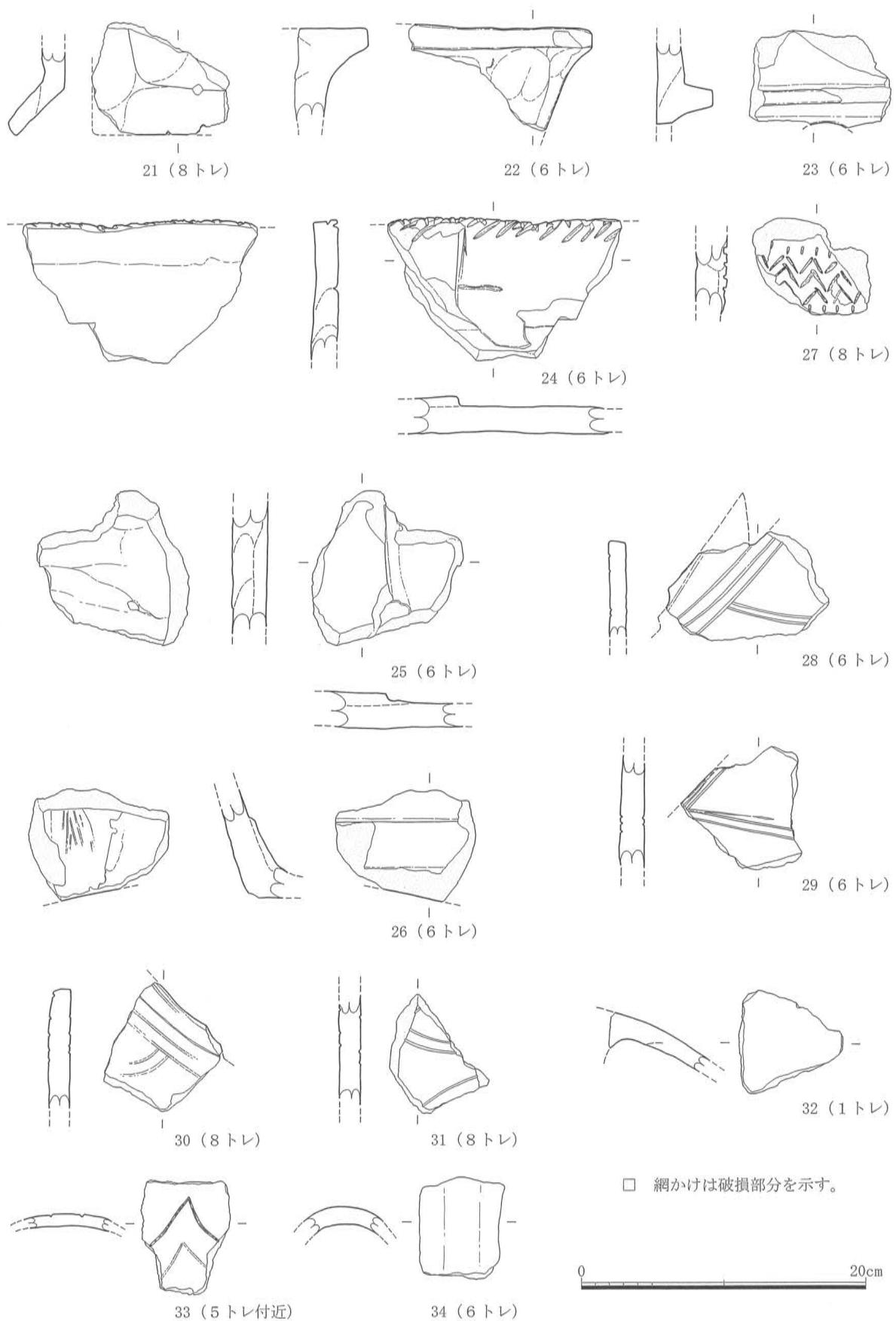
(横田)

**形象埴輪 (第24図21～第25図41)** 21～23は家形埴輪の破片である。いずれも裾廻突帯である。21は断面が「へ」の字状に屈曲しており、22・23は通有の縁側状の表現となっている。下面には補強粘土が残る。21は第8トレンチ出土、22・23は第6トレンチ出土であり、造出上に複数個体の家形埴輪が配列されていたことを示す。破片は小さいため、家の構造や形式を知ることは難しい。

24～27の4点は、短甲形埴輪の破片と考えられる。24はもっとも大形の破片である。長さ約16cmの範囲で残る上辺部は直線を示し、ヘラ描きにより革覆輪を表現する。その他に明瞭な線刻表現は認められない。断面は湾曲が認められず平板な作りである。上辺とほぼ直交する方向に幅4cm以上、厚み約0.5cmの粘土帯が貼付されており、左側へ緩やかに曲がるようである。内外面とも、現状で明瞭なハケメは認められない。上記の諸特徴から推定すると、24は襟付短甲形埴輪の後胴右肩部付近の破片である可能性が考えられる。地板表現が認められないため、その型式は不明ながら、おそらくは三角板革綴襟付短甲を表現したものであろう。粘土帯は後胴のU字形帶金に該当すると考えられる<sup>(4)</sup>。25と26は、同じく粘土帯が貼付されていることから、襟付短甲形埴輪片と考えられる。25は天地の関係から、後胴左肩部に近いU字形帶金とその周辺の破片と考えられる。26は、下方が外側に広がる形態を示すことから、裾板付近を表現したものと考えられようか。25は粘土帯の幅が5.5cmを測り、鉄製短甲に比べるとかなりの大形品であると推測される。24～26は、同じ第6トレンチの出土であり、同一個体である可能性が高い。特に、24、25は



第23図 三吉陵墓参考地 出土品実測図(3) 円筒埴輪・朝顔形埴輪・壺形埴輪(1/4)



第24図 三吉陵墓参考地 出土品実測図 (4) 形象埴輪 (1/4)

暗茶褐色の色調が酷似している。27は、草摺部分である。第6トレンチ出土の短甲形埴輪と異なり、赤褐色を呈する。約1cm間隔で施されたヘラ先による刺突文の間に、三重の鋸歯文が線刻されている。

28～32は、蓋形埴輪の破片である。28～31は飾板の破片である。おおむね2本1単位の線刻で台形や三角形の区画が表現されているようである。器壁の厚さは1～1.5cmを測る。32は笠部の破片である。

33、34は器種が不明、または特定の難しいものである。33は厚さ約0.8cmで薄手の作りである。やや外反しながら下方に広がるような形態が推測される。外面には、大きな単位で二重の鋸歯文が確認できることから、草摺を表現した破片である可能性が考えられる。34は、円筒形と考えた場合に蓋形埴輪の立飾り軸部や家形埴輪の円柱部の可能性が考えられようか。あるいは、柵形埴輪など楕円筒形の埴輪の一部である可能性もあり得る。

35～41は、第7トレンチの埴輪埋設遺構の構築に使用された埴輪片である。多くは蓋形埴輪片であるため、記述の順番が前後し一部に異なる器種を含むものの、便宜上形象埴輪と一括で記述することとする。

35～37は、後述する埋設遺構への埴輪設置の第2段階で使用された蓋形埴輪飾板の破片である。破片の数は多いものの、接合関係にあるものは思いのほか少ないようである。その理由としては、埴輪埋設遺構の上方で出土した朝顔形（壺形）埴輪を中心とする破片の中に、埋設遺構内の蓋形埴輪とは別個体の軸部上端の破片が認められている。遺構の構築にあたっては、複数の蓋形埴輪を用いていた可能性が高いと考えられることによる。よって、蓋形埴輪の全体像を図化することは現状では難しい。飾板は通有の形態と考えられ、縁に幾つかの飾りを配置している。線刻は28～31と同様に、基本的には2本1単位として描かれ、三角形や台形の区画ができる。一部に、36のような曲線表現を伴う場合もある。飾板の厚さは1cm前後で、色調は赤褐色～黄褐色を呈する。38は飾板を接合するために軸部上端に付く受部の破片である。現状は摩滅のため明確な接合関係を示さないが、同一個体の可能性が高いと考えられる。39は軸部で、横倒しの状態で出土したものである。高さは約18.5cm、底部径は約8.5cmを測る。中位の対向する位置に、2つのやや楕円形を呈する透孔が穿たれている。40は、軸部の下方、第1段階と第2段階の中間付近で検出された破片である。赤褐色を呈する。器壁の厚みは約1cmで、上方に広がる形態を示すと考えられる。円形透孔の一部が残存している。外面には非常に細かいタテハケが認められる。形態上の特徴から蓋形埴輪の台部の可能性が考えられよう。

なお、これら蓋形埴輪の破片の中に、明確に笠部と判断できる破片は認められていない。

41は、第1段階で設置された復元底径約41cmの埴輪底部である。残存高約9cmを測る。色調は赤褐色を呈する。摩滅が著しいが、外面はタテハケの後ヨコハケが施され、不明瞭ながら静止痕も認められるようである。ハケメは40のものとは異なる。内面は指ナデである。第2段階の上方で多数検出されている朝顔形（壺形）埴輪の破片も赤褐色を呈しており、同一個体である可能性も考えられよう。

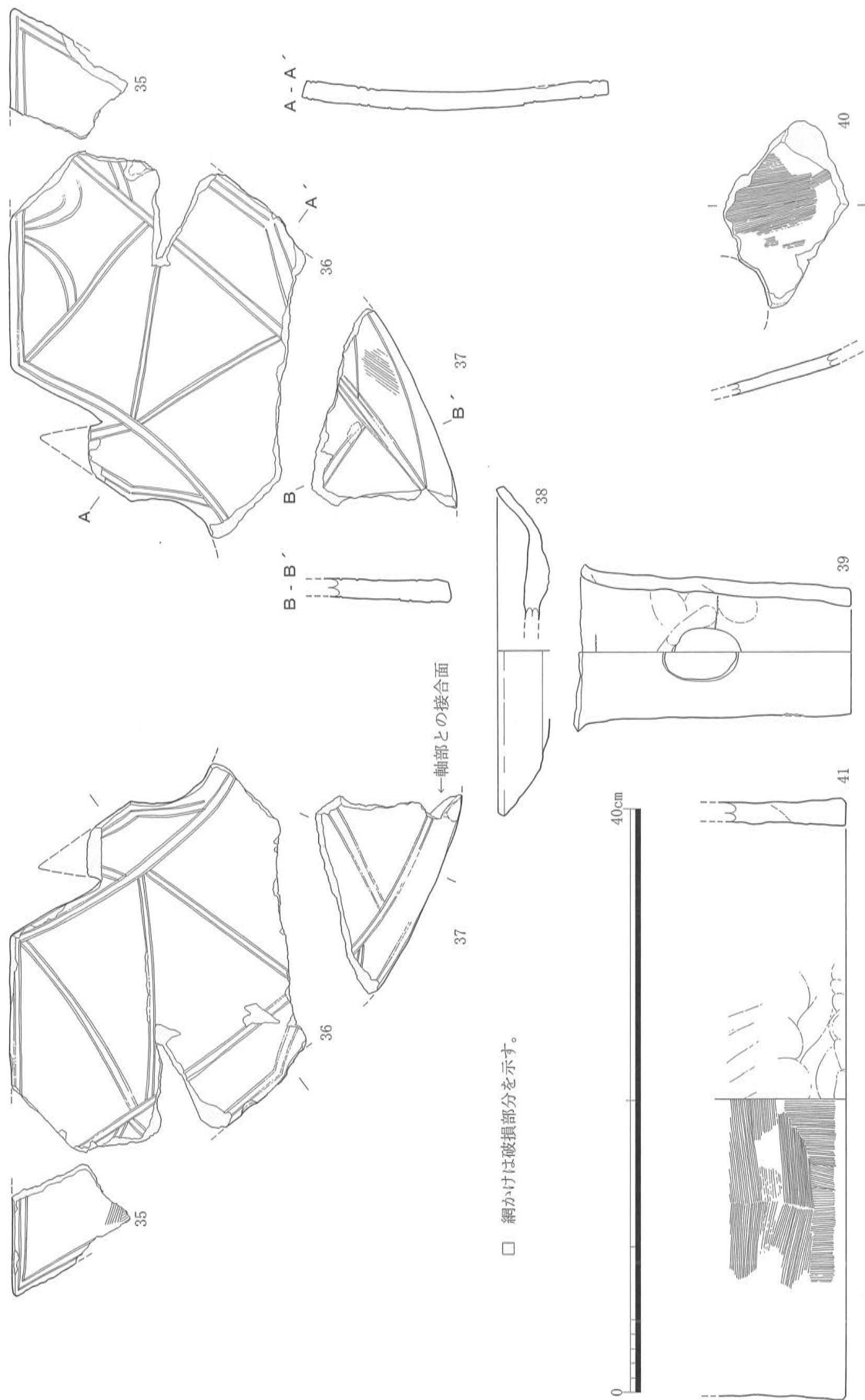
形象埴輪は、いずれの破片も胎土に大きな違いは認められない。色調は茶褐色～黄褐色を呈するものが多いため、一部に赤褐色を呈するものが含まれている。全体に摩滅の顕著な破片が多く、明瞭な調整痕の認められないものが多い。

## （2）土器（第26図）

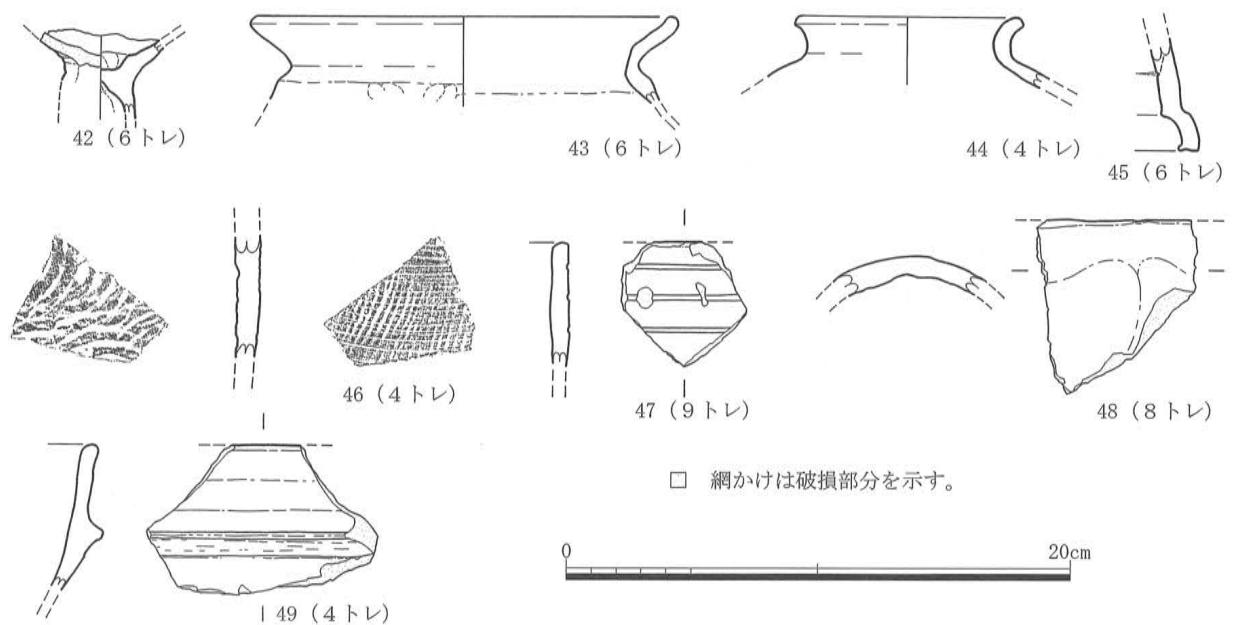
**土師器（第26図42、43）** 土師器の破片である。42は高杯で、第6トレンチのIIa層から出土した。口縁と脚の端部とともに失っている。残存高は約3.5cmである。一部摩滅しているが丁寧な指ナデが確認できる。杯部内面の中心付近が直径約2cm、深さ約0.7cmの範囲でくぼんでいる。色調は黄褐色を呈する。

43は甕で、第6トレンチの前方部と造出との屈曲部付近のIV層から出土した。復元口径約22cmを測るが、残存高は口縁部から約3.5cmで、肩部以下は失われている状態である。口縁部は肩部からいたんすぼまり、外側に屈曲したのち、直線的に立ち上がる。口縁部内部は肥厚する。口縁部の厚みは約0.7cmであるが、胴部付近は約0.3cmと薄くなる。内外面とも指ナデで、ハケメやケズリ痕などは認められない。色調は淡赤褐色～黄褐色を呈する。

甕については、出土層位からも本参考地築造に伴う可能性が高いと考えられよう。



第25図 三吉陵墓参考地 出土品実測図(5) 形象埴輪ほか〔第7トレンチ埴輪埋設遺構内〕(1/4)



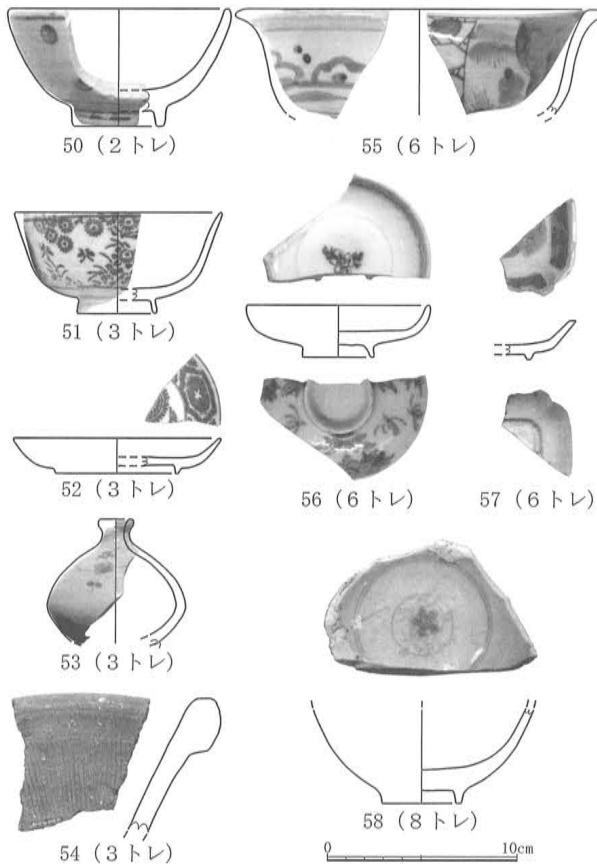
第26図 三吉陵墓参考地 出土品実測図 (6) 土器、その他 (1/3)

須恵器 (第26図 44～46) 須恵器の破片である。44は短頸壺の口縁部である。口縁端部は丸く仕上げられ、外面には自然釉が付着する。復元口径は12cmを測る。45は脚付壺の脚端部と考えられる。灰白色を呈し、回転指ナデ痕が明瞭に残る。46は、甕の胴部である。外面には平行叩き痕があり、叩きののち、カキメ状の浅い沈線が廻っている。内面には同心円文当具痕が残る。

(清喜)

### (3) 陶磁器 (第27図、図版29)

表土と後世盛土より出土した遺物について、トレンチ順に述べる。50は、第2トレンチ後世盛土より出土の磁器碗片である。素地内外面に鉄釉による染付を施す。51から54は、第3トレンチ近代盛土より出土の陶磁器片である。51は磁器碗で、素地内外面にコバルト釉による染付を施す。52は磁器皿で、素地内面に呉須による染付、口縁端部に褐釉を施す。53は磁器壺で、素地外面に呉須による染付を施す。内面にロクロナデの跡が残る。54は陶器擂鉢で、口縁端部が肥厚している。擂り目は密である。55は第6トレンチ後世盛土より出土の磁器碗で、口縁部が外反している。素地内外面に呉須による染付を施す。56と57は、第6トレンチ表土より出土の磁器皿である。56は、素地内外面に呉須による染付を施す。57は輪花角皿で、素地内面に陽刻と呉須による染付を施す。58は、第8トレンチ後世盛土より出土の磁器碗で、外青磁である。素地内面には、呉須による染付と見込中央にコニヤク印判による五弁花文を施す。(横田)



第27図 三吉陵墓参考地 出土品実測図 (7) 陶磁器 (1/4)

#### (4) その他の遺物 (第 26 図)

ここでは、資料数の僅少なものをまとめた。近世遺物を除く、古墳時代以外の遺物と考えられるものである。47 は土器片で、口縁部に沿って浅い凹線が 3 本走る。黒褐色～暗茶褐色を呈し、内外面に横方向へのミガキ痕が認められる。縄文土器であろうか。48 は瓦器で、円筒形の形状を呈するものと考えられる。外面に指ナデと指オサエが認められる。49 は土師器の羽釜である。黄褐色を呈し緻密な胎土である。

#### (5) 玉類 (第 28 図、図版 4)

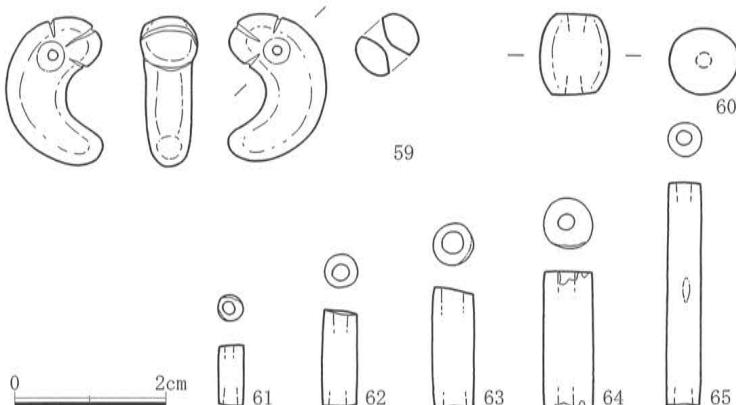
今回の調査で出土したものではなく、本参考地から明治 15 年に出土して、明治 17 年以降当部で所蔵する玉類であり、すべて石製である。この点数が、本参考地に本来副葬されていた玉類のすべてであるか否かは不明である。

**勾玉 (第 28 図 59)** 硬玉製である。長さ 1.9 cm、穿孔部での幅 0.75 cm、頭部の厚み 0.7 cm を測る。頭部は丁字頭となり明瞭に厚みを増す。孔径は大きく、両面とも 0.35 ～ 0.4 cm を測る。両面穿孔であり、中央部の径は 0.15 cm となる。尾部に向かって次第に細くなり、全体に端正な形態を示す。石材は透明度の高い濃緑色を基調とするが、広い範囲に灰緑色に近い白斑部が広がる。非常に丁寧に研磨されている。

**棗玉 (第 28 図 60)** 硬玉製である。長さ 1.05 cm、最大径 0.85 cm を測る。形態は、中央付近が最大径となる樽形を呈する。孔径は 0.25 cm で両面穿孔と考えられる。線刻は施されていない。濃緑色を基調とするが、灰緑色に近い白斑部が全面に見られるため、やや曇った色調を呈する。非常に丁寧に研磨されている。

**管玉 (第 28 図 61 ～ 65)** 碧玉製である。61 は長さ 0.8 cm、直径 0.35 cm、62 は長さ 1.25 cm、直径 0.45 cm、63 は長さ 1.6 cm、直径 0.5 cm を測る。孔径は 61、62 が 0.2 cm、63 は 0.28 cm を測る。いずれも両面穿孔と考えられる。61 ～ 63 とも色調は青緑色を呈し、非常に丁寧に研磨されている。64、65 は、端面や孔内に赤色顔料がわずかに付着している。64 は長さ 1.75 cm、直径 0.6 cm、65 は長さ 2.95 cm、直径 0.45 cm を測る。孔径は 64 が 0.23 cm、65 は 0.22 cm を測る。いずれも両面穿孔と考えられる。64、65 とも色調は灰緑色を呈し、丁寧に研磨されている。また、端面や孔内に赤色顔料がわずかに付着している。

(清喜)



第28図 三吉陵墓参考地 出土品実測図 (8) 玉類 (1/4)

## 4 調査の所見

### (1) 墳丘の規模と構造

新規に作成した墳丘測量図 (第 6 図) と本調査で得た所見を元に、平成 22 年度に広陵町教育委員会が三吉陵墓参考地の隣接地で実施した調査成果も参考にして (第 30 図)、墳丘の規模と構造について述べ、墳丘本来の規模復元を試みる (第 29 図)。

**墳丘主軸長** 墳丘の主軸長について、主軸上に設定した第 1 トレンチと第 11 トレンチの成果からは、墳丘裾の確定が出来なかったため、正確な数値は不明である。前方部主軸上に設定した第 1 トレンチの東端には葺石の基底石等が残らず、地山が緩やかに傾斜しているのみであった。また、後円部主軸上に設定した第 11 トレンチの西端にも葺石の基底石等が残らず、現代の搅乱によって地山まで削られていた。広陵町教育委員会が設定した第 1 調査区は、宮内庁が設定した第 11 トレンチの延長線上の調査区であるが、ここでも葺石の基底石等が残っていなかったため、墳丘裾を確定することは出来なかった。現状の主軸長は、約 200 m である。

**後円部最大幅** 墳丘主軸と直交する箇所に設定した第9トレンチの成果からは、墳丘裾の確定が出来なかったため、後円部最大幅の正確な数値は不明である。第9トレンチの南端では、斜面と葺石が比較的良好に残存しており、トレンチ外まで続いている。広陵町教育委員会が設定した第3調査区は、宮内庁が設定した第9トレンチの延長線上の調査区であるが、ここでは葺石の基底石等が残っていなかったため、墳丘裾を確定することは出来なかった。現状の後円部最大幅は約117mである。しかし、後円部の半径にあたる第9トレンチで葺石が残っている部分と墳丘主軸までの距離は約60mであることから、本来の後円部最大幅は120mを超えるものと推測出来る。そのように考えた場合、後円部の北側墳裾については、陵墓域外の現貯水池内に位置する可能性がある。

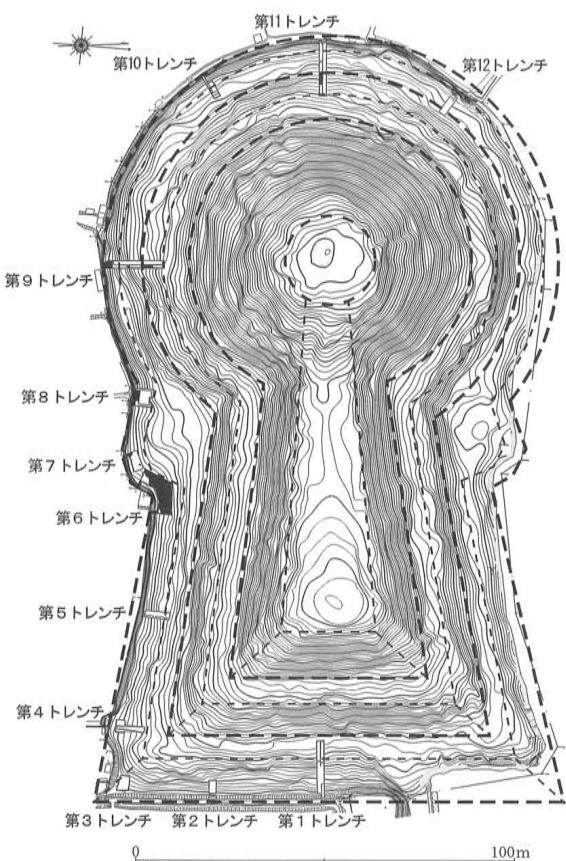
**前方部最大幅** 現状の前方部南東隅に設定した第3トレンチ、前方部南側東寄りに設定した第4トレンチ、前方部南側中央に設定した第5トレンチ、前方部と造出しの接点付近に設定した第6トレンチの成果からは、墳丘裾の確定が出来なかったため、前方部最大幅の正確な数値は不明である。第4トレンチの南端では、葺石が少量残存しており、トレンチ外まで続いていると予測出来たが、陵墓域外のため、墳丘裾を確定することは出来なかった。現状の前方部最大幅は、約116mである。しかし、前方部南側東端の現況は、崖状に削れており、本来の前方部最大幅は120mを超えるものと推測出来る。そのように考えた場合、前方部の北側墳裾については、後円部の北側墳裾と同様、陵墓域外の現貯水池内に位置する可能性がある。

**造出部最大幅** 現状の南側造出部南東隅に設定した第6トレンチ、南側造出部南側に設定した第7トレンチ、南側造出部南西隅に設定した第8トレンチの成果からは、墳丘裾の確定が出来なかったため、造出部の正確な規模は不明である。第6、7、8トレンチの南端では、葺石が良好に残存しており、トレンチ外まで続いていると予測出来たが、陵墓域外のため、墳丘裾を確定することは出来なかった。現状の造出部最大幅は、約104mである。しかし、墳丘主軸から現状の南側造出部の南側墳裾までは54mであることから、本来の造出部最大幅は108mを超えるものと推測出来る。そのように考えた場合、造出部の北側墳裾については、

後円部・前方部の北側墳裾と同様、陵墓域外の現貯水池内に位置する可能性がある。

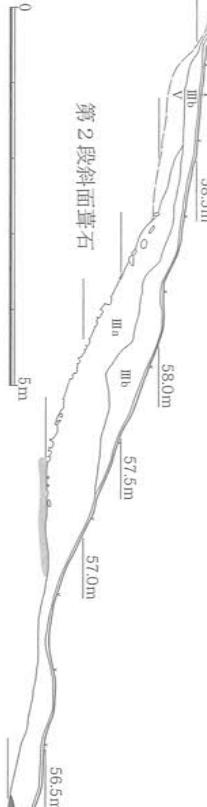
**段築** 墳丘の段築について、調査では第9トレンチと第11トレンチで第2段目斜面までしか確認していないが、比較的整った北側の現状をみる限り、明らかに3段築成である。

**第1段目** 第1段目の裾については、詳細は明らかでないものの、広陵町教育委員会の第3調査区で、葺石の転落石らしき石が出ている標高約52.5mから、宮内庁の第9トレンチで葺石が残る最下部の標高約53.5mより下までの間に第1段目南裾があったと考えられる。第1段目テラスは標高約56.2mに位置し、長さは残存テラスと残存斜面を直線で交差させた復元長で約6.2mである。第1段目の高さについては、広陵町教育委員会第3調査区での標高約52.2mを墳裾と仮定した場合、宮内庁の第9トレンチで検出した標高約56.2mの第1段目テラスから考えて、約4mと推測出来る。上記より、第1段目の規模は、主軸長約200m、後円部最大幅約120m、前方部最大幅約120m、高さ約4m、テラス幅約6.2mと推定復元が可能である。

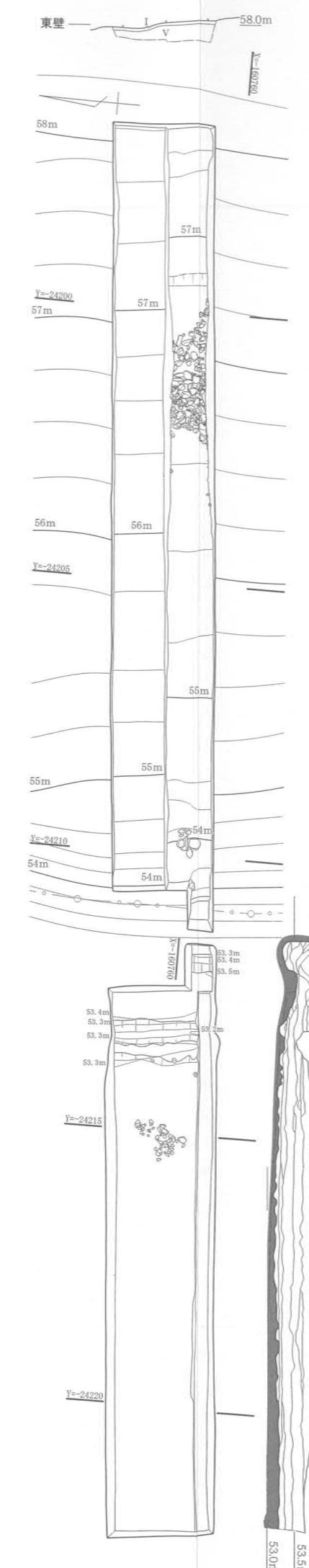


第29図 三吉陵墓参考地 墳丘推定復元図 (1/2,000)

宮内庁第11トレンチ  
南壁



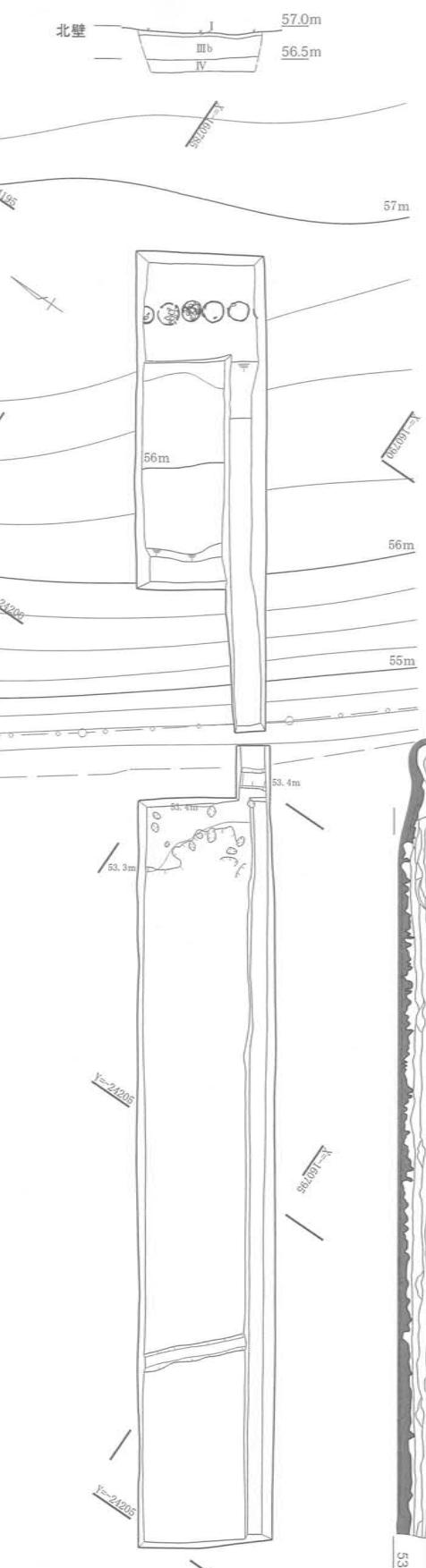
宮内庁第11トレンチ  
東壁



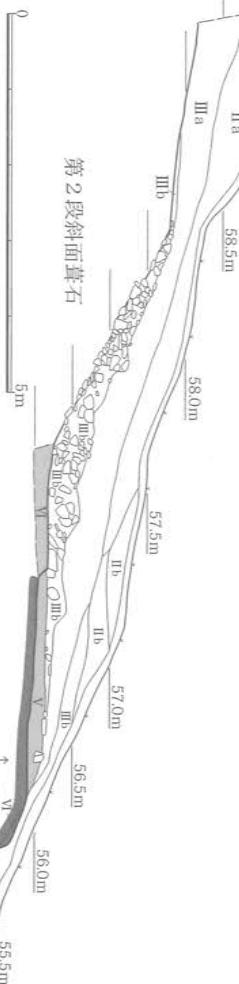
宮内庁第10トレンチ  
東壁



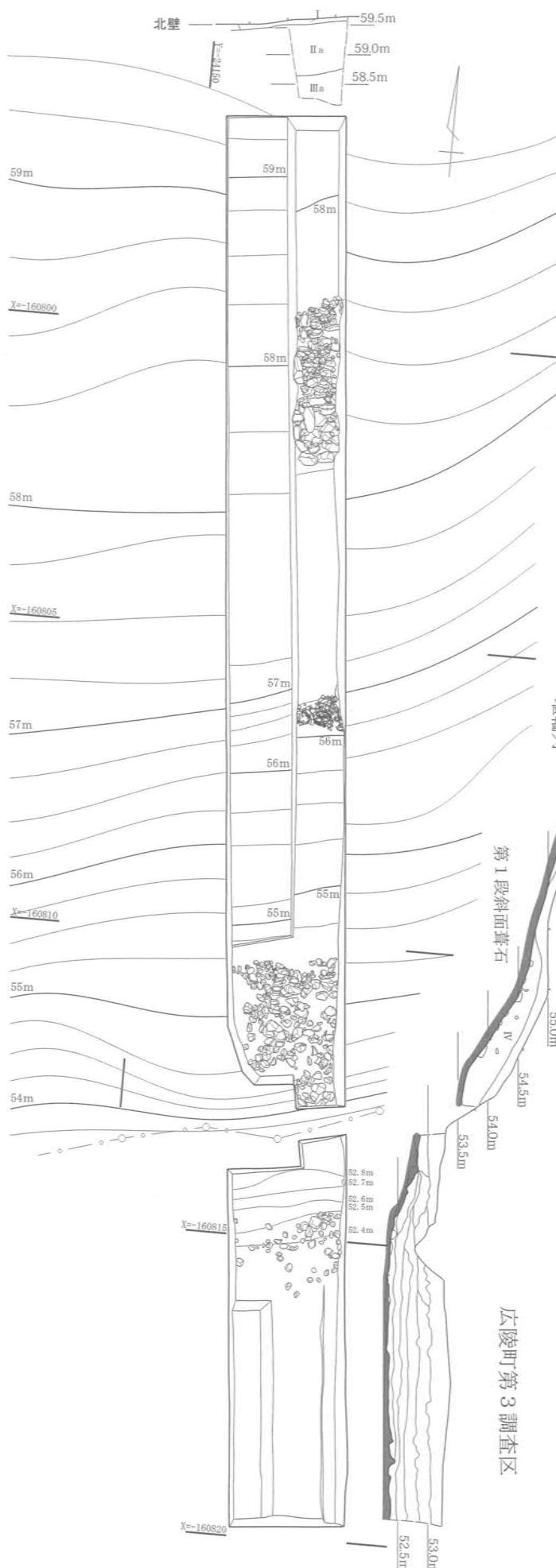
広陵町第2調査区



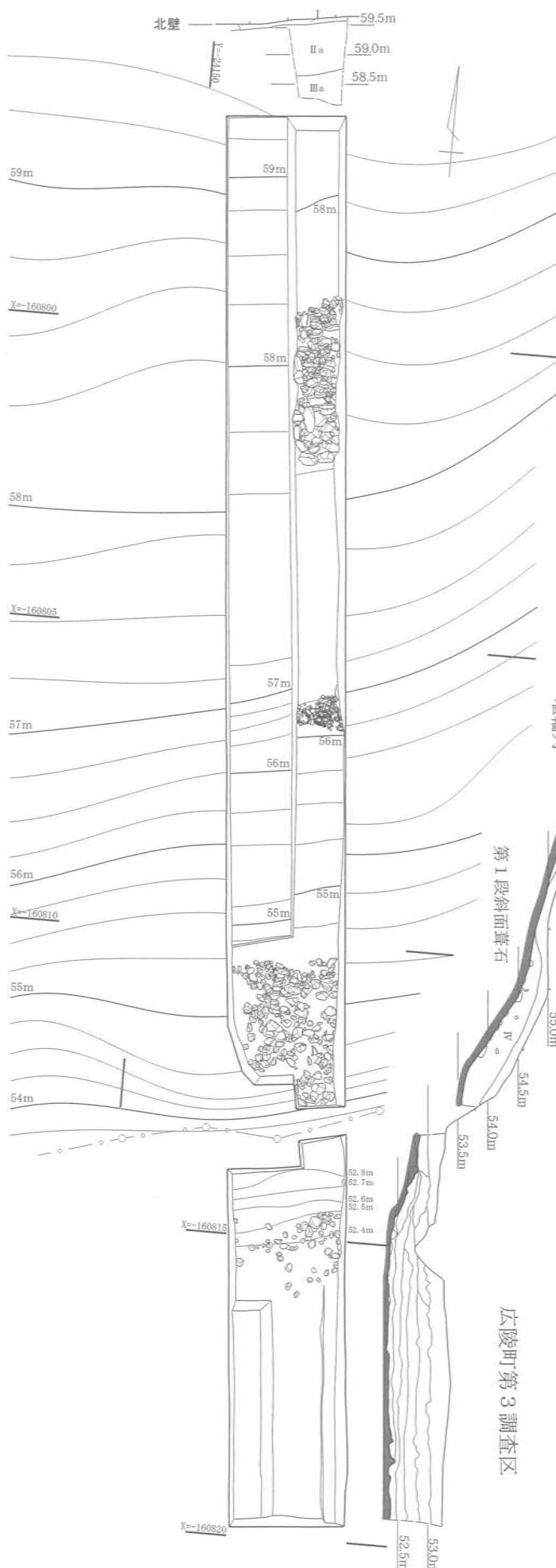
宮内庁第9トレンチ  
東壁



宮内庁第9トレンチ  
北壁



広陵町第3調査区



■ 墳丘第1段テラス面  
■ 地山

広陵町調査区の図面は広陵町教育委員会の提供による（一部改変）。  
なお、各調査区ともに地表面直上に中世遺物包含層を検出しているため、築造時の濠底は確認されていない。そのほか調査所見の詳細については、同町刊行の報告書を参照されたい。

第30図 三吉陵墓参考地 宮内庁及び広陵町調査区平面図・断面図 (1/100)

**第2段目** 第2段目の裾については、第9トレンチで検出した第1段目テラスの高さから標高約56.2mである。第2段目の残存斜面は、標高約57.75mまでであるが、墳丘測量図を見る限り、標高約60mより61mまでに明瞭な平坦面が見られ、これを参考にした場合、第2段目の高さについては、約4mと推測出来る。第2段目テラスについて、標高約60mより61mに位置していると仮定した場合、その長さは墳丘測量図を見る限り6m程度である。上記より、第2段目の規模は、主軸長約175m、後円部最大幅約98m、前方部最大幅約84m、高さ約4m、テラス幅約6mと推定復元が可能である。

**第3段目** 第3段目の裾については、墳丘測量図で標高約61mより等高線が明らかに密となることから、その付近が裾と考えられる。しかし、前方部第3段目東端を見ると、ここだけ標高約62mより等高線が密となる。現状の後円部第3段目墳頂は標高約72m、前方部第3段目墳頂は標高約68.5mであり、平坦面の幅は、後円部・前方部ともに約24mである。標高約61mを第3段目墳裾と仮定した場合、第3段目の高さは、後円部で約11m、前方部で約7.5mである。上記より、第3段目の規模は、主軸長約150m、後円部最大幅約74m、前方部最大幅約51m、後円部高約11m、前方部高約7.5m、後円部平坦面幅約24m、前方部平坦面幅約24mと推定復元が可能である。

## (2) 墳輪列の位置について

本調査で得た所見と墳丘復元図(第29図)を元に、埴輪列の位置について述べ、本来の位置復元を試みる。なお、本調査で検出したのは、第1段目テラス上の埴輪列のみであり、第2、3段目の状況については不明である。

**第5トレンチ** 前方部南側の円筒埴輪列である。埴輪列は、基底部が現状で標高約55mに位置する。埴輪は全部で4個体である。埴輪列全体が南側へ大きく傾いていること、各個体が直線で並ばないことから、それぞれが本来の位置にないことは明らかである。ゆえに、本トレンチで検出した埴輪列は、築造当初の位置ではなく、移動して現在の位置となったものである。埴輪列本来の位置は、南への著しい傾斜から見て、現在位置より北と考えられるが、詳細は不明である。

**第9トレンチ** 後円部南側の円筒埴輪列である。埴輪列は、基底部が現状で標高約56mに位置する。埴輪は全部で4個体である。埴輪列全体が南側へ傾いていること、崩れた墳丘盛土内にも埴輪片が含まれることから、それぞれが本来の位置にないことは明らかである。ゆえに、本トレンチで検出した埴輪列は、第5トレンチと同様、築造当初の位置ではなく、多少なりとも移動して現在の位置となったものである。埴輪列本来の位置は、南への傾斜から見て、現在位置よりやや北と考えられるが、第1段目テラスがほぼ水平に残存する状況からは、それほど埴輪列は大きく動いてはいないと判断できる。その場合、第1段目テラスは、残存テラスと残存斜面を直線で交差させた復元長で約6.2mであることから、埴輪列はテラス南端より約2.2m北側に位置していると推測出来る。

**第10トレンチ** 後円部南西側の円筒埴輪列である。埴輪列は、基底部が現状で標高約56.2mに位置する。埴輪は全部で6個体である。埴輪が全体的に直立していること、直線的に並ぶことから、樹立当初の位置にあることは明らかである。第5トレンチ、第9トレンチの埴輪列は、本来の位置を保っていないため、樹立当初の位置を保っているのは、第10トレンチの埴輪列のみである。埴輪列の位置については、墳丘復元図を見た場合、第1段目テラス南端より約2m北側となっており、第9トレンチで推定した埴輪列の位置と矛盾しない。

**後円部と前方部の埴輪列** 後円部の埴輪列については、第9、10トレンチで、その墳丘における位置を推定することが出来たが、前方部の埴輪列については、上述の通り、本来の位置を保つものが無く、推定することが出来なかった。第10トレンチの埴輪列の基底部高は標高約56.2m、第9トレンチの埴輪列の基底部高は標高約56m、第5トレンチの埴輪列の基底部高は標高約55mで、トレンチの西から東へと基底部高が低くなっているが、第5トレンチの埴輪列は、その著しい傾きから、明らかに北側から下がってきたものである。墳丘を復元した場合、第1段目テラスについては後円部と前方部で大きな比高差が無いことから、第5トレンチの埴輪列は、本来1m程度北側上方に位置していたものと推測出来る。

(横田)

### (3) 葦石について

本調査において、第4・6・7・8・9・11トレンチにおいて葦石を検出している。第4・6・7・8トレンチは第1段斜面の葦石であり、第11トレンチでは第2段斜面の葦石を検出した。第9トレンチのみ第1、2段両方の斜面で検出している。

**第4トレンチ** ごく一部の確認に留まっているため詳細は不明である。突出部として南にのびる土堤の下に潜り込んでいくため、前方部南側面の裾が残存していることが期待される。石材は比較的小形のものが認められる。

**第6トレンチ** もっとも広く葦石を検出した。前方部第1段斜面と造出東斜面の屈曲部である。どちらの斜面の葦石が先に施工されたか、その差は見出し難いが、一部造出側の石が前方部側の下に潜るように見える。屈曲部すべてでその状況が明瞭に見えないため明言はできない。また、屈曲部がやや不明瞭であり、目地が認められないことが特徴として挙げられる。なお、目地は第6トレンチの中で幾つか確認することができるが、6～7個が連続して積まれている状況がもっとも長いもので、多くは4～5個程度で途切れてしまう。他のトレンチでも検出範囲内で長い目地は認められない。

ところで、第6トレンチの葦石を観察した奥田尚氏からは、幾つかの所見をいただいている。

まず、石材の使用傾向により、第6トレンチの中で3つのまとまりに区別できるということである。ここでは便利的に西区画、中区画、東区画とする(第13図矢印部分)。石材の使用傾向を見ると、比較的中区画に多様な石材が集中して用いられている一方で、西区画と東区画では、柘榴石安山岩と輝石安山岩Aが大半を占め、他の石種はごく僅かしか使用されていない。また、西区画と中区画の境は、調査時に屈曲部であろうと認識した箇所と約0.4mほど西にずれている。屈曲部が必ずしも葦石の区画の境界となる必要はないが、先述したとおり屈曲部は必ずしも明瞭ではなく、目地が認められることから、このような状況と関係するのかもしれない。

なお、この所見とは別に、石材の使用傾向を認識しない段階で、報告者において葦石の観察を行った結果を、奥田氏の所見と照合すると、西区画と中区画の境がおおむね対応するようである(第13図中の網かけの目地)。報告者の観察は、石材の大きさや形態と積み方から違いを認識したものである。西区画においては、比較的厚みの少ない細長い石の長軸を水平方向に向けて積まれている石が目立ち、中区画においては、比較的小さく丸みのある石が多用されている状況が認められた。これは、石種だけではなく、石の形態や大きさなどが選択されていた可能性などを示唆するものであろうか。

また、中区画においては、深成岩である細粒黒雲母花崗岩、アプライト質黒雲母花崗岩や細粒閃緑岩などが、数個単位でまとまり、まだら状に点在する傾向があるという。一人が一回あたりに運搬する個数を示す可能性があるということで、葦石施工のあり方の一端を示しているかもしれない。また、巣山古墳の墳丘西側でも同様の様相が観察されているとのことであり、墳丘形態の類似する両者で葦石においても同様の傾向が認められることは、興味深い事象といえよう。

**第7トレンチ** 造出南斜面を検出した。後世の開墾の影響などで必ずしも残存状態が良好とはいえないが、石材の長軸を水平方向に揃えて設置するなど、施工状況をある程度把握することができる。明瞭な目地は認められない。

**第8トレンチ** 南側くびれ部にあたる。裾付近が良好に残存しているが、上方では既に削られている。石材の重なり具合を見る限り、残存部の下位は造出側斜面の葦石が先に施工された状況が認められるが、上位では後円部側となっている。どちらかの斜面だけが先に造られたということではないようである。くびれ部の最奥部の葦石であるが、後円部と造出の屈曲部を明瞭に示すような目地は認められない。裾では基底石と呼ぶにふさわしい大形の石が使用されている。また、大形の石の間は小形の石が充填されているような状況も認められる。

**第9トレンチ** 第1段斜面と第2段斜面の葦石を検出した。第1段斜面の天端は、既に削られたり流出に

より失われている。裾は境界の外に伸びていくと考えられる。検出範囲内では大形の石は少なく、石の流失も目立つが、石が11個積まれた目地が認められる箇所もあり、ある程度本来の状態を残している。第2段斜面は、上方が削平されているものの、残存部分は非常に良好に残存している。石の噛み合わせは丁寧で、密に積まれている。基底から5～6段分で、長軸が30～40cmを測る大形の石が使用されており、基底石は長軸を水平方向に向けて設置されている。上に向かうにつれて、小ぶりな石の割合が高まり、10個程度が直線的に積まれて目地と認識できる箇所もある。本トレンチで確認される目地は、第6トレンチで認められた目地と比較してわずかばかり長い。

**第11トレンチ** 第2段斜面の葺石を検出した。基底部分が残存しているが、上方は第9トレンチと同じ状況で既に削られている。石材はやや小ぶりで、基底部においても長軸が30cmを超えるような石は使われていない。比較的良好に残存しているといえるが、他のトレンチで見られたような、丁寧な積み方と比較するとやや疎らになっていることから、全体に動いているようにもみえる。石の長軸を水平方向に重ねて積んだ箇所も認められるが、目地といえるようなものではない。

各トレンチの葺石の状況を述べてきたが、葺石の施工方法としては、共通点を以下のとおり挙げができる。

- ・大形の石を使用する割合が低いようである。第8トレンチの墳丘裾付近と第9トレンチの墳丘第2段斜面基底付近では、他のトレンチでは見られないような大形の石の使用が認められる。
- ・石の長軸を水平方向に向けて設置する場合が多い。小形の石については、斜面に長軸を突き込むようにして設置する状況が目立つ。必ずしも長軸を斜面に向けない場合も、石の噛み合わせを考えて、丁寧に施工している状況が認められる。
- ・施工範囲を区画するような長い目地が認められない。

以上のとおり、検出した範囲内では、葺石の施工における技術的な面では大きく異なるものではないと言えそうである。一方、第6トレンチでは石材の使用傾向が3つに分けられる可能性が指摘されているが、これらが目地と対応するわけではない。この石材の使用傾向により認識できる3つのまとまりが示す意味は、色々な可能性が考えられる。目地のような明瞭な区画をもたないものの、作業範囲を区別していた結果を示す可能性も考えられるし、単に一連の作業工程上の休止面を示すのかもしれない。いずれにしても、これらを明らかにするには事例の蓄積が必要であろう。

なお、使用されている石種やその特徴などについては、後掲する奥田尚氏の報文を参照されたい。

#### (4) 第7トレンチの埴輪埋設遺構について

第7トレンチでは、蓋形埴輪を主体として意図的に埴輪片を埋設したと考えられる特殊な遺構を検出している。その性格については不明といわざるを得ないが、造出上面に設定されたものであり、平面上の位置から造出コーナー部分かそこに極めて近い位置にあたると考えられる。埴輪列自体は本トレンチ内では検出されていないため、埴輪列との位置関係は不明である。以下に、調査経過を辿りながら詳述していきたい。

まず、トレンチ全体を掘り下げる過程で、埴輪列が検出される可能性を考えた。しかし、攪乱を受けていたためか、きれいな平坦面として検出されず、平坦面に近い高さで埴輪片が散乱する範囲が認められた。破片は朝顔形もしくは鍔付壺形埴輪（以下、単に壺形）の口縁部破片が多かったが、上層の流土内に含まれていると考えて、これを取り上げた。結果的に、この破片が出土した範囲と極めて近い位置から本遺構が検出され、かつその破片は同一個体である可能性が考えられる（第23図15～17など）。そのため、本来は大きな口縁部の破片であったことが推測されると同時に、本遺構に伴うものであった可能性が高いと考えられる。

朝顔形埴輪片を取り上げた後に周辺を精査したところ、標高約54.2m付近から蓋形埴輪の立飾りのうち飾板（以下、単に飾板）が立位の状態で検出され始めた。そのため、周囲の残った流土を除去したところ、やや下がった位置に横倒しの状態で蓋形埴輪の立飾りのうち軸部（第25図39以下、単に軸部）が検出された。後世の攪乱はそれなりに深かったようで、この時点でき多くの埴輪片が露出することとなった。器面の

荒れた破片が多く、上面を削平されたことにより一定期間地表面に露出していた可能性も考えられる。そして周辺精査の結果、埴輪を中心に南北約0.5m×東西約0.6mの範囲で土の質と色調の違い(①茶褐色砂質土、②淡赤褐色粘質土で灰褐色～赤褐色粘土ブロックが顕著)を認識したことから、土坑内に埴輪が納められた遺構であると考えた。飾板は西寄りに集中し、大きな2枚の破片が立てかけられた状態で出土し、小さな破片が軸部との間に多数検出された。その中に少量の朝顔形(壺形)の口縁部破片が含まれている。

なお、壁に立てかけられている飾板の破片は全周していない。先に述べた朝顔形(壺形)の口縁部片が同じような用途で、立てかけられていたのかもしれない。遺構のすぐ東～南側では段がつくように削り込まれており、この攪乱によって朝顔形埴輪は移動・破壊されたと考えることができる。

飾板と軸部の下端はいずれも標高53.9～53.95m付近で揃っており、この高さが埴輪の設置面と判断された。そして、それらを取り上げた後、床面の検出を試みた。しかし、平面的には周囲と埋土は色調や土質の違いとしてある程度認識できるものの、明瞭な壁や床は認められなかった。そのため、下方を掘り下げたところ、標高53.9m付近で新たに埴輪片(第25図40)が検出されたため、さらに掘り下げを進めた。その結果、最終的に高さ8cmほどで半周分程度しか残っていない円筒埴輪と考えられる底部(第25図41)が検出された。底部の検出面は平坦で標高53.75mである。結局、掘方を設けたと考えられるような、明瞭な壁は認められず、壁と考えられる立ち上がりの面では①と②・③(赤褐色～淡赤褐色粘質土で灰褐色粘土ブロック含む)がまだらに認められる状況であった。

埴輪の設置状況を確認するために、最終的に埴輪底部周辺で断面を確認した。その結果、平面での認識と同様に、埴輪を埋めた土(①)と周辺の墳丘盛土(②・③)では異なる土が使用されていることが判明した。埴輪の接地面においては、一部①と③は混在するような状況にあった。断面では埴輪の検出された範囲と重なる位置で①の立ち上がりも認められたが、袋状を呈しており、図上では線を引いてあるが、実際は①と②・③の境となるラインは不明瞭なものであった。

上記のとおり、上面ではある程度の輪郭が確認されたものの、全体として明瞭な壁や床面が形成されていないことから、掘方が設定されていた可能性は低いと考えられる。よって、周囲の盛土により見かけの掘方を形成しつつ、埴輪の設置が段階を踏みながら並行して行われたと推測される。そして、その際に埴輪の埋土と周囲の盛土は異なっていたと考えられる。

このことを踏まえて、埋設の過程を復元すると以下のようになろう。

【1】標高53.75m付近を最初の設置面として、まず破壊されたような埴輪底部が置かれる。埴輪底部の内側には墳丘盛土(③)が少し入っている。この時、①は接地面直上から確認でき、かつ埴輪外側に認められなかつたので、先に③を土坑状になるように平面円形に積み、その見かけの掘方に接するように埴輪底部を設置したと考えられる。さらに、この段階で③は、飾板、軸部の接地面となる標高53.9～53.95m付近まで、約20cmほどの厚さで盛られていたと考えられる。これは最終的な断面の確認でも土層の違いとして認識できた。そして、幾つか埴輪片を含みつつ①により内部が埋められる。→【段階1】

【2】段階1を終えた時には、いったん標高53.9～53.95mで床面を整え、次の埴輪設置面を形成したと考えられる。そして、再度周囲に②を標高54.2m付近まで積み、再び見かけの掘方を作ったと考えられる。続いて平坦面上に軸部を横倒しに設置し、さらにこの見かけの掘方に飾板を立てかけたと考えられる。その後、飾板や朝顔形(壺形)の破片を含みつつ①で埋めていく過程となる。→【段階2】

【3】飾板と軸部の埋め戻し後に、次の段階があったかどうかは、本来の造出上面レベルが確認できていなかったため不明である。朝顔形(壺形)口縁部の破片が飾板や軸部の上に置かれていたと仮定すれば、段階3が存在した可能性を残すといえる。

このように、まず埴輪設置範囲の周辺を墳丘盛土(②・③)で平面円形の土坑状に積み、埴輪を設置する。埴輪を設置後に内部を埋める時には①を使用するという工程を少なくとも2回行っていると考えられる(段階1・2)。最終的な断面の確認で、段階2の埴輪設置面とほぼ同じ高さで盛土の違い(②・③)が認められたことも、段階的な埋設を考える根拠のひとつである。しかし、①の中で土層に違いは認められなかった

ので、段階1と2はあまり時間はおかずには、連続する可能性が高いと考えられる。

段階的な埋設行為と考えられるため、この遺構は造出上で行われた何らかの祭祀痕跡であろう。しかし、これが墳丘完成後に行われたのか、築造過程で行われたのか、また、なぜ破壊されたような埴輪が使用されているのかなど、不明な点が多い。

特に最も下から検出された埴輪底部は、いったん樹立されていた埴輪が削られた残骸かとも考えられるような状況である。しかし、埴輪を削ったような攪乱の土層は認められず、蓋形や朝顔形（壺形）とは直立する位置関係であり、これらが偶然に集まっていると考えることは難しい。

また、この遺構が築造時のものか否か、後世に埋設された可能性はないか、ということも問題となろう。第7トレンチの葺石の残存レベルから考えると、この遺構を埋め戻した上面は造出上面とほぼ一致すると考えられるが、本参考地築造時期の遺構であると断定することはできない。蓋形埴輪の立飾りや朝顔形（壺形）埴輪の口縁部など埴輪の一部が利用されていることから、一定期間おいた後の埴輪の再利用も考えられるため、当面、遺構の構築時期については保留するほかない。

#### （5）後世の改変について

広陵町教育委員会による周濠部の調査結果から、浚渫など周濠部の利用や改変は平安時代中期以降～近世の間で複数回行われていることが指摘されており、墳丘部も少なからず影響を受けていたであろうことが推察される。そのため、各トレンチ内で確認された盛土の時期や性格を单一のものとしてまとめることは容易ではない。

本調査において墳丘裾部に設定したトレンチは、北側の今池に面した範囲ではなく、南側を中心とする既に陸地化している範囲にあたる。しかし、おしなべて盛土が確認されていることから、浚渫土ではない盛土が大半であると考えられる。現に浚渫土に特徴的な灰褐色を呈する粘質土は確認していない。

その中で、第6・8トレンチなどを中心に多くのトレンチで中世遺物が出土しており、第6トレンチ盛土内からは19世紀中頃以降と考えられる染付（第27図55）が出土している。そして、中世遺物と近世遺物では、圧倒的に近世遺物の割合が高い。また、第6トレンチに見られるような近世末の遺物の時期と、今池の造成時期との関係から、両者の関係が指摘されている<sup>(5)</sup>。この点を踏まえて、新たに作成した墳丘測量図と陵墓地形図、今回の調査結果を再見してみたい。

前方部前面の北よりには、今池の南側を堰き止める堤が造られている。新たな測量図で顕著であるが、堤と前方部の接続部付近の南側から等高線の乱れが認められる。このことから、あるいは堤より南側の墳丘部では、築堤のための土取りが行われた可能性が考えられる。よって、これが埴輪列や葺石といった墳丘外表施設を失わせる要因のひとつになった可能性が考えられよう。一方、特に第1トレンチにみられた現状テラス面付近の厚い盛土は浚渫土ではないと考えられるため、築堤の残土などが戻された可能性もあり得るが、どのような経緯で形成されたかが問題となる。

ところで、陵墓地形図をみると、現在の墳丘第1段テラス面上には、堤と前方部の接合部付近から第9トレンチ付近まで溝が表記されており、これは現在も現地を歩けば地表面にくぼみとして確認できる。また、第1トレンチ土層断面図の左上端のくぼみがこの溝にあたり、溝全体の中では東端付近に位置する。そして、第1トレンチで確認されるこの溝の標高は56.5mである。一方、溝の西端付近に位置する第9トレンチでは、第1段テラス面にあたる標高55m付近にこの溝が確認できる。ここで注目すべきなのは、第1トレンチ付近と第9トレンチ付近では、約1.5mの高低差をもって前方部の第1トレンチ側が高いということである。本参考地は第9トレンチのある後円部が高い丘陵斜面にあり、第1トレンチのある前方部側に向かつて下る地形上に築かれている。さらに、後円部の第9トレンチ埴輪列基底部の検出面は標高55.9m付近であるが、前方部の第5トレンチ埴輪列基底部の検出面は標高55.2m付近である。第5トレンチの埴輪列は上方からの移動が考えられるため、本来はもう少し高い位置にあったと考えられるが、第9トレンチの高さと同程度までと考えられる。築造時のテラス面もまた、地形と同様に前方部側が下降しているか、あるいは水平に近いと考えられる。つまり、溝が作られている現状の第1段テラス面は、盛土によって周辺地形とも

築造時のテラス面とも逆の傾斜面を形成していることがわかる。

このことから、盛土は、今池から汲み上げた水を墳丘南側の耕作地に送る水路として利用するために、高低差をつけることを目的に行われた可能性が考えられる。このように考えられるならば、第1～9トレンチ間に認められる盛土の時期と性格は、ある程度同じまとまり、すなわち今池の造成とその水利に関わるものとして捉えることが可能となろう。これは、途中の第6トレンチ盛土(Ⅱa)内から19世紀中頃以降の磁器が出土していることとも矛盾しない。しかし、盛土の規模に比べて溝の規模は小さいため、そこまで有機的に関連させられるかは多少の疑問が残る。あくまでひとつの理解として提示しておきたい。

また、第1～9トレンチでみられた盛土のうち上層のものは、今池の造成に伴うものと考えられるにしても、下層のものについての性格、時期は、現状では不明というほかないものもある。遺物の様相から断片的に推測するならば、先述のとおり中世遺物の割合が低いことから、中世における盛土の可能性は低く、多くは近世の盛土と考えることができようか。よって、土層で確認される盛土の区別も、多くは近世の中に属するものと考えられる。しかし、近世の中での細かい区別については、それを明らかに出来るような遺物の出土状況にないため、不明と言わざるを得ない。

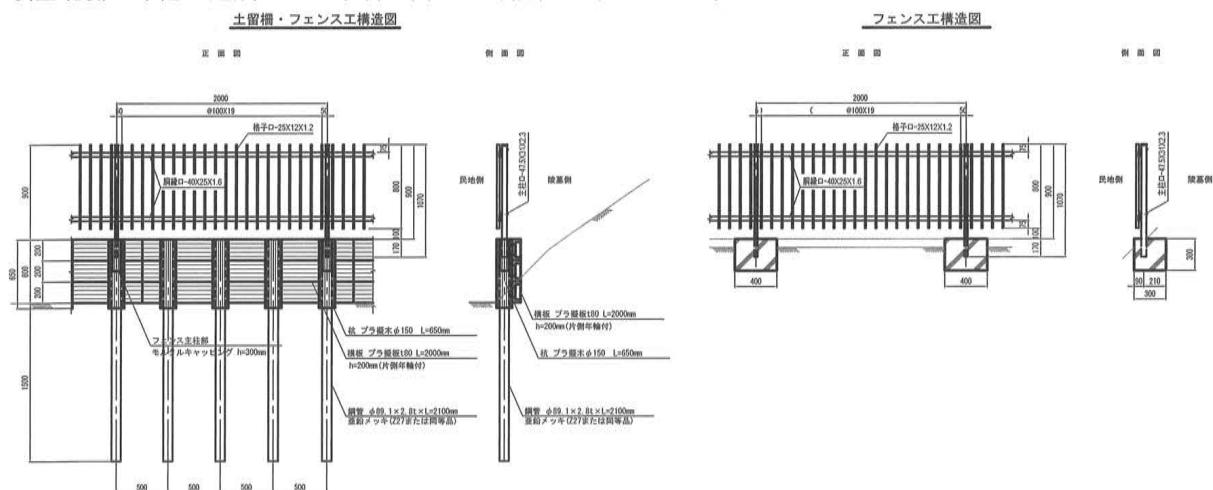
なお、第10～12トレンチや墳丘第2段斜面以上でみられた削平と盛土については、盛土から少量の陶磁器や瓦の破片が出土していることから、当面は第1～9トレンチの盛土の時期に近い可能性を考えておきたい。

以上述べてきたように、やや消極的ではあるが、墳丘の外表施設が失われる原因となった改変と盛土に、ある程度は有機的な関連があると考えることは可能であろうか。よって、いったん削られた墳丘盛土あるいは地山上に堆積する盛土との間には時期差があまりない箇所も多いと考えられる。明瞭な旧表土の認められたトレンチがないのはこのような理由によるのかもしれない。

(清喜)

## まとめ

**調査成果について** 今回の調査は、外構柵設置範囲の調査であったため、墳丘南側面を中心とした範囲において実施した。各トレンチの所見から、本来の墳丘裾は既に周辺耕作地の開発によって削られていることが明らかとなった。特に前方部の前面南半部から南側面東半部(第1トレンチ～第5トレンチ付近)にかけては、いったん墳丘が大きく削られた後に、大規模な盛土が行われていた。これにより、一見するとあたかも本来の墳丘面を留めているかのように復旧されていたことが判明した。よって、この範囲では、ごく一部(第4トレンチの葺石、第5トレンチの埴輪列)を除いて、本来の遺構はほとんど残存していないと判断できる。調査箇所の多くで後世の盛土を確認した。時期の不明なものあるが、比較的上層の盛土については、墳丘北側の今池の造成とその水利に関わる可能性が考えられる。



第31図 三吉陵墓参考地 工事図面立面図

一方、前方部南側面中ほどから南造出を経由して後円部南側面中ほどに至る範囲（第5トレンチ～第9トレンチ付近）については、裾付近まで比較的葺石が残存していた。しかし、後円部西側（第9トレンチ西側～第12トレンチ付近）では再び墳丘裾は削られており、第9・10・11トレンチでは第1段テラス面や埴輪列、葺石が確認されたものの、本来の墳丘裾については、調査範囲内では確認できず、境界線の外側に本来の墳丘裾が存在したと考えられる。

なお、第9・10・11トレンチでは、延長した位置に広陵町教育委員会によるトレンチが設定されたが、当庁の境界線の外側においても、本来の墳丘裾を確定できるような痕跡は認められなかった。

遺物は、遺構の残るトレンチを中心に埴輪が出土している。第5・9・10トレンチでは埴輪列が検出された。円筒埴輪、朝顔形埴輪のほか、第6・7トレンチなど造出周辺では形象埴輪（蓋形・短甲形・家形）が確認されている。埴輪は全体に摩滅が激しい。また、土器片も少量出土している。それ以外では、中近世遺物があるが、中世遺物は微量で、近世の陶磁器類が多く確認されている。前方部に見られる大規模な盛土を中心に、各トレンチで確認された後世の盛土に伴うものである。

墳丘の形態・規模は、近隣に所在する巣山古墳に近似しており、葺石のあり方にも類似性が認められるようであるが、埴輪などは摩滅が著しく詳細な比較検討は今後の課題である。

**工事内容について** 調査の結果、境界線沿いに葺石が残る箇所のあることが判明した。具体的には第5トレンチから第9トレンチ間である。この間では葺石を保護するため、外構柵の位置を境界線沿いではなく、現在の墳丘裾から急激に立ち上がった斜面の肩付近に上げ、基礎自身も厚みの減じたものを使用することで葺石に影響が及ばないように配慮した。それ以外の範囲については、開墾等により遺構は残存していないと判断されることから、境界線に沿った位置での設置を行うこととした（第31図）。 （清喜・横田）

#### 註

- (1) 広陵町史編集委員会編『広陵町史』本文編、広陵町、2001年。
- (2) 井上義光『昭和62年度 石塚古墳範囲確認調査概報 新木山古墳外堤範囲確認調査概報』（広陵町埋蔵文化財調査概報1）、広陵町教育委員会、1988年。
- 井上義光『新木山古墳外堤第2次範囲確認調査概報一ノノワ古墳群発掘調査概報一』（広陵町埋蔵文化財調査概報8）、広陵町教育委員会、2010年。
- (3) 奈良県立橿原考古学研究所(編)『森本六爾関係資料集I』、(財)由良大和古代文化研究協会、2011年。
- (4) 応神天皇陵飛地ほ号（墓山古墳）から三角板革縫縫付短甲を表現した埴輪が採集されているが、この資料も帶金を粘土帯により立体的に表現している。  
小野山節ほか編『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第2部、京都大学文学部、1968年。
- (5) 吉村公男「『陵墓限定公開』新木山古墳」『古代学研究』第191号、古代学研究会、2011年。

# 三吉陵墓参考地の葺石石材の石種とその採石地

奥田 尚

## はじめに

三吉陵墓参考地に設定された第4・6・7・8・9・11トレーナー内に出土した葺石に使用されている石材を裸眼と倍率25倍の実体顕微鏡で観察した。石材の使用傾向、石材の石種、石材の採石地について述べる。

## 1 石材の使用傾向

観察した石材3555個のみかけの長径は、10cm未満が28%、10cm以上20cm未満が61%、20cm以上30cm未満が9%、30cm以上40cm未満が1%、40cm以上45cm未満が僅か3個である。長径の中心は10cm以上15cm未満の石材で、41%を占め、この前後の長径を含めた5cm以上20cm未満のものが89%を占める。石材の石種と鉱物種は流紋岩(13%)、石英安山岩(ー以下、1%未満をーで示す)、安山岩(ー)、柘榴石安山岩(52%)、輝石安山岩A(25%)、輝石安山岩B(ー)、玄武岩(ー)、アプライト質黒雲母花崗岩(ー)、細粒黒雲母花崗岩(2%)、中粒黒雲母花崗岩(ー)、細粒閃緑岩(4%)、中粒閃緑岩(1%)、斑状斑駁岩(ー)、片麻状黒雲母花崗岩(ー)、チャート(ー)、石英(ー)である。使用石材の石種を成因で区分すれば火山岩が91%、深成岩が8%となり、変成岩の片麻状黒雲母花崗岩が2個、堆積岩のチャートが6個、鉱物の石英が2個となる。石材を形と表面の様子からみれば、角に円みがあり、表面が川原石のように滑らかであるものと、角が鋭く、割った石のように表面が新鮮であるものがある。多くの石材は前者のような川原石様であるが、輝石安山岩Aの一部と輝石安山岩Bの殆ど全ては後者に属する。後者の石材は露岩から、節理面を利用して剥がした石と推定される。

## 2 石種の特徴

観察した石材の石種・鉱物種は、流紋岩、石英安山岩、安山岩、柘榴石安山岩、輝石安山岩A、輝石安山岩B、玄武岩、アプライト質黒雲母花崗岩、細粒黒雲母花崗岩、中粒黒雲母花崗岩、細粒閃緑岩、中粒閃緑岩、斑状斑駁岩、片麻状黒雲母花崗岩、チャート、石英である。これらの特徴について述べる。

**流紋岩:**色は灰白色である。斑晶鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明、粒径が0.5~1mm、量が僅かである。長石は無色透明、粒径が0.5~1.5mm、量が僅かである。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5~1mm、量がごく僅かである。石基は黄灰色、ガラス質である。

**石英安山岩:**色は淡青灰色である。斑晶鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明、粒径が1~2mm、量が僅かである。長石は灰白色、粒径が2~3mm、量が中である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1~2mm、量が僅かである。石基は青灰色、ガラス質である。

**安山岩:**色は赤茶色で、発泡孔が多い。孔は球状で、孔径が1~2mmである。斑晶鉱物は長石である。長石は灰白色、粒径が1~3mm、量が中である。石基は赤茶色、ガラス質である。

**柘榴石安山岩:**色は灰色で、発泡孔が多い。孔は不定形で、孔径が2~3mmである。斑晶鉱物は長石、黒雲母、柘榴石である。長石は灰白色、粒径が1~2mm、量が中である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1~3mm、量が僅かである。柘榴石は濃赤色、粒状で、粒径が1~2mm、量がごく僅かである。石基は灰色、ガラス質である。

**輝石安山岩A:**色は灰色である。斑晶鉱物は長石と輝石である。長石は灰白色、柱状で、粒径が0.5mm、量が僅かである。輝石は黒色、柱状で、粒径が0.5~1mm、量がごくごく僅かである。石基はガラス質である。

**輝石安山岩B:**色は灰色である。斑晶鉱物は長石と輝石である。長石は灰白色、粒径が0.5~1mm、量

が中である。輝石は黒色、柱状で、粒径が1～3mm、量が中である。基質はガラス質、やや粒状である。

**玄武岩**：色は淡青灰色である。斑晶鉱物は長石、輝石、橄欖石である。長石は灰白色透明、短柱状で、粒径が2～3mm、量が僅かである。輝石は黒色、短柱状で、粒径が1～2mm、量が中である。橄欖石は淡黄色透明、粒状で、粒径が0.5～1mm、量が僅かである。石基はややガラス質である。

**アブライト質黒雲母花崗岩**：色は灰白色である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1～2mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が1～3mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1～1.5mm、量がごくごく僅かである。

**細粒黒雲母花崗岩**：色は灰白色である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が0.5～1mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が0.5～1mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が0.5～1mm、量がごくごく僅かである。

**中粒黒雲母花崗岩**：色は灰白色である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は灰色透明、粒径が2～3mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が2～6mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が2～4mm、量が僅かである。

**細粒閃綠岩**：色は暗灰色である。長石・角閃石・輝石が噛み合っている。長石は灰白色で、粒径が0.5～1mm、量が多い。角閃石は黒色、粒径が1～2mm、量がごく僅かである。輝石は暗緑色、粒径が0.5～1mm、量が中である。

**中粒閃綠岩**：色は灰白色である。長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。長石は灰白色で、粒径が2～4mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が2～4mm、量が僅かである。角閃石は黒色、粒径が2～5mm、量が中である。

**斑状斑糰岩**：色は暗灰緑色である。長石・角閃石・輝石が噛み合っている。長石は灰白色で、斑状と基質をなす。斑晶の長石は、粒径が4～6mm、量が僅かである。基質の長石は、粒径が0.5～2mm、量が中である。角閃石は黒色、粒径が2～4mm、量が僅かである。輝石は暗緑色、粒径が1.5～3mm、量が多い。

**片麻状黒雲母花崗岩**：色は暗灰色で、顕著な片麻状を呈する。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明で、粒径が1～2mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が1～2mm、量が中である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1～2mm、量が中である。

**チャート**：色は青灰色、赤茶色、灰色である。

**石英**：灰色透明、灰白色透明である。

### 3 石材の採石地

「馬見一里は石なし一里」と言われているように、馬見丘陵には拳大の石ころすらも含まれていない大阪層群下部層に相当する砂礫層が北西に緩く傾斜して分布する。調査地で出土した葺石の石材は馬見丘陵で採取できない石材で、他地から運ばれてきたものである。調査地を中心として、葺石の石材と同様の岩相を示す石が近距離で分布する地を石材の採石地とする。

葺石の殆ど全てを占める火山岩は岩相的に二上層群を構成している火山岩と推定され、僅かの深成岩や変成岩は領家変成帯に分布する岩石と推定される。二上山付近の岩石分布をもとに石材の採石地について述べる。

二上層群には流紋岩、安山岩、玄武岩と種々の火山岩が分布し、安山岩は含まれる鉱物の種類から石英安山岩、安山岩、柘榴石安山岩、輝石安山岩などに区分される。これらの火山岩は各山によって分布が異なる場合が多く、石種の構成により採取地が限定できる場合がある。石種の分布をみれば、二上山の雄岳には長石のみの斑晶を含む安山岩、同山雌岳には流紋岩、春日山には斑晶鉱物が殆どみられない輝石安山岩、寺山・鉢伏山には石英安山岩、芝山には橄欖石を含む玄武岩や安山岩が分布する。また、安山岩や玄武岩が岩脈としても分布する。葺石材の岩相と二上層群の火山岩とを比較すれば、葺石石材の流紋岩は雌岳に分布する流紋岩、石英安山岩は寺山付近の石英安山岩、安山岩は雄岳の安山岩、柘榴石安山岩は雄岳西麓に分布する柘

榴石安山岩、輝石安山岩Aは春日山の輝石安山岩、輝石安山岩Bは亀ノ瀬付近の輝石安山岩、玄武岩は芝山か岩脈として分布する玄武岩にそれぞれ似ている。

二上山に源をもつ谷川の礫の石種構成は、谷によって異なる。二上山東側の葛城市染野付近の谷では柘榴石安山岩と流紋岩の礫が多く、溶結凝灰岩の礫もみられる。同山北東麓の葛城市畠付近では安山岩の礫、北西側の葛下川上流となる谷では柘榴石安山岩や流紋岩の礫が多く、安山岩や玄武岩の礫も稀にみられる。しかし、この下流の葛城市穴虫付近になれば、柘榴石安山岩や安山岩、流紋岩の礫が多く、輝石安山岩Aの礫が僅かにみられる。原川の上流となる羽曳野市の寺山から春日山にかけての谷では輝石安山岩Aと石英安山岩の礫がみられる。この谷では板状節理が顕著な輝石安山岩Aが部分的にみられ、板状の石材も工具を使用して剥がせば得ることができる。輝石安山岩Bは柏原市峰の亀ノ瀬付近に分布する輝石安山岩の岩相に似ており、板状節理が顕著な場所は現在、地滑りが生じている部分である。

以上のような礫種分布と観察したトレーニングの石材の石種とを比較すれば、第4トレーニングの火山岩の石材は二上山雌岳麓の東側か西側付近、第6・7・8・9・11トレーニングの火山岩の石材は葛下川の上流付近と原川の上流付近の両地点で採石されたと推定される。また、第6・9・11トレーニングでは亀ノ瀬付近で採石できる輝石安山岩Bが稀にみられる。

深成岩の礫は染野付近から葛城市大田付近にかけての山麓の谷にみられる。黒雲母花崗岩の礫は染野から竹内かけての谷に、閃綠岩の礫は葛城市如意付近の谷に多くみられる。各トレーニングの深成岩の石材をみれば、火山岩に比べて非常に少なく、黒雲母花崗岩と閃綠岩の量比に明瞭な差がみられない。竹内と如意は僅か1km程しか離れていない地である。これらのことから、竹内と如意の谷は一つの採石場であったと推定される。

三吉陵墓参考地のトレーニングに出土した葺石は、石材の形状と石種の岩相比較をもとにすれば、葛下川の上流の谷、原川の上流の谷付近の礫を主として、葛城市竹内、同市如意の谷付近の礫を僅かに使用している。また、亀ノ瀬付近に分布する輝石安山岩の露岩や春日山に分布する輝石安山岩の露岩から剥がして採取したと推定される石材も僅かにある。

石材の石種と粒径

第4 トレンチの葺石

石種	石材の粒径(cm)									合計
	3~4	5~9	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	
流紋岩		3		3						6
石英安山岩										
安山岩										
柘榴石安山岩										
輝石安山岩A										
輝石安山岩B										
玄武岩										
アPLIT質黒雲母花崗岩		1	1							2
細粒黒雲母花崗岩	1	1		1						3
中粒黒雲母花崗岩		1	1							2
細粒閃綠岩										
中粒閃綠岩										
斑状斑纈岩	1	1		1						3
片麻状黒雲母花崗岩										
チャート										
石英										
合計		5	4	5	2					16

第6 トレンチの葺石

石種	石材の粒径(cm)									合計
	3~4	5~9	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	
流紋岩	2	94	193	86	25	3				403
石英安山岩										
安山岩		7	10	3						20
柘榴石安山岩	10	418	617	293	83	25	12	3		1461
輝石安山岩A	9	149	278	129	58	13	4	1	1	642
輝石安山岩B		1	2							3
玄武岩			3		2					5
アPLIT質黒雲母花崗岩		3	5	4	3					15
細粒黒雲母花崗岩		15	29	4		3				51
中粒黒雲母花崗岩				1						1
細粒閃綠岩	1	33	39	9						82
中粒閃綠岩		2	10	2	1	1				16
斑状斑纈岩		2	3	1						6
片麻状黒雲母花崗岩		4	4							8
チャート			4		1					5
石英		1		1						2
合計	23	732	1193	534	172	45	16	4	1	2720

第7 トレンチの葺石

石種	石材の粒径(cm)									合計
	3~4	5~9	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	
流紋岩			2	1	1					4
石英安山岩										
安山岩										
柘榴石安山岩		16	25	20	4					65
輝石安山岩A		4	8	5	4	1		2		24
輝石安山岩B										
玄武岩		1		2						3
アPLIT質黒雲母花崗岩		1								1
細粒黒雲母花崗岩										
中粒黒雲母花崗岩										
細粒閃綠岩		1	1							2

中粒閃緑岩				2							2
斑状斑纏岩											
片麻状黒雲母花崗岩											
チャート				1							1
石英											
合 計		23	36	31	9	1			2		102

第8 トレンチの葺石

石 種	石 材 の 粒 径 (cm)									合 計
	3~4	5~9	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	
流紋岩		4	2	4	1	1	1			13
石英安山岩		1	2		1					4
安山岩		1			1	1				3
柘榴石安山岩		19	39	38	20	7	3	1		127
輝石安山岩A	7	54	33	18	3	3	2		1	121
輝石安山岩B										
玄武岩										
アブライト質黒雲母花崗岩		2	1							3
細粒黒雲母花崗岩	1	3	4	3	1					12
中粒黒雲母花崗岩										
細粒閃緑岩		7			3					10
中粒閃緑岩			1	1	1					3
斑状斑纏岩										
片麻状黒雲母花崗岩										
チャート										
石英										
合 計	8	91	82	64	31	12	6	1	1	296

第9 トレンチの葺石（下段）

石 種	石 材 の 粒 径 (cm)									合 計
	3~4	5~9	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	
流紋岩		3	2	2	1					8
石英安山岩										
安山岩			1	1	1					3
柘榴石安山岩	3	22	37	28	8		1			99
輝石安山岩A	1	14	8	7	4	3	1			38
輝石安山岩B		1			1					2
玄武岩		1	1	3	1					6
アブライト質黒雲母花崗岩										
細粒黒雲母花崗岩		1								1
中粒黒雲母花崗岩										
細粒閃緑岩		3	13	4	1					21
中粒閃緑岩		3	1	1						5
斑状斑纏岩				3						3
片麻状黒雲母花崗岩										
チャート										
石英										
合 計	4	48	63	49	17	3	2			186

第9 トレンチの葺石（上段）

石 種	石 材 の 粒 径 (cm)									合 計
	3~4	5~9	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	
流紋岩		7	11	5	8	4	1			36
石英安山岩										
安山岩				1	1					2
柘榴石安山岩		6	20	3	3	1	2			35
輝石安山岩A		10	12	8	4	2				36
輝石安山岩B										

玄武岩						1				1
アライト質黒雲母花崗岩				1						1
細粒黒雲母花崗岩	1	3		2	1	1			1	9
中粒黒雲母花崗岩										
細粒閃緑岩		3		1						4
中粒閃緑岩	2									2
斑状斑纈岩										
片麻状黒雲母花崗岩										
チャート										
石英										
合 計		26	49	18	19	9	4		1	126

第11トレンチの葺石

石種	石材の粒径(cm)									合計
	3~4	5~9	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	
流紋岩		1	5	2						8
石英安山岩										
安山岩										
柘榴石安山岩	1	18	16	9	2					46
輝石安山岩A		10	6	6	3					25
輝石安山岩B			1							1
玄武岩										
アライト質黒雲母花崗岩		2	2	1	1					6
細粒黒雲母花崗岩		4	2							6
中粒黒雲母花崗岩										
細粒閃緑岩		4	1	1						6
中粒閃緑岩		5	2	1		1				9
斑状斑纈岩		2								2
片麻状黒雲母花崗岩										
チャート										
石英										
合 計	1	46	35	20	6	1				109

葺石の石種と粒径

石種	石材の粒径(cm)									合計
	3~4	5~9	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	
流紋岩	2	112	215	103	36	8	2			478
石英安山岩		1	2		1					4
安山岩		8	11	5	3	1				28
柘榴石安山岩	14	499	754	391	120	33	18	4		1833
輝石安山岩A	17	241	345	173	76	22	7	3	2	886
輝石安山岩B		2	3		1					6
玄武岩		2	4	5	3	1				15
アライト質黒雲母花崗岩		8	9	7	4					28
細粒黒雲母花崗岩	1	25	39	7	4	4	1		1	82
中粒黒雲母花崗岩			1	2						3
細粒閃緑岩	1	48	57	14	5					125
中粒閃緑岩		13	15	7	3	2				40
斑状斑纈岩		4	3	4						11
片麻状黒雲母花崗岩		4	4							8
チャート		4		2						6
石英	1			1						2
合 計	36	971	1462	721	256	71	28	7	3	3555

# 雄略天皇 丹比高鷲原陵外構柵その他整備工事に伴う立会調査

## はじめに

雄略天皇丹比高鷲原陵は、大阪府羽曳野市島泉8丁目に所在する。本陵は、古市古墳群の北西に位置し、その北東約1kmには藤井寺陵墓参考地が所在する。標記の外構柵の整備工事に伴う掘削では、いずれも近代盛土内の掘削であったため、ここでは、集水枠と集水管の設置に伴う掘削箇所の立会についての報告を行う。集水枠と集水管設置の目的は、界標11、12、13号によって平面三角形となっている場所が窪地で、雨が降る度そこに水が溜まり、時間が経過しても水が抜けないことから、そこから道路際の排水溝まで水が抜けるようにすることである。トレンチの設定は、界標11、12、13号によって平面三角形となっている場所を、第1トレンチから第7トレンチ、界標9号のすぐ北側、集水枠4の設置予定箇所を第8トレンチとした。トレンチの形状は、集水枠と集水管の掘形そのままである。陵墓課職員による立会調査は、平成23年1月11日から14日まで行ったが、それ以外の工事期間中は、古市陵墓監区事務所職員が隨時立ち会った。

## 層序

第1トレンチから第7トレンチにおける基本層序は、現表土（I）、旧表土（II）、地山（III）の順である。

I層 現表土。平成22年度工事時の盛土である。色調は灰黄褐色で、細粒砂から成る。

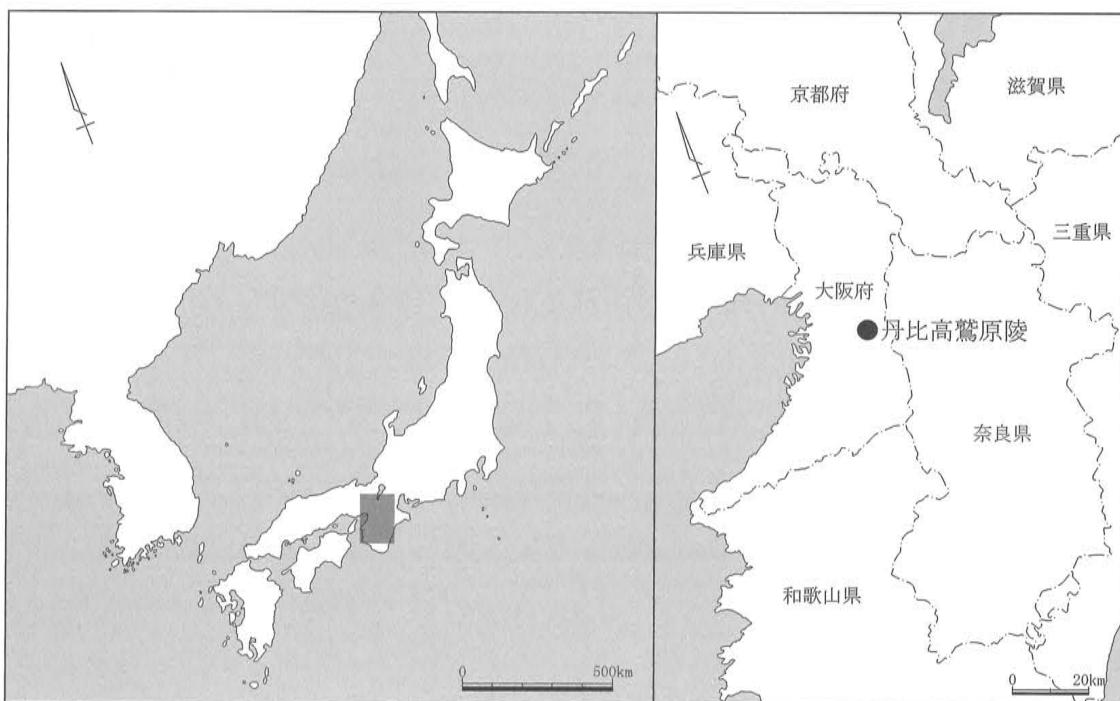
II層 旧表土。平成22年度工事以前の表土である。色調は褐色から黒褐色で、極細粒砂から成る。蓮根の茎や根が混じることから、蓮根畑の耕作土が含まれることが分かる。

III層 地山。調査地の基盤となる土層である。粗砂とシルトないし粘土が互層に堆積している。色調と粒径により、aからeまで細別できる。aは灰黄色からオリーブ灰色で、シルトから成る。bは黄褐色から赤褐色で、粗砂から成る。cは緑灰色からオリーブ灰色で、粘土とシルトから成る。dは灰黄色から赤褐色で、粗砂から成る。eはオリーブ灰色から赤褐色で、粘土とシルトから成る。

第8トレンチにおける基本層序は、表土（I）、盛土（II）、地山（III）の順である。

I層 表土。現表土である。色調は灰黄色で、細粒砂から成る。

II層 盛土。遺物の出土は皆無であったが、間層が見られず、明らかに短期間に堆積したものであること



第32図 丹比高鷲原陵 概略位置図 (1/25,000,000、1/2,000,000)

から、盛土と判断した。色調と粒径により、a と b に細別できる。a は黄褐色で、細粒砂から成る。  
b は褐色で、細粒砂から成る。地山起源のシルトブロックが混じる。

III層 地山。調査地の基盤となる土層である。色調は緑灰色からオリーブ灰色で、シルトから成る。

## トレンチ

第1トレンチから第7トレンチの状況は、ほぼ同様である。表土下に地山が残るのみで、遺構および遺物は検出されなかった。3、4、6、7トレンチは地山のみであり、工事の関係から表土も残っていなかった。現状の地山は、標高約22mで、ほぼ平坦であるが、第1トレンチの南端付近では、標高約22.8mまで上がっている。調査地は、一般的に平塚古墳と呼ばれる陵域内の方形墳丘部分を正方形に復元した際の南西角付近であるが、方形墳丘は低いところでも標高約23.5mであることから、約1.5mもの比高差から考えて、方形墳丘本来の部分は既に失われている可能性がある。

第8トレンチでは、表土下に盛土と地山が確認できたが、遺構および遺物は検出されなかった。表土下の盛土は、中央に盛り上がった地山を挟んで東西で異なるが、東西双方近代における整備時に周囲を平坦にするために盛られたもの可能性がある。特に、東側の盛土は、位置的に平成10年度の調査<sup>(1)</sup>で検出した近代盛土との関係が考えられる。また、地山の形状については、第8トレンチが、陵域内の方形墳丘部分を正方形に復元した際の南東角付近であることから、方形墳丘と関わるもの可能性がある。

## まとめ

今回の調査では、陵域内の方形墳丘との関係が考えられる地山の盛り上がりを検出した以外、遺構および遺物は確認されず、整備工事は予定どおり施工した。

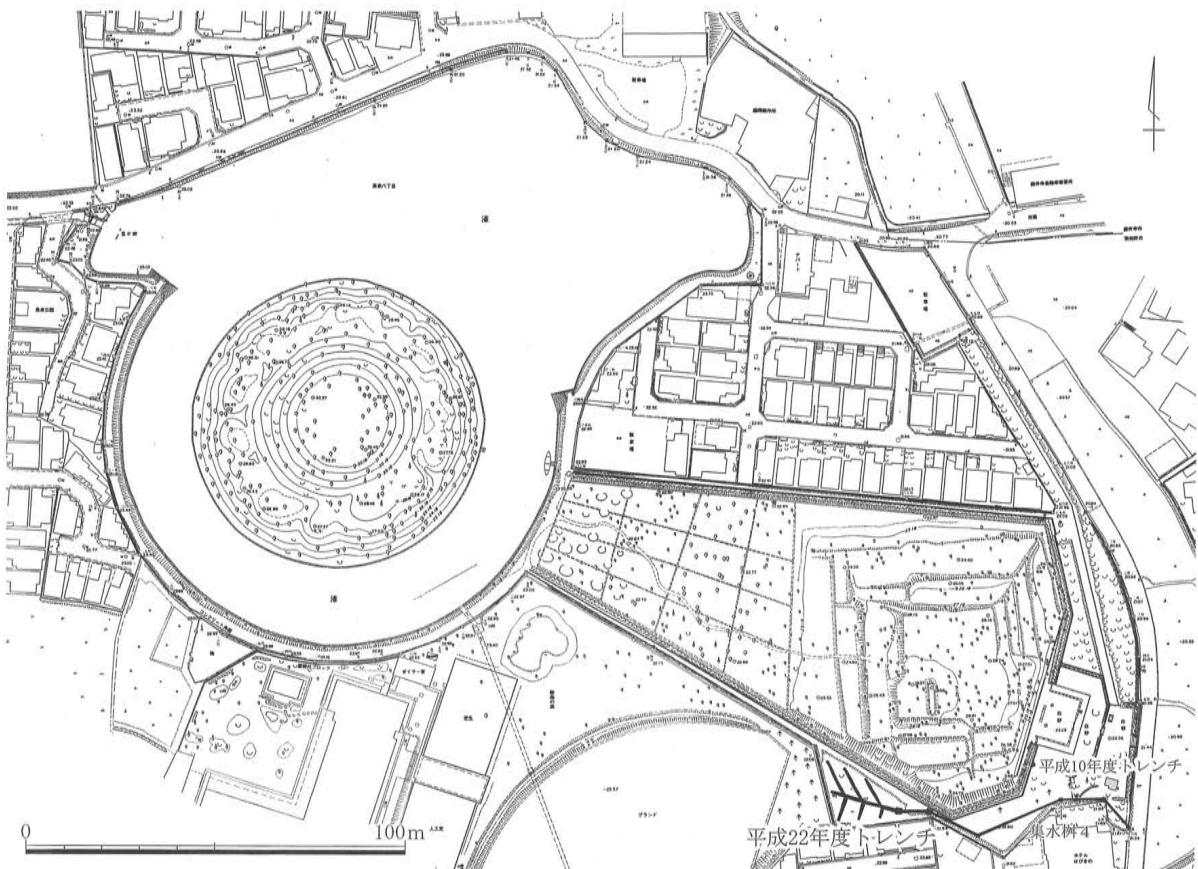
(横田真吾)

## 註

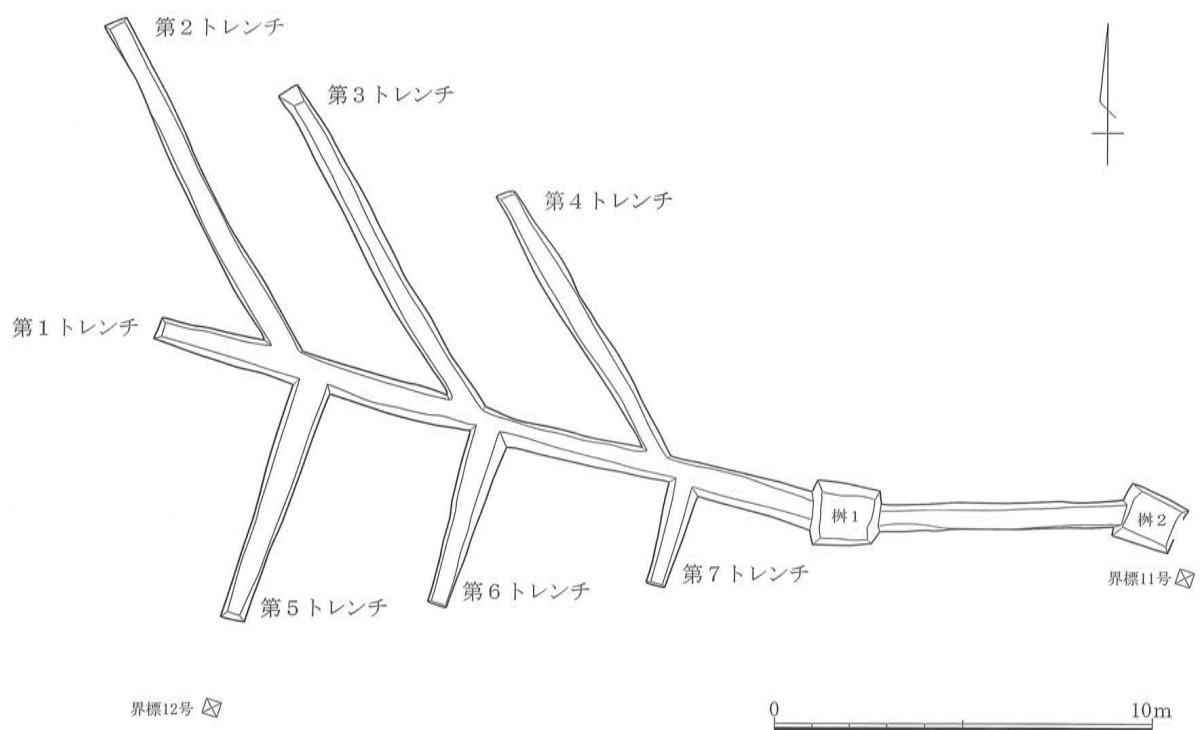
- (1) 清喜裕二「雄略天皇 丹比高鷲原陵見張所改築工事箇所の調査」『書陵部紀要』第51号、宮内庁書陵部、2000年。



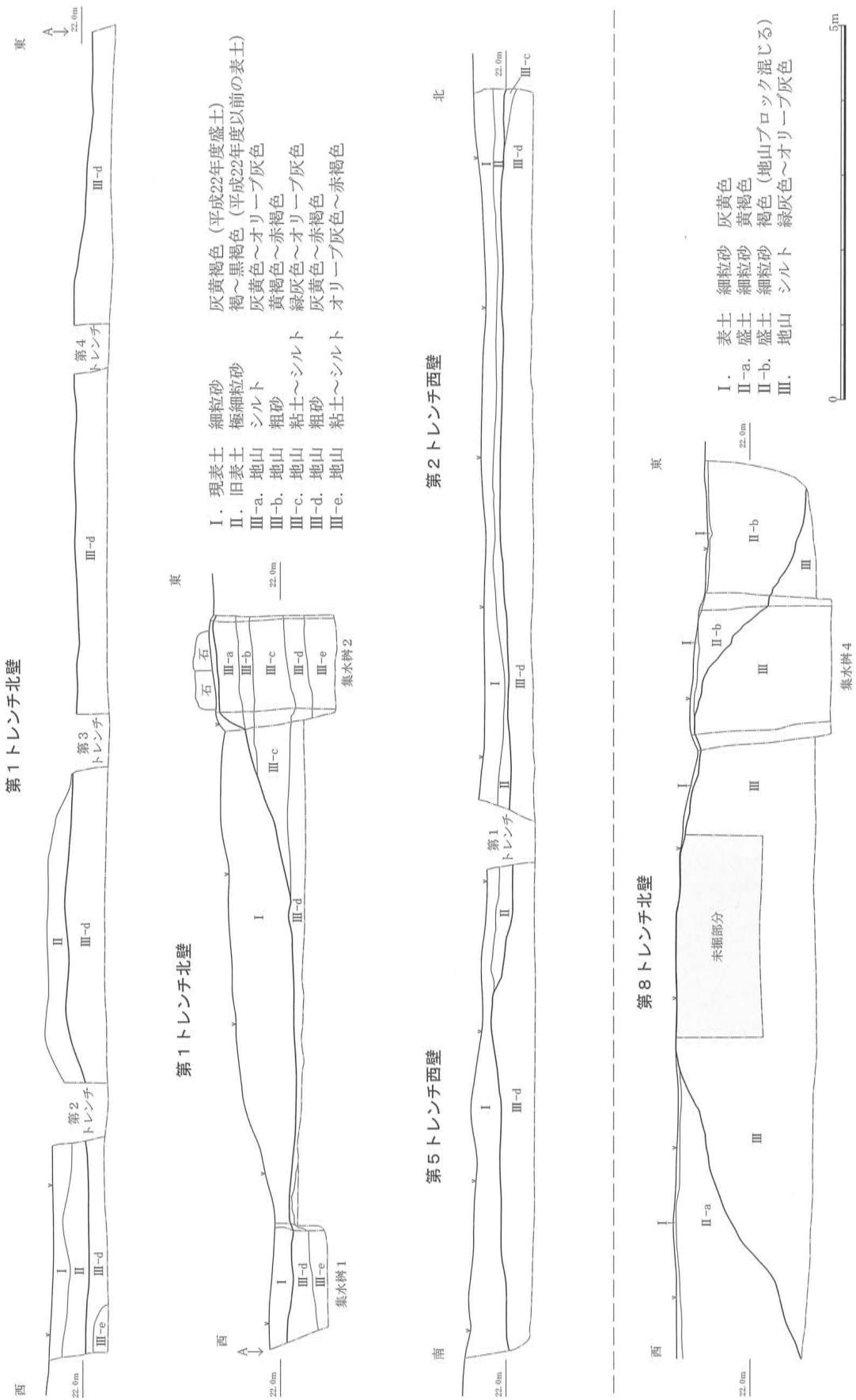
第33図 丹比高鷲原陵 詳細位置図 (1/20,000)



第34図 丹比高鷲原陵 地形図 (1/2,000)



第35図 丹比高鷲原陵 トレンチ平面図 (1/200)



第36図 丹比高鷲原陵 工事箇所土層断面図 (1/80)

# 百舌鳥陵墓参考地 墳丘裾護岸その他整備工事に伴う立会調査

## はじめに

百舌鳥陵墓参考地は、堺市北区百舌鳥本町1丁に所在する前方後円墳であり、百舌鳥古墳群のほぼ中央に位置する。本参考地については墳丘端部から裾にかけてが急傾斜をなしており、護岸整備工事が必要な状況であった。そのために施工地における遺構・遺物の有無を確認することと、遺構が確認された場合には最善の保護策を講じるべく工法を検討する情報を得るために平成20年10月～12月にかけて事前調査をおこなった。この調査は当庁境界外を堺市文化財課が同時に調査し、その結果はそれぞれの機関から報告書が刊行されている。よって、事前調査の内容についてはこれらの報告を参照されたい<sup>(1)(2)</sup>。

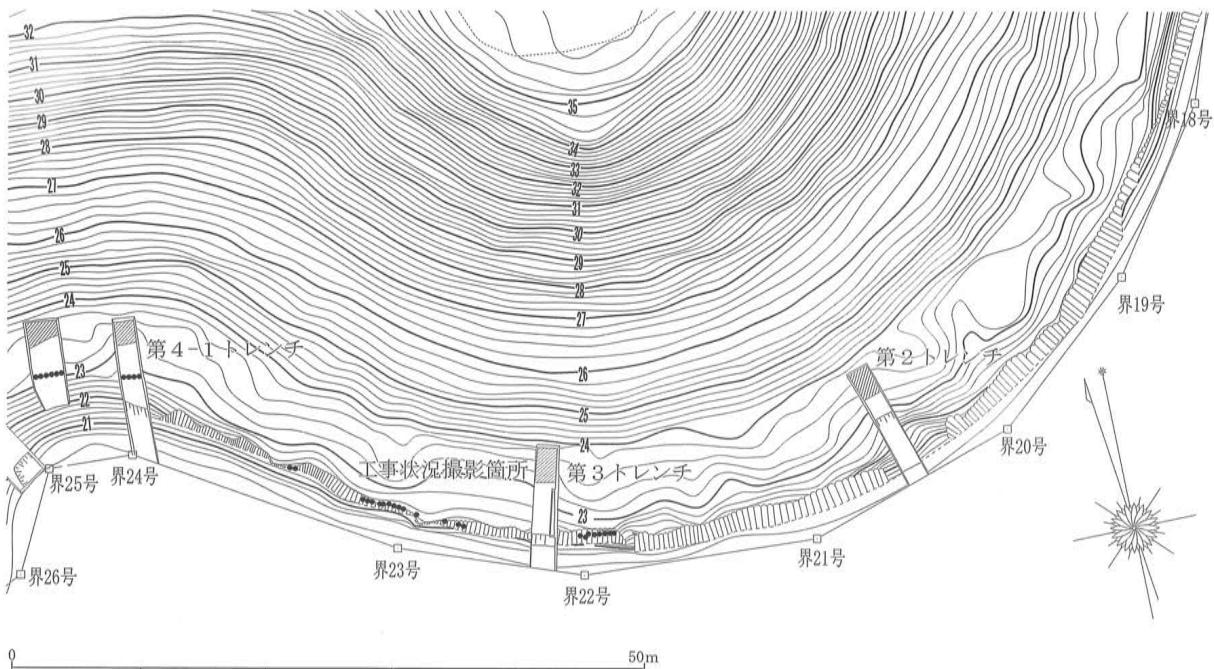
この事前調査によって、本参考地の墳裾が崖状を呈している理由は、単に濠水の波浪による浸食だけではない可能性が高まった。調査において出土した陶磁器類により、江戸時代にあって貯水量確保の目的から墳裾を削ることによって濠幅を広くし、さらには堆積土を浚渫して第1段テラス上に積み上げたことによって現在の墳丘になったと考えられる。

さて、この護岸整備工事を平成22年度に実施するにあたっては、一切掘削を伴わない工法を採用した。そのため立会調査の内容は施工状況の確認と、事前調査以降に落下した埴輪片を回収するものである。調査は平成22年11月17日から19日の3日間は、本部職員が現地において調査に従事した。その他工事期間中は百舌鳥部職員によって施工箇所を巡回し、埴輪片などの採集に努めた。結果的には後述する後円部南側においてのみ埴輪片は採集されており、その他の施工地においては一切落下していなかった。

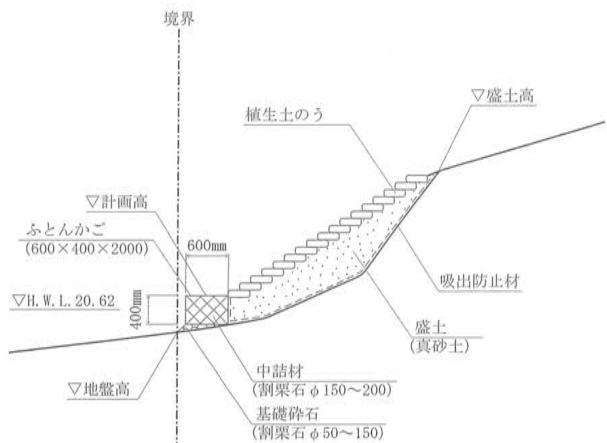
なお、調査の実施にあたっては、堺市文化財課よりご助言賜った。記して、感謝申し上げる次第である。

## 工 法

今回施工した工法の模式図は、第38図に示したとおりである。境界線内側ぎりぎりに布団かご（長2m×幅0.6m×高0.4m）を設置し、この布団かごを起点として植生土嚢を積み上げるものである。もう少し細かく見ていくと、布団かごは満水時にかごの半分が水面からであるように設置し、そのために碎石を敷い



第37図 百舌鳥陵墓参考地 墳輪片採集箇所位置図 (1/600)



第38図 百舌鳥陵墓参考地 護岸工事模式図

て高さを調整する。この碎石及び布団かごの中に入れる石材は、葺石として使用されている石材とは区別できるように大阪府岸和田産の花崗岩とした。そして墳丘斜面には吸出防止材である合成繊維製のマットを敷き、その上に盛土（真砂土）を施す。その上に種子（トルフェスク・クリーピング・レット・フェスク等）を仕込んだ土嚢を積み上げる。この土嚢は施工箇所によって積み上げる段数を変え、安定勾配となるよう施工した。

この工法の正否は、今しばらくこの植生土嚢に仕込んだ種が芽吹き、自生することによって安定した勾配を保ち続けるか否かを注視していく必要があろう。さらには、この植生土嚢の及ぼす生物環境への影響についても見守っていく必要がある。  
 (徳田誠志)



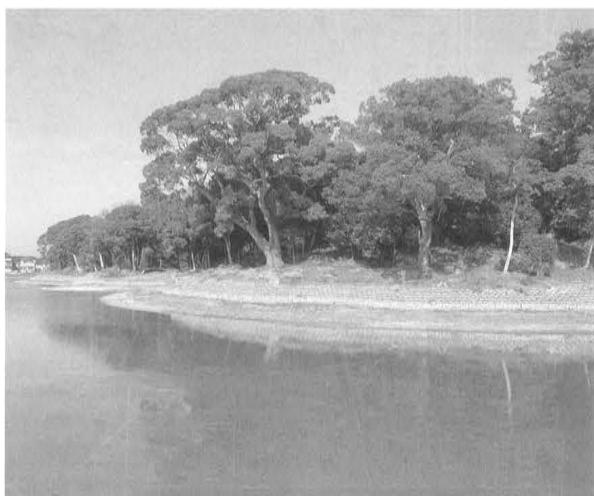
(1) 施工前



(2) 施工中

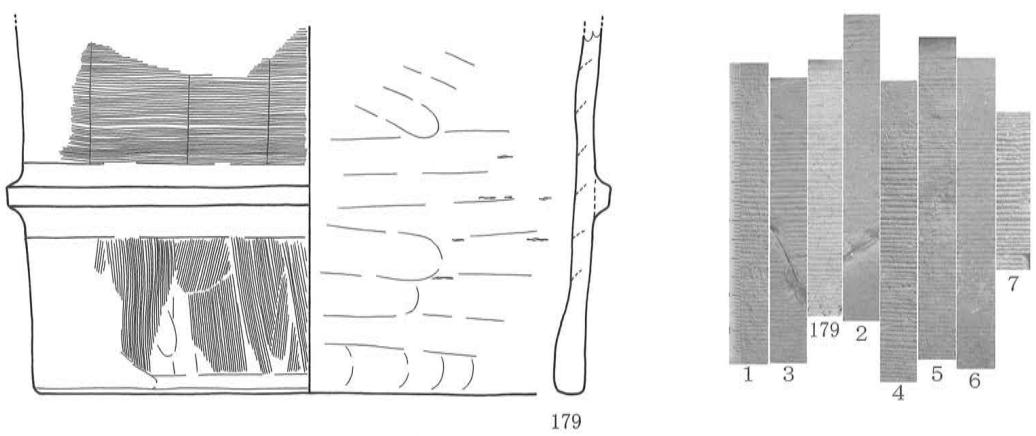


(3) 施工直後

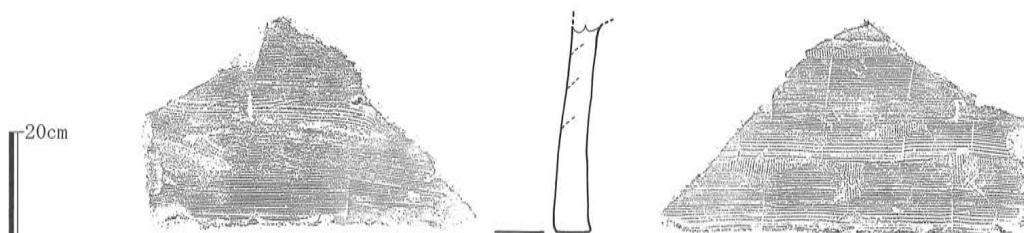


(4) 施工完了

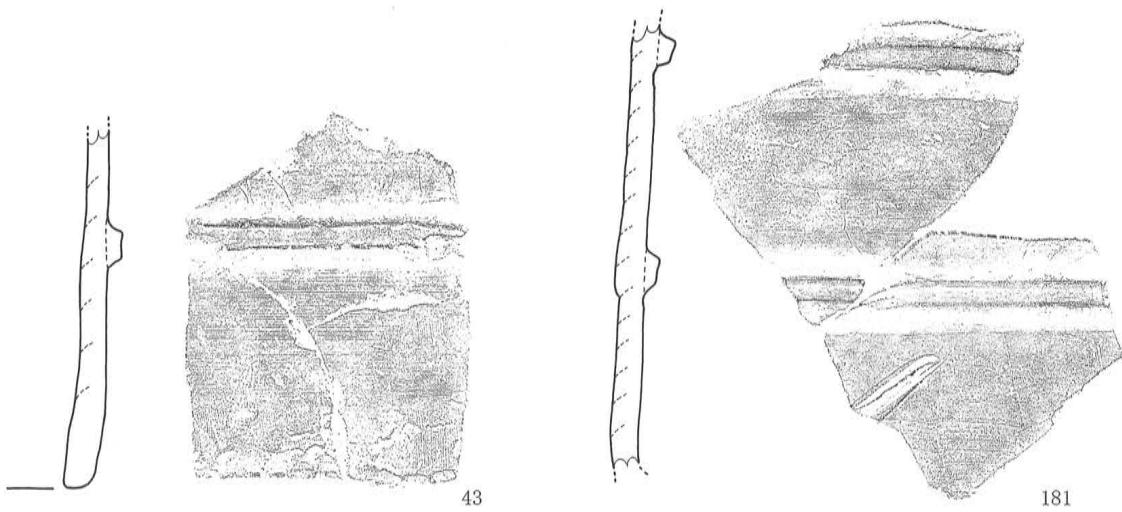
第39図 百舌鳥陵墓参考地 施工状況図



179



180



43

181

第40図 百舌鳥陵墓参考地 採集品実測図 (1) 円筒埴輪・朝顔形埴輪 (1/4)

## 採集遺物

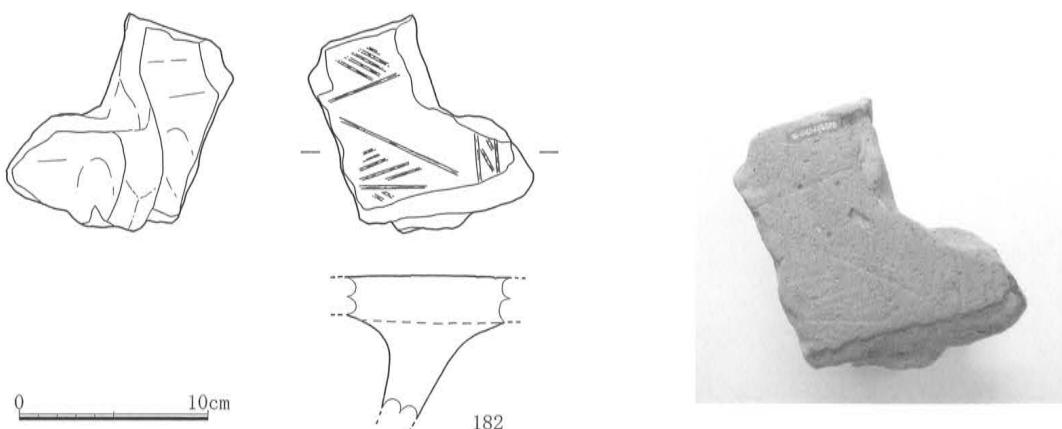
上でも述べたように、今回の調査は掘削をともなわないのであったことから出土した遺物は存在しないが、おもに後円部南側の境界標石 23 号の周辺（平成 20 年度調査の第 3 トレンチ西付近）から埴輪片が 104 点採集された。採集された埴輪の特徴はこれまでに報告されている百舌鳥陵墓参考地における出土品の特徴と大きく変わるものではないが、ここでは比較的大きい破片を中心にそれらについて報告しておきたい。なお、挿図中の遺物番号についてはこれまでの報告との重複をさけるために 179 から番号をつけた。

179 は本誌第 61 号で報告した 1 ~ 7 と同一のハケメをもつ。底径は 28.4 cm で、第 1 段高は 10.9 cm である。外面調整は第 1 段がタテハケで、第 2 段がおそらく B c 種ヨコハケである。内面調整はナデである。第 1 段高はやや異なるが、6 と同一製作である可能性が考えられる。180 は二破片あるが、同一個体と思われるものである。上は底部を含む破片で、第 1 段高は 12.5 cm 前後であったものと推測される。内面にも横方向のハケを念入りにほどこしている点が、本参考地の埴輪としては例外的といえる。下の破片では、突帯剥離箇所において突帯設定にかかわる凹線を確認できる。なお、180 と同一のハケメはこれまでの出土品から確認できていない。43 は平成 20 年度の調査における採集品である 43（3 トレ西表採）との接合が確認されたため、この番号を付している。181 は胴部の 2 段分を含む破片である。外面調整はまだハケメの凹凸がでていない板ナデ的な B c 種ヨコハケである。外面の下段には工具痕あるいはヘラ記号にもみえる痕跡を確認できる。182 は盾形埴輪と考えられる破片である。本参考地における盾形埴輪の存在は確認されていなかったため、これがはじめての例となる。盾面の線刻をみると、盾の内区紋様が鋸歯紋によって構成されていることがわかる。なお、この破片のみ後円部南側の境界標石 22 号付近（平成 20 年度の調査の第 3 トレンチ東付近）において採集されており、後円部墳頂から転落したものと推測される。これまでの調査においては形象埴輪は造出周辺から出土する傾向を示していたが、そうではない点が注意される。

（加藤一郎）

## 註

- (1) 陵墓調査室「百舌鳥陵墓参考地 墳丘裾護岸その他整備工事に伴う事前調査」『書陵部紀要』第 61 号〔陵墓篇〕、宮内庁書陵部、2010 年。
- (2) 堺市教育委員会『御廟山古墳（GBY-6）発掘調査報告書』2011 年。



第41図 百舌鳥陵墓参考地 採集品実測図（2） 盾形埴輪（1/4）

